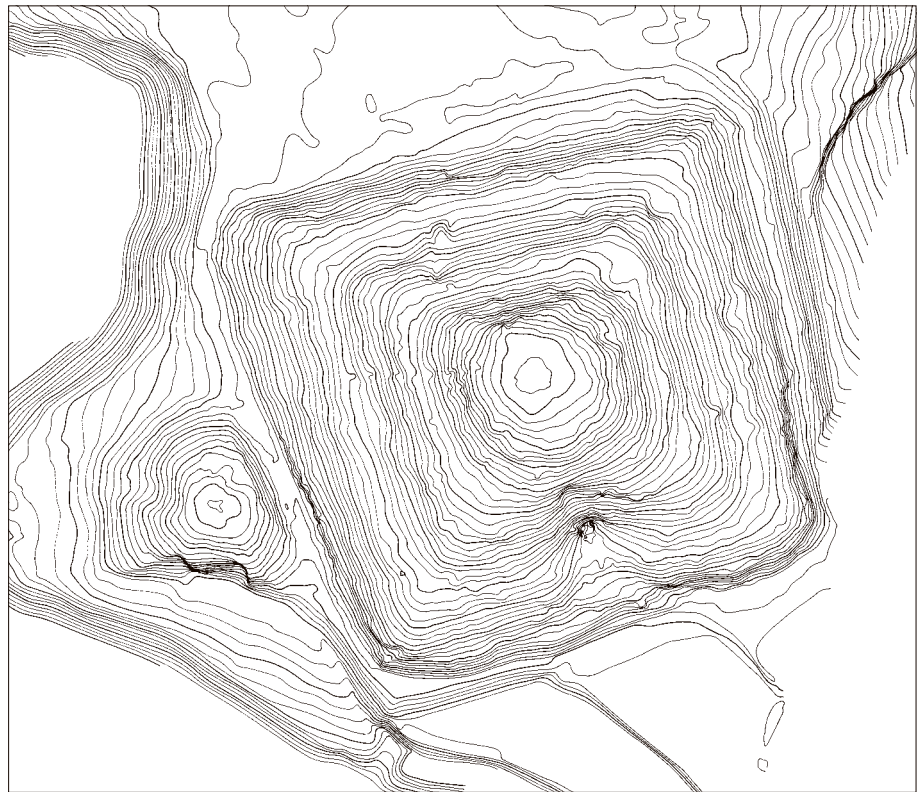


# 赤坂天王山古墳群の研究

—測量調査報告書—



2018. 6

公益財団法人桜井市文化財協会

# 赤坂天王山古墳群の研究

—測量調査報告書—

2018. 6

公益財団法人桜井市文化財協会



天王山古墳群全景（上が北）  
▲は1号墳を示している





天王山1号墳玄室全景（南より）



# 序

私達の桜井市は大和平野の東南部に位置し、市域の約3割を占める平野部の中央には山地より流れ出る粟原川、寺川、初瀬川、巻向川等の清流を集めた大和川がほぼ東西に横断し、この大和川を挟んで南は茶臼山古墳をはじめとしてメスリ山古墳、安倍寺、上之宮遺跡、大福遺跡、北では芝遺跡、箸墓古墳、纏向遺跡など全国的にも貴重な文化遺産が数多く知られています。

桜井市ではこれらの遺跡を保護し、啓発するための事業の一つとして市内遺跡の調査・保存に力をいれておりますが、ここに報告させて頂くのは桜井市教育委員会文化財課の職員が企画・実施した赤坂天王山古墳群の測量調査報告であります。

本報告書の刊行は調査成果の重要性を鑑みて公益財団法人桜井市文化財協会調査研究報告として出版を引き受けることとなったものです。

当協会としてはこれを機会として今後も埋蔵文化財にとどまらず、桜井市内所在の文化財の保護・活用のために調査・研究を実施・支援し、機会があれば研究報告としてこのシリーズの刊行を続けていく所存ですので、皆様方の御協力と御支援を御願ひする次第です。

最後になりましたが、現地調査・報告書の作成にあたって指導・助言を頂いた多くの関係機関の方々、地主及び地元協力者の方々に厚く御礼申し上げますとともに、この多くの皆様の御協力のもとに成った本書が文化財の普及・啓発の一助となり、研究者の方々の資する所となれば望外の喜びであります。

平成30年6月1日

公益財団法人桜井市文化財協会

理事長 松 井 正 剛





## 例 言

1. 本書は奈良県桜井市大字倉橋字赤坂所在の赤坂天王山古墳群<sup>あかさかてんのうざん</sup>の測量調査報告書である。調査は平成12年1月から開始したもので、途中何年かの空白期間を挟んで平成21年7月までの間に十数回の現地調査を実施したものである。
2. 調査担当者：現地調査は主に桜井市教育委員会文化財課課長 橋本輝彦が担当し、実施過程の中で随時同課副主幹 福辻淳、主査 松宮昌樹・丹羽恵二、臨時職員 橋爪朝子（平成20年度まで）・木場佳子（平成28年度まで）の協力を得た。
3. 調査協力者：現地調査、報告書作成を通じて以下の方々に御指導、御協力を頂いた。記して感謝いたします。（所属・肩書はいずれも調査当時のもの。敬称略。）  
中出喜代廣（倉橋出屋敷区長）、寺沢薫・関川尚功・米川仁一（奈良県立橿原考古学研究所）、奥田尚（奈良県立橿原考古学研究所共同研究員）、萩原儀征（桜井市文化財保護審議会委員）、佐藤右文（アートフォト右文）、西本智弘（㈱アイシー）
4. 執筆者：本書の執筆は調査担当者である橋本の他に、天王山1・3号墳の石室石材の分析を奈良県立橿原考古学研究所特別指導研究員の奥田尚氏に、石棺に残る赤色顔料の分析を奈良県立橿原考古学研究所の奥山誠義氏にお願いし、玉稿を頂戴した。記して感謝いたします。
5. 本書で使用した写真資料のうち、航空写真は㈱アイシー、1・3号墳の石室写真は佐藤右文氏、その他のものは橋本の撮影によるものである。
6. 本書掲載の挿図のうち、図1は桜井市農林課より地形図の提供を受けたものである。
7. 報告書刊行機関：公益財団法人桜井市文化財協会理事長 松井正剛、副理事長 上田陽一、事務局長 竹田勝彦、参与 中村利光、職員 武田雄志・西村知浩
8. 報告書編集機関：桜井市纏向学研究センター所長 寺沢薫、統括研究員 橋本輝彦、主任研究員 福辻淳、研究員 松宮昌樹・丹羽恵二・森暢郎・飯塚健太、嘱託研究員 三澤朋未・藤村裕美・中屋奈緒
9. 補助員：広瀬佑紀（京都橘大学卒業生）
10. 編集・統轄者：橋本輝彦
11. 本書における方位・座標値はすべて世界測地系を使用している。また、レベル高は海拔高を示している。
12. 測量成果及び調査記録の一切は桜井市教育委員会において管理・保管している。活用されたい。



# 目 次

序

例言

目次

## 第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯……………(橋本)… 1

第2節 調査の経過……………(橋本)… 1

## 第2章 位置と環境

第1節 地理的環境……………(橋本)… 5

第2節 歴史的環境……………(橋本)… 6

## 第3章 既往の調査

第1節 古記録にみる天王山古墳群……………(橋本)… 13

第2節 大和國古墳墓取調書にみる天王山古墳群……………(橋本)… 14

第3節 奈良縣史蹟勝地調査会による調査……………(橋本)… 15

第4節 田村吉永による調査……………(橋本)… 17

第5節 日本古文化研究所による測量調査……………(橋本)… 18

## 第4章 測量報告

第1節 古墳群の分布とその名称……………(橋本)… 22

第2節 各古墳の現況……………(橋本)… 23

1. 天王山1号墳…………… 23

2. 天王山2号墳…………… 39

3. 天王山3号墳…………… 40

4. 天王山4号墳…………… 51

5. 天王山5号墳…………… 51

6. 天王山6号墳…………… 51

7. 天王山7号墳…………… 53

8. 天王山8号墳…………… 54

9. 天王山9号墳…………… 54

10. 天王山10号墳…………… 55

11. 天王山11号墳…………… 55

12. 天王山12号墳…………… 56

13. 天王山13号墳…………… 56



|                             |         |
|-----------------------------|---------|
| 14. 天王山14号墳                 | 56      |
| 15. 天王山15号墳                 | 58      |
| 第5章 分析編                     |         |
| 第1節 天王山1号墳・天王山3号墳に使用されている石材 | (奥田) 59 |
| 1. はじめに                     | 59      |
| 2. 石種の特徴と採石推定地              | 59      |
| 3. 石材の使用傾向                  | 60      |
| 第2節 天王山1号墳の家形石棺付着の赤色顔料の分析   | (奥山) 64 |
| 1. はじめに                     | 64      |
| 2. 資料                       | 64      |
| 3. 調査方法                     | 64      |
| 4. 結果                       | 65      |
| 5. まとめ                      | 65      |
| 第6章 まとめ                     |         |
| 第1節 天王山古墳群の概要               | (橋本) 67 |
| 第2節 天王山1号墳の概要               | (橋本) 68 |
| 1. 墳丘の立地と周囲の古墳              | 68      |
| 2. 墳丘の復元とその規模               | 68      |
| 3. 石室・石棺の様子                 | 70      |
| 4. 築造年代について                 | 71      |
| 5. 牧野古墳の石室との比較              | 72      |
| 第3節 調査の成果と今後の課題             | (橋本) 72 |
| 1. 調査の成果について                | 74      |
| 2. 今後に向けて                   | 74      |
| あとがき                        |         |

## 挿 図 目 次

|     |                                   |       |
|-----|-----------------------------------|-------|
| 図1  | 天王山古墳群周辺の地形と遺跡分布図 (1/5,000) ..... | 3・4   |
| 図2  | 桜井市の位置 .....                      | 5     |
| 図3  | 桜井市の地質 .....                      | 5     |
| 図4  | 赤坂天王山古墳群と周辺の遺跡 (1/20,000) .....   | 7     |
| 図5  | 『大和國古墳墓取調書』所収の1号墳 .....           | 14    |
| 図6  | 奈良縣史蹟勝地調査会による石室測量図 .....          | 15    |
| 図7  | 奈良縣史蹟勝地調査会による石棺実測図1 .....         | 16    |
| 図8  | 奈良縣史蹟勝地調査会による石棺実測図2 .....         | 16    |
| 図9  | 田村吉永による墳丘測量図 .....                | 17    |
| 図10 | 日本古文化研究所による地形略測図 .....            | 18    |
| 図11 | 日本古文化研究所による天王山1号墳墳丘測量図 .....      | 18    |
| 図12 | 日本古文化研究所による石室実測図 .....            | 19    |
| 図13 | 日本古文化研究所による石棺実測図 .....            | 19    |
| 図14 | 日本古文化研究所による天王山2・3号墳石室略測図 .....    | 20    |
| 図15 | 天王山古墳群の分布状況 (1/1,000) .....       | 22    |
| 図16 | 天王山1号墳周辺の地形測量図1 (1/600) .....     | 24    |
| 図17 | 天王山1号墳周辺の地形測量図2 (1/600) .....     | 25    |
| 図18 | 1号墳石室実測図 (1/80) .....             | 27・28 |
| 図19 | 1号墳石室三次元計測図1 (1/70) .....         | 30・31 |
| 図20 | 1号墳石室三次元計測図2 (1/70) .....         | 32    |
| 図21 | 1号墳の石室の位置 (1/800) .....           | 32    |
| 図22 | 1号墳墳丘断面図 (1/400) .....            | 33    |
| 図23 | 1号墳石棺実測図 (1/40) .....             | 35    |
| 図24 | 1号墳石棺の破損状況 (1/40) .....           | 37    |
| 図25 | 天王山古墳群西尾根部の地形測量図1 (1/600) .....   | 41    |
| 図26 | 天王山古墳群西尾根部の地形測量図2 (1/600) .....   | 42    |
| 図27 | 3号墳石室実測図 (1/80) .....             | 43・44 |
| 図28 | 3号墳石室三次元計測図1 (1/50) .....         | 46・47 |
| 図29 | 3号墳石室三次元計測図2 (1/50) .....         | 48    |
| 図30 | 3号墳の石室の位置 (1/800) .....           | 50    |
| 図31 | 3号墳墳丘断面図 (1/400) .....            | 50    |

|     |                      |    |
|-----|----------------------|----|
| 図32 | 4～12号墳墳丘復元案（1／400）   | 52 |
| 図33 | 出土須恵器実測図（1／3）        | 55 |
| 図34 | 13～15号墳墳丘復元案（1／400）  | 57 |
| 図35 | 岩石の分布と石室材の採取推定地      | 61 |
| 図36 | 天王山1号墳の石室に使用されている石材  | 62 |
| 図37 | 天王山3号墳の石室に使用されている石材  | 63 |
| 図38 | 石棺サンプル採集位置図（1／4）     | 64 |
| 図39 | 1号墳の赤色顔料の蛍光X線スペクトル   | 66 |
| 図40 | 1号墳墳丘復元案（1/500）      | 69 |
| 図41 | 1号墳墳丘断面復元案2（1/500）   | 69 |
| 図42 | 1号墳と牧野古墳の石室比較（1/120） | 73 |

## 写真目次

|     |                              |    |
|-----|------------------------------|----|
| 写真1 | 3号墳の石室材鑑定の様子                 | 1  |
| 写真2 | 崇峻天皇陵の様子                     | 13 |
| 写真3 | 11号墳北東採集の須恵器（1／3）            | 55 |
| 写真4 | 1号墳の赤色顔料（サンプルA）              | 65 |
| 写真5 | 1号墳の赤色顔料のSEM画像（サンプルA 500倍）   | 65 |
| 写真6 | 1号墳の赤色顔料のSEM画像（サンプルA 2,000倍） | 65 |
| 写真7 | 1号墳の赤色顔料のSEM画像（サンプルB 500倍）   | 65 |
| 写真8 | 1号墳の赤色顔料のSEM画像（サンプルB 3,500倍） | 66 |

## 表目次

|    |                  |    |
|----|------------------|----|
| 表1 | 天王山1号墳の石室材の石種と粒径 | 61 |
| 表2 | 天王山3号墳の石室材の石種と粒径 | 61 |
| 表3 | 天王山古墳群墳丘規模等一覧    | 67 |
| 表4 | 天王山1号墳と牧野古墳の規模   | 72 |

# 図版目次

## 巻頭図版 1

天王山古墳群全景（上が北）

## 巻頭図版 2

天王山 1 号墳玄室全景（南より）

## 図版 1 天王山古墳群（1）

天王山古墳群全景 1（北西より）

天王山古墳群と栗原谷（西より）

## 図版 2 天王山古墳群（2）

天王山古墳群全景 2（上が北）

天王山古墳群全景 3（南西より）

## 図版 3 天王山古墳群（3）

天王山古墳群全景 4（北より）

天王山古墳群全景 5（南東より）

## 図版 4 天王山 1 号墳（1）

墳丘南面裾部の様子（東南より）

墳丘南西隅基底から

基壇部の様子（東南より）

## 図版 5 天王山 1 号墳（2）

墳丘南面の様子 1（東より）

墳丘南面の様子 2（南より）

## 図版 6 天王山 1 号墳（3）

墳丘南面の様子 3（墳頂より南を撮影）

墳丘南東隅部の様子（墳頂より南東を撮影）

## 図版 7 天王山 1 号墳（4）

墳丘北東隅部の様子（墳頂より北東を撮影）

墳丘北面の様子（墳頂より北を撮影）

## 図版 8 天王山 1 号墳（5）

墳丘北西隅部の様子（墳頂より北西を撮影）

墳丘西面の様子（墳頂より西を撮影）

## 図版 9 天王山 1 号墳（6）

墳丘南西隅部の様子（墳頂より南西を撮影）

墳頂面の様子

（墳頂部北辺より南方向を撮影）

## 図版 10 天王山 1 号墳（7）

墳丘東面全景（北より）

墳丘東面上段平坦面の様子（北より）

## 図版 11 天王山 1 号墳（8）

墳丘東面下段平坦面の様子（北より）

墳丘東面下段平坦面の様子（南より）

## 図版 12 天王山 1 号墳（9）

墳丘東面基底から基壇部の様子（北より）

墳丘東面基底から基壇部の様子（南より）

## 図版 13 天王山 1 号墳（10）

墳丘北東隅基底部の様子（東より）

墳丘北面全景 1（東より）

## 図版 14 天王山 1 号墳（11）

墳丘北面全景 2（西より）

墳丘北面の段築の様子（西より）

## 図版 15 天王山 1 号墳（12）

墳丘北面上段平坦面の様子（東より）

墳丘北面下段平坦面の様子（北より）

## 図版 16 天王山 1 号墳（13）

墳丘北面基底部の様子（東より）

墳丘北西隅基底部の様子（北より）

## 図版 17 天王山 1 号墳（14）

墳丘西面全景 1（北より）

墳丘西面上段平坦面の様子（北より）

## 図版 18 天王山 1 号墳（15）

墳丘西面下段平坦面の様子（北より）

墳丘西面基底部の様子 1（北より）

## 図版 19 天王山 1 号墳（16）

墳丘西面基底部の様子 2（南より）

墳丘南西隅の基底から基壇部の様子 1  
（北より）

## 図版 20 天王山 1 号墳（17）

墳丘南西隅の基底と基壇部の様子 2

（北東より）

墳丘南西隅の基底と基壇部の様子 3

（北西より）

## 図版 21 天王山 1 号墳（18）

墳丘南面石室開口部の様子 1（南より）

墳丘南面石室開口部の様子 2（南より）

## 図版 22 天王山 1 号墳（19）

石室開口部右側壁の様子（東南より）

石室開口部閉塞石？の様子（西南より）

図版23 天王山1号墳(20)

玄室全景(南より)  
玄室天井部の様子(上が北)

図版24 天王山1号墳(21)

前壁の様子1(北西より)  
前壁の様子2(北東より)

図版25 天王山1号墳(22)

玄室奥部左隅の様子(南西より)  
玄室奥部右隅の様子(南東より)

図版26 天王山1号墳(23)

左袖部の様子(北西より)  
左袖上部の様子(北西より)

図版27 天王山1号墳(24)

右袖部の様子(北東より)  
右袖上部の様子(北東より)

図版28 天王山1号墳(25)

羨道の様子(北より)  
閉塞石露出状況(北より)

図版29 天王山1号墳(26)

左袖部および羨道左側壁の様子(北西より)  
右袖部および羨道右側壁の様子(北東より)

図版30 天王山1号墳(27)

玄室と石棺の様子(南より)  
石棺南小口の様子(南より)

図版31 天王山1号墳(28)

石棺全景(南東より)  
石棺全景(北東より)

図版32 天王山1号墳(29)

石棺南小口加工部(南より)  
石棺北小口穿孔部(北より)

図版33 天王山1号墳(30)

棺蓋上面及び縄掛け突起の様子1(上が南)  
棺蓋上面及び縄掛け突起の様子2(上が北)

図版34 天王山1号墳(31)

棺蓋南西縄掛け突起(西より)  
棺蓋南西縄掛け突起(北西より)

図版35 天王山1号墳(32)

棺蓋南西縄掛け突起(南西より)  
棺蓋北西縄掛け突起部(北西より)

図版36 天王山1号墳(33)

棺蓋南東縄掛け突起(南東より)  
棺蓋南東縄掛け突起(北東より)

図版37 天王山1号墳(34)

棺蓋北東縄掛け突起(南東より)  
棺蓋南縄掛け突起(南より)

図版38 天王山1号墳(35)

棺蓋南縄掛け突起(西南より)  
棺蓋南縄掛け突起(東南より)

図版39 天王山1号墳(36)

棺蓋北縄掛け突起(北より)  
棺蓋北縄掛け突起(北東より)

図版40 天王山1号墳(37)

棺蓋北縄掛け突起(北西より)  
棺蓋東傾斜面に残る工具痕跡(東より)

図版41 天王山1号墳(38)

棺蓋西傾斜面に残る工具痕跡(西より)  
棺蓋南縄掛け突起下に残る工具痕跡(南より)

図版42 天王山1号墳(39)

石棺内部北小口の様子(南より)  
石棺内部南小口の様子(北より)

図版43 天王山1号墳(40)

石棺内部西棺側及び北小口の様子(南より)  
石棺内部東棺側及び北小口の様子(南より)

図版44 天王山1号墳(41)

石棺内部北側天井部の工具痕(南西より)  
石棺内部南側天井部の工具痕(北より)

図版45 天王山2号墳(1)

墳丘全景(北東より)  
墳丘全景(南東より)

図版46 天王山2号墳(2)

墳丘全景(西より)  
墳丘西側裾部の様子(南西より)

図版47 天王山2号墳(3)

石室開口部の様子(東南より)  
石室開口部の様子(南より)

図版48 天王山3号墳(1)

墳丘全景(南より)  
墳丘全景(北西より)

図版49 天王山3号墳(2)

墳丘全景(北より)  
墳丘全景(北東より)

図版50 天王山3号墳(3)

墳丘全景(南東より)  
3-5号間の掘割(西より)

図版51 天王山3号墳(4)

西側墳丘裾の様子(南より)  
石室開口状況(南より)

図版52 天王山3号墳(5)

前壁部の様子(北より)  
奥壁部の様子(南より)



- 図版53 天王山3号墳(6)  
右袖部の様子(北東より)  
左袖部の様子(北西より)
- 図版54 天王山3号墳(7)  
玄室奥部左隅の様子(南西より)  
玄室奥部右隅の様子(南東より)
- 図版55 天王山3号墳(8)  
左袖部および羨道左側壁の様子(北西より)  
右袖部および羨道右側壁の様子(北東より)
- 図版56 天王山3号墳(9)  
玄室天井部の様子(左が北)  
玄室床面の様子(南より)
- 図版57 天王山3号墳(10)  
玄門から羨道部の様子(北より)  
閉塞石の様子(北より)
- 図版58 天王山4号墳(1)  
石室材抜取穴の様子(南より)  
石室材抜取穴の様子(南東より)
- 図版59 天王山4号墳(2)  
石室材抜取穴の様子(北東より)  
墳丘と東掘割の様子(東南より)
- 図版60 天王山4号墳(3)  
墳丘東側掘割の様子(南東より)  
墳丘東側掘割の様子(北西より)
- 図版61 天王山5号墳(1)  
墳頂部南側の様子(北西より)  
墳頂部北側の様子(北西より)
- 図版62 天王山5号墳(2)  
墳丘全景(北西より)  
墳丘全景(西北より)
- 図版63 天王山5号墳(3)  
墳丘全景(東南より)  
墳丘と3—5号墳間の掘割(東より)
- 図版64 天王山5号墳(4)  
墳丘東裾部の様子(南より)  
墳丘北東裾部の様子(南より)
- 図版65 天王山6号墳(1)  
墳丘全景(北東より)  
墳丘全景(東より)
- 図版66 天王山6号墳(2)  
墳丘全景(西より)  
墳丘北西裾の様子(南西より)
- 図版67 天王山6号墳(3)  
墳丘北東裾および北掘割の様子(東南より)  
墳頂部の石材(南より)
- 図版68 天王山6・7号墳(1)  
8号墳からみた6・7号墳の様子  
(北東より)  
6・7号墳間の掘割(南より)
- 図版69 天王山6・7号墳(2)  
6・7号墳間の掘割(北西より)  
6・7号墳西側の掘割(西より)
- 図版70 天王山7号墳(1)  
墳丘全景(北より)  
墳丘全景(西北より)
- 図版71 天王山7号墳(2)  
墳丘全景(南東より)  
墳丘全景(南より)
- 図版72 天王山7号墳(3)  
石室開口部の様子(南東より)  
石室内の様子(南より)
- 図版73 天王山8号墳(1)  
墳丘全景(東より)  
墳丘全景(南西より)
- 図版74 天王山8号墳(2)  
墳丘全景(東北より)  
墳丘全景(西南より)
- 図版75 天王山8号墳(3)  
墳丘南側掘割の様子(南西より)  
墳丘東～南側の掘割の様子(北西より)
- 図版76 天王山8号墳(4)  
墳丘北側掘割の様子(西より)  
墳頂部の様子(南より)
- 図版77 天王山9号墳(1)  
墳丘全景(南東より)  
墳丘南東側掘割の様子(北東より)
- 図版78 天王山9号墳(2)  
墳頂部における石材散布状況1(南より)  
墳頂部における石材散布状況2(北西より)
- 図版79 天王山10号墳(1)  
墳丘全景(南東より)  
墳丘全景(北より)
- 図版80 天王山10号墳(2)  
墳丘南東側掘割の様子(南西より)  
墳頂部の石材(西より)
- 図版81 天王山11号墳(1)  
墳丘全景(南東より)  
墳丘南東掘割部の様子(東北より)

図版82 天王山11号墳（2）  
墳丘全景（東より）  
墳丘北東側平坦面における  
須恵器の散布状況（北より）  
図版83 天王山12号墳（1）  
墳丘全景（南より）  
墳丘全景（南東より）  
図版84 天王山12号墳（2）  
墳丘全景（西北より）  
墳丘南側掘割部（東北より）  
図版85 天王山12号墳（3）  
墳丘北側斜面の様子1（南より）  
墳丘北側斜面の様子2（西より）

図版86 天王山13号墳（1）  
墳丘推定地の様子（南西より）  
墳丘推定地北斜面の様子（西南より）  
図版87 天王山14号墳（1）  
墳丘全景（南西より）  
墳丘南西部の様子（南より）  
図版88 天王山14号墳（2）  
墳丘北斜面の様子（東北より）  
墳丘北東斜面の石材露出状況（北東より）  
図版89 天王山15号墳（1）  
墳丘全景（南より）  
墳丘全景（北より）

## 別 添 図

- 1 赤坂天王山古墳群 地形測量図（1/400）
- 2 赤坂天王山1・2号墳 墳丘測量図（1/200）

# 本文

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査にいたる経緯

赤坂天王山古墳の測量調査を行うこととなったのは、平成11年6月から12月にかけて担当した桜井市大字倉橋出屋敷・下り尾所在のカタハラ古墳群の発掘調査時に学生諸君と行った周辺遺跡の踏査・見学がそのきっかけであった。

この踏査・見学に際しては見学予定の遺跡に関する文献を収集し、事前に検討会を行った上で踏査に臨むこととしたが、この作業の中で改めて気付いたのは古墳研究に重要な位置を占め、広くその名を知られた古墳が数多く築造されている忍阪・栗原谷所在の古墳でも研究の基礎資料となる測量図が不備なものや、作成されていても測量時期が古く今日的には図面の精度に問題があるものなどが非常に多いことであった。このような状況を憂慮した筆者をはじめとする踏査参加者は今後の調査・研究や遺跡の保存に向けての基礎的な資料とするため、これらの古墳のうち数基の測量調査を行うことを企画したものである。

周辺に点在する古墳の中で、まず初めに測量調査の対象としたのは天王山古墳群である。この古墳群については調査のきっかけとなったカタハラ古墳群と同一の尾根上に築かれたものであることや、現在使用されている測量図が昭和12年作成<sup>1)</sup>のもので、周辺の古墳の中でも一番古いものであること、1号墳は県下でも有数の墳丘と石室をもっており、周辺に点在する古墳の中でも学術的に最も重要性の高い古墳の一つと考えられることなどがその選定の理由であった。

なお、当初本報告書の刊行業務は当初は正式な事業として位置付けられたものではなかったため、印刷費等の手当がなされておらず、本書の出版にあたっては公益財団法人桜井市文化財協会の全面的な援助を受けたことを付記しておく。

## 第2節 調査の経過

測量調査の当初の目標としたのは天王山古墳群のうち1号墳の石室及び墳丘測量で、平成11年の晩秋に測量作業に着手したものであるが、自主的な業務として休日や勤務時間の合間を縫って行ったものであるため、その進行は遅々としたものであった。この1号墳の墳丘測量については平成12年度の段階で一旦完了していたものの、この時点での測量図は標高や国土座標等のデータが無い任意の基準点を基点として作成したもので、後々の調査や検討に際して不自由をきたすことが想定されたため、平成17年5月の段階で墳丘を世界測地系による国土座標に基づき、

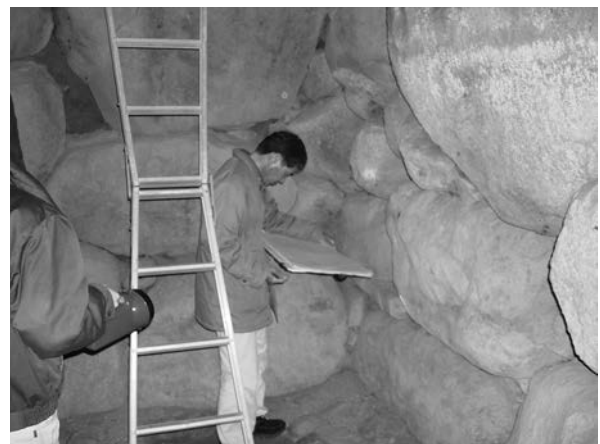


写真1 3号墳の石室材鑑定の様子

トータルステーションを用いて再測量を実施することとした。

また、この測量作業に先立って実施した周辺の踏査では、既にその存在が知られている1～5号墳よりもさらに西・北方の地点において規模は小さいながらも数基の小石室や墳丘の存在が確認されたため、1号墳のみを対象とした当初の測量範囲を急遽拡大し、古墳の存在が推定される丘陵部のほぼ全域の地形測量を行うこととした。

石室の測量については現在内部へ立ち入ることのできる1・3号墳を対象に図化を行った。これらの現地作業にあたっては西本智弘氏の尽力により㈱アイシーの全面的な御協力を頂いた他、平成19年2月には奥田尚先生にお願いして1・3号墳の石室の石材鑑定を行っていただいた（写真1）。

なお、石室の実測作業は当初手測りによる図化を予定していたため基準点打設等の準備を進めていたが、平成18年10月に入って三次元測量を業務とする某社から測量協力の申し出があり、実験的に三次元計測機を用いて測量に着手することとなった。しかしながら、いざ測量に着手してみると狭く高さのある石室の図化には様々な問題が発生し、これらの問題の解消のために多くの時間を費やすこととなったが、最終的には平成19年7月の時点で某社と協議の結果、三次元計測による完全な石室の図化を断念することとなったことを付記しておく<sup>2)</sup>。

従って、今回作成した石室実測図は作成途中であった三次元計測の素図を基として平成20年に手測りによる修正・加筆を行って完成させたものであり、別途掲載の1・3号墳石室の三次元計測図については未完成ながら会社名を伏せることを条件に某社より提供されたものである。

このような経緯を経て天王山古墳群に関するデータの収集は平成19年の段階で概ね完了していたものの、このころから編集担当者が調査や別の報告書の作成等の業務によって多忙を極め、報告書の作成は一時中断を余儀なくされたが、改めて平成24年6月より原稿の執筆に取り掛かり、途中の中断を挟みつつ、今回刊行に至ったものである。（橋本）

#### 【註記】

- 1) 梅原末治 1938「第二 大和赤阪天王山古墳」『近畿地方古墳墓の調査三』日本古文化研究所
- 2) 三次元計測による石室の図化については結果的に最後まで作業を断念することとなったものの、その有効性については実測図の精度の高さ、質感のリアルさとともに後掲の測量図でも明らかであり、今後の調査においては積極的な活用が期待される。しかしながら、天王山1・3号墳のような高さのある玄室や、機械を立てることが困難な羨道部分のように狭い環境においてはレーザーの及ばない部分が多く発生し、図化に大きな課題を残すこととなった。これについては計測器の位置や高さを変えながら様々な角度からの計測が必要となるし、最終的には人の手による確認・補測等、丁寧な作業が必須である。
- 3) この作業にあたっては文化財課 丹羽・木場両氏の協力を得た。記して感謝します。



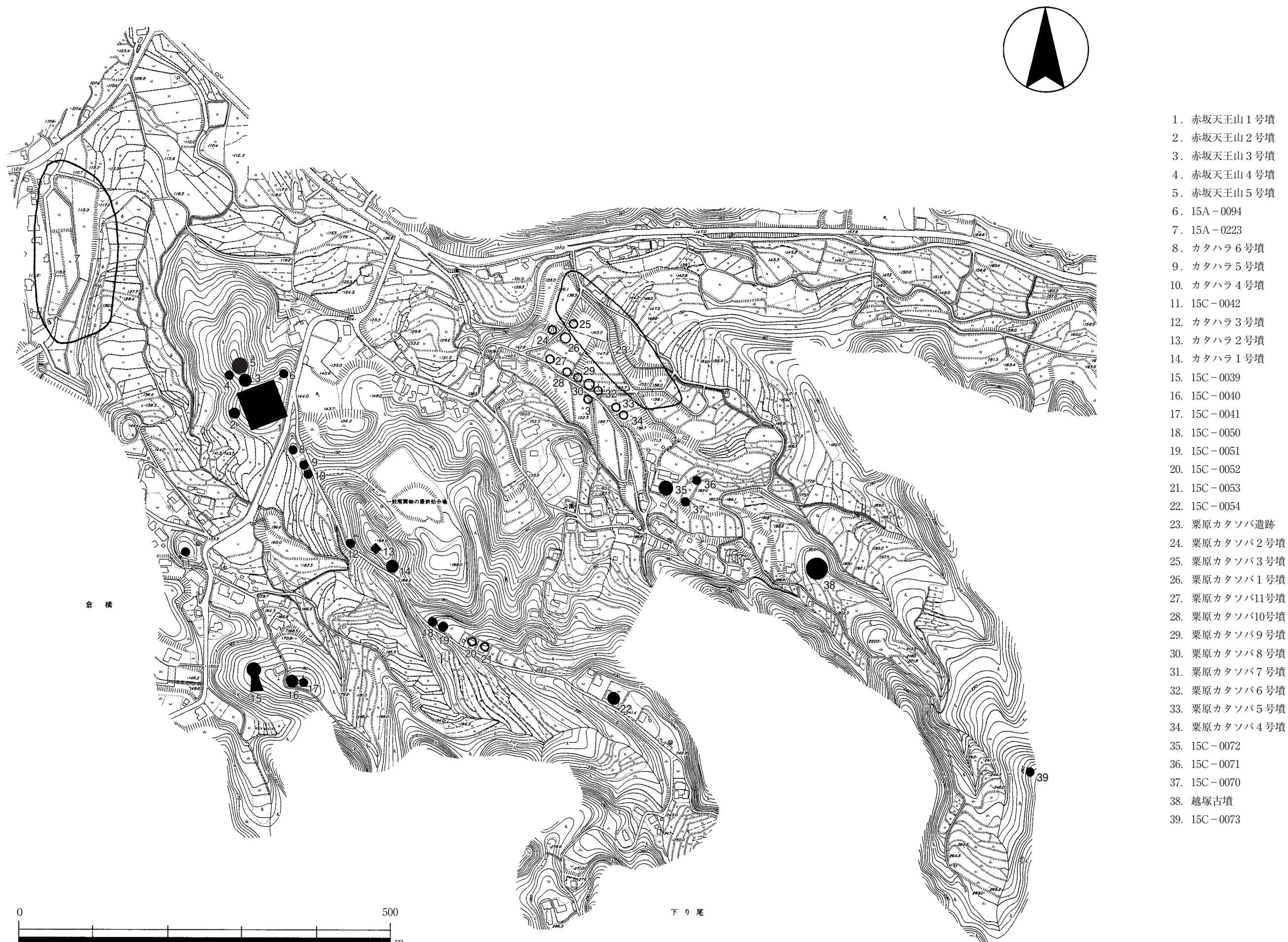


図1 天王山古墳群周辺の地形と遺跡分布図（1/5,000）

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

桜井市は奈良盆地の東南部とその背後に続く大和高原・宇陀山地・吉野山地の一部より構成されている（図2）。人口約59,000人、面積98.93km<sup>2</sup>の市域の約60%は山地であり、平地は北西部の40%に過ぎないが、市域のほぼ中央では春日山断層と初瀬構造谷が交差し、巻向山地塊崖・御破裂山地塊崖が盆地に面する西北斜面にはいくつもの溪谷が形成されている（図3）<sup>1)</sup>。

この中で赤坂天王山古墳群は、音羽山（標高851m）から北西へと派生する小規模な尾根群の一つに築造されており、古墳の北側にはこの音羽山塊と西に位置する鳥見山（標高245m）、栗原川を挟んで対峙する外鎌山（標高292m）などによって忍阪・栗原谷が形成されている。忍阪・栗原谷筋には松山街道が東西に走っているが、この街道は奈良盆地から宇陀、そして東海地域へと繋がる大和の主要な街道の一つとして古代から重要な位置を占めるもので、大正6年には桜井—宇陀松山間で奈良県初めての乗合自動車が運航されたという記録も残されている。

さて、天王山古墳群の西側には倉橋溜池が美しい水面を湛えている。この溜池は栗原川の支谷を堰き止めて昭和32年5月に竣工した比較的新しい人造湖で、別名である「龍吟鏡」は弘法大師の撰文と伝えられる益田池の碑文にちなんで故末永雅生博士によって命名されたものである。

#### 【註記】

1) 西宮克彦 1979「地質」『桜井市史』下巻 桜井市役所

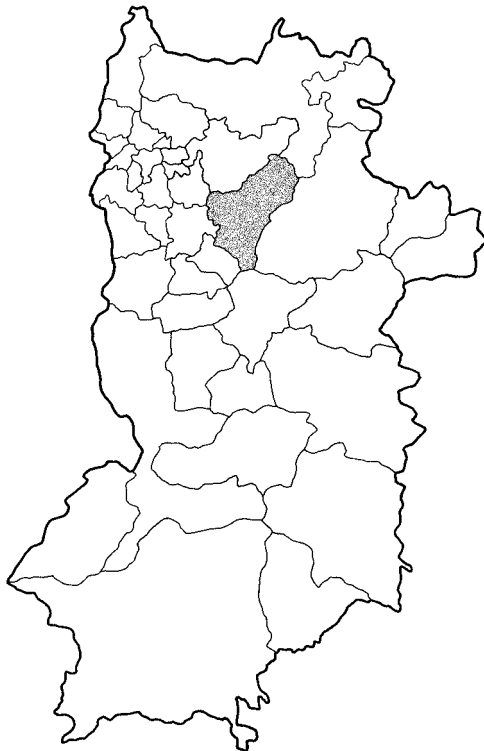


図2 桜井市の位置

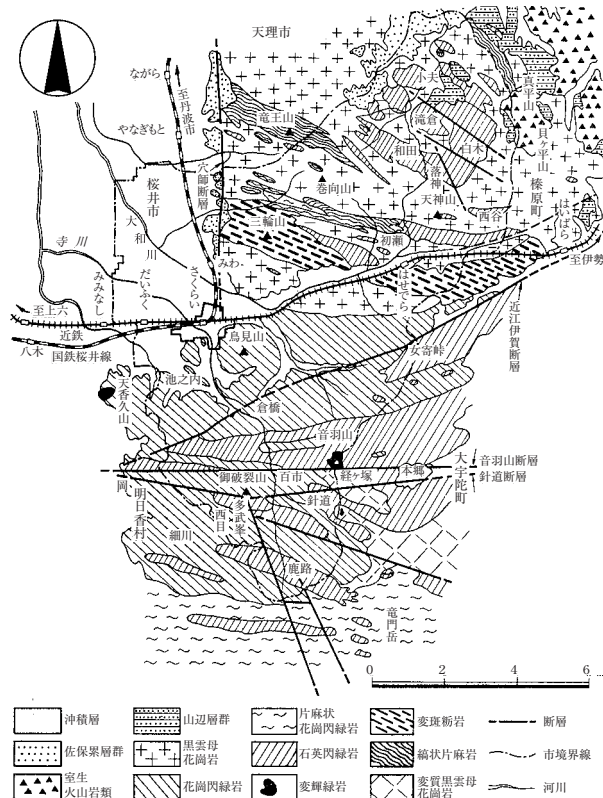


図3 桜井市の地質（註1文献より）



## 第2節 歴史的環境

周辺地域の遺跡を概観しておくこととしよう（図4）。

時代の古いものから順に概観していくと、近隣では初瀬谷に所在する朝倉遺跡（31）で採集された縄文時代草創期と考えられる有舌尖頭器が近隣では最古の資料となる。先端が欠失するものの、灰緑色のチャートを用い丁寧な押圧剥離技法で製作された優品である。また、朝倉遺跡の東方に位置する初瀬遺跡では平成8年に行われた第3次調査で早期の押型文土器が出土しており初瀬谷に展開する縄文遺跡が比較的早い段階から活発な活動があった様子が窺える。

規模は大きくないが弥生時代の遺跡で前期～後期末にいたる土器の出土が報告されているものに脇本遺跡（30）がある。このうち第9次調査では弥生形甕を棺身とし、甕底部を重ねて蓋としたものと、中型の壺に高坏の坏部で蓋をした後期の合口土器棺墓が2基確認されている他、第13次調査においては弥生時代後期末～古墳時代初頭に属する土製鋳型や銅滓、湯玉、銅鐸や不明青銅器の小片などが出土しており、遺跡内において他の製品への改鋳が行われていた可能性が指摘されている。城島遺跡（21）でも第26次調査で後期の方形周溝墓5基や竪穴式住居跡が検出され、遺跡内でも南側の微高地上に弥生時代の遺構が集中することが解ってきた。この他にも忍坂遺跡（38）・河西遺跡（14）などで遺物の出土は報告されているが、遺構の詳細は不明である。

古墳時代にはいと周辺の様相はそれまでと大きく変わり古墳や集落の数が増加する傾向が認められ、「記・紀」にみられる歴代天皇の宮殿伝承地の多くが桜井市中～南部にあたる磯城・磐余の地域に存在することも歴史的に意義深い地域であることを示唆していると言えよう。

まず、集落などの遺跡では、初瀬谷の入口にあたり初瀬川北岸に所在する脇本遺跡（30）が著名である。この遺跡では大きく分けて5世紀後半、6世紀後半、7世紀後半の3期の大型建物群などが検出されており、5世紀後半のものは雄略朝の泊瀬朝倉宮に、6世紀後半のものは欽明朝の磯城島金刺宮や行宮となる泊瀬柴籬宮に、7世紀後半のものは天武朝の行宮や泊瀬斎宮の候補とされている。

鳥見山北西に展開する城島遺跡（21）においても古墳時代を通じて多岐にわたる成果が得られている。桜井茶臼山古墳（20）の北西約400mの下田地区で検出された湿地状落ち込みからは鋤・鍬・天秤棒といった古墳時代初頭の木製品が大量に出土し、位置や時期の検討から周辺が桜井茶臼山古墳の造営キャンプ地として機能し、不要となった土木用具が落ち込みに廃棄されたものと考えられている。

また、遺跡内でも西端から西南端にあたる地域では後期を中心とした竪穴式住居・掘立柱建物などの遺構のほか、土師器・須恵器に加え轆羽口・鉄滓などの鍛冶関連遺物や韓半島にゆかりがあると考えられている器台形土器といった特殊遺物も出土しており、工房的機能や渡来系集団との関連も推定される遺跡であることがわかってきている。

忍阪・粟原谷の入口に位置する忍坂遺跡（38）では、中・後期を中心に掘立柱建物を主体とした集落が営まれるが、遺物に鍛冶関連遺物・鉄銚・勾玉や滑石製玉の未成品などが含まれることから、これらを製作する工房が含まれていたことが推定される。加えて忍阪の地は『記・紀』に見られる忍坂大中姫の忍坂宮の推定地として注目されており、遺跡の実態解明が急がれるところである。

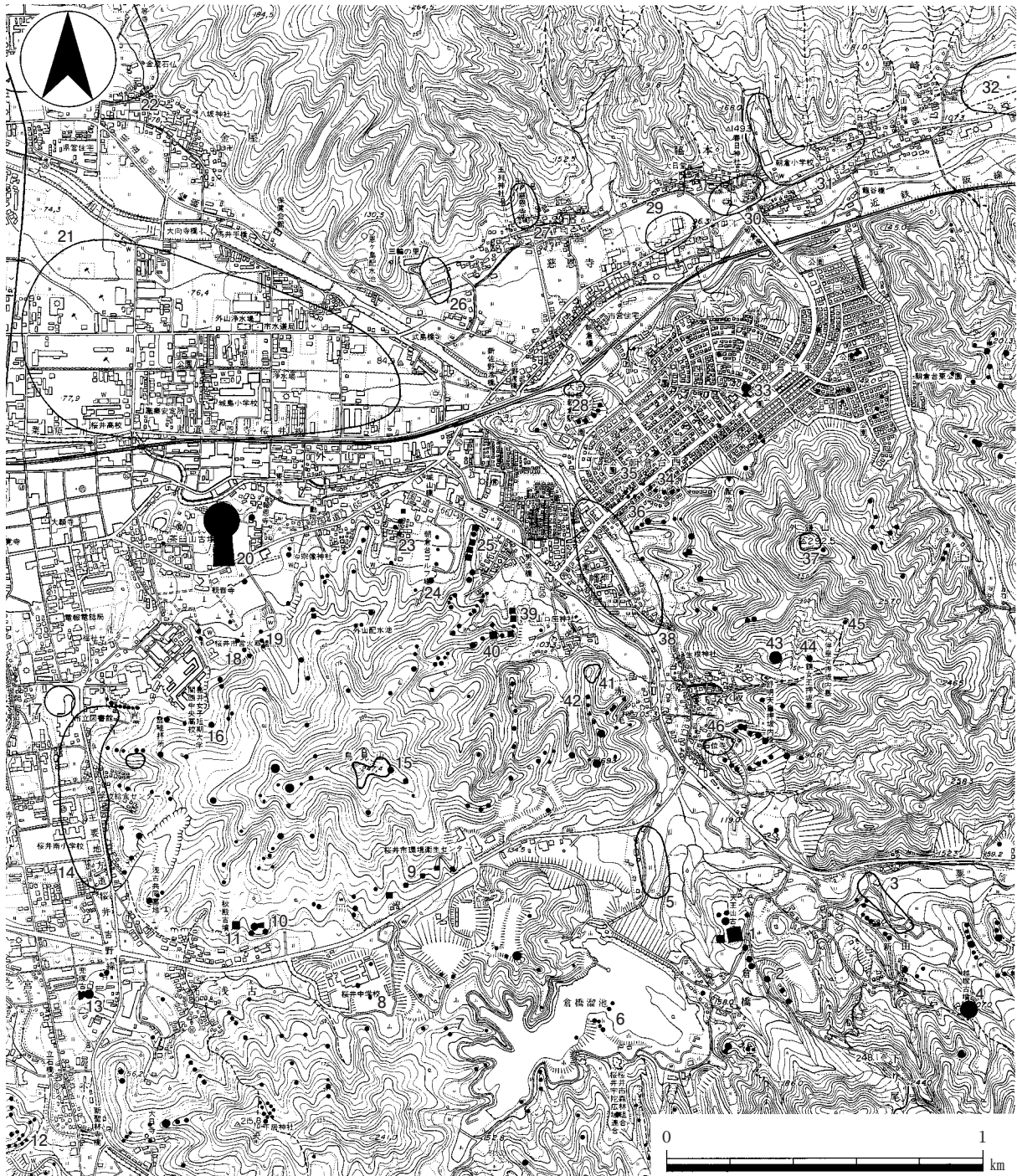


図4 赤坂天王山古墳群と周辺の遺跡（1/20,000）

1. 赤坂天王山古墳群 2. カタハラ古墳群 3. 栗原カタソバ遺跡群 4. 越塚古墳 5. 遺物散布地 6. 倉橋古墳群
7. エンドウ山古墳群 8. 安倍山古墳群 9. 舞谷古墳群 10. こうぜ古墳群 11. 秋殿古墳 12. 高田袋谷古墳群 13. 兜塚古墳
14. 河西遺跡 15. 鳥見山城跡 16. 能登谷1号墳 17. 能登遺跡 18. メグリ塚古墳群 19. 外山谷古墳群 20. 桜井茶白山古墳
21. 城島遺跡 22. 三輪遺跡 23. 森谷山古墳群 24. 大谷古墳 25. 赤尾崩谷古墳群 26. 遺物散布地 27. 慈恩寺跡
28. 遺物散布地 29. 遺物散布地 30. 脇本遺跡 31. 朝倉遺跡 32. 出雲西遺跡 33. 慈恩寺1号墳 34. 忍坂5号墳
35. 忍坂8・9号墳 36. 忍坂10号墓 37. 外鎌山城跡 38. 忍坂遺跡 39. 赤尾熊ヶ谷古墳群 40. 15-A-20号墳 41. 赤尾城跡
42. 福塚古墳 43. 忍坂段ノ塚古墳 44. 鏡女王墓 45. 大伴皇女陵 46. 石位寺



さて、天王山古墳群（１）の東に位置する尾根上には栗原カタソバ遺跡群（３）が所在する。検出された遺構は古墳と居住区であり、このうち居住区は傾斜が緩やかな北斜面部分を階段状に造成した平坦面に形成されている。遺跡の存続時期は古墳時代にあたる５世紀後半～６世紀中頃と飛鳥時代にあたる７世紀代で、古墳時代では１９棟の竪穴式住居跡が検出されたほか、玉類や滑石製模造品などの祭祀遺物が多く出土している。<sup>11)</sup>これらの遺構や遺物は宇陀地域へとぬける松山街道への登り口を見下ろす北斜面に位置することから、街道の存在と強く結びついたものと考えられている。

次に墳墓を見ていくとしよう。前期古墳としては鳥見山からのびる尾根を切断して造営された桜井茶臼山古墳（２０）をはじめ、赤尾熊ヶ谷２号墳（３９）・メスリ山古墳・双築１号墳・池ノ内古墳群が知られる程度であり、桜井市南部に造営される古墳の総数からすると数少ない存在である。

桜井茶臼山古墳は全長約２０７ｍを測る後円部３段、前方部２段築成の前方後円墳である。墳丘には葺石が配され、墳頂には竪穴式石室を方形に取り囲むように丸太垣がめぐり、二重口縁壺が配列されていた。竪穴式石室は盗掘にあったものの、多くの鏡片や玉類・石製腕飾類・鉄剣などのほか、鉄芯に碧玉製品を組み合わせた玉杖など豊富な遺物が出土している。<sup>12)</sup>

桜井茶臼山古墳の西南にあるメスリ山古墳は全長約２３０ｍの前方後円墳で、後円部の中央には長方形の壇がありその周囲には大型の特殊円筒埴輪を含む埴輪列が二重に取り囲んでいた。この区画内の中央には南北軸をとる主室の竪穴式石室と副葬品を納めた副室が造られていた。主室は盗掘を受けており鏡片や椅子形石製品などの遺物が僅かに残っていたに過ぎないが、未盗掘の副室からは鉄製弓矢や大量の鉄槍先・銅鏃・石製鏃・鉄製農工具・４種類の玉杖など豊富な副葬品が出土している。<sup>13)</sup>

赤尾熊ヶ谷２号墳は４世紀前半築造の東西約１４ｍ×南北約１６ｍの方墳で墓壙には２基の刳拔式木棺が納められていた。このうち西側から検出された１号棺からは内行花文鏡が２面と翡翠製勾玉・緑色凝灰岩製管玉・ガラス小玉などが出土しており、墓壙内からは鉄鏃・鉄槍・鉄鏝・鉈・鉄鎌・鉄斧など小規模な古墳であったが豊富な副葬品が出土している。<sup>14)</sup>

池ノ内古墳群は奈良県立農業大学校建設に先立ち発掘調査が行われ、前期後半～中期初頭の円墳８基が確認された。埋葬施設は木棺直葬や粘土槨などがあり、複数埋葬も認められる。また鏡５面や碧玉製腕飾類・玉類・鉄製武器・工具類など豊富な副葬品が出土していることも特徴のひとつである。<sup>15)</sup>

双築１号墳は前期後半に築造された径約３０ｍの比較的大型の円墳であり、粘土槨に納められた長さ約４．５ｍの刳拔式木棺からは鉄剣や鉈・刀子・袋状鉄斧・ガラス玉・緑色凝灰岩製管玉・琥珀製勾玉・埴輪など原位置を保った多くの副葬品が出土している。<sup>16)</sup>

中期に入ると古墳の数はさらに少なくなり、前半では外鎌山北麓で土器棺を埋葬施設とする忍坂５号墳（３４）と赤尾熊ヶ谷３号墳（３９）が確認されているに過ぎず、その数が増加するのは後半以降のことである。このうち赤尾熊ヶ谷３号墳は５世紀前半～中頃の築造と考えられる方墳で、墳丘の規模は一辺１６ｍ×１５ｍの規模を持つ。埋葬施設は長さ５．２ｍの刳拔式木棺で鉄刀・鉄剣や瑠璃製勾玉・丸玉・切子玉のほかに緑色凝灰岩製管玉・算盤玉・ガラス製小玉・銀製空玉・滑石製白玉などの出土があり、墳丘上からは量は少ないものの円筒埴輪や鶏形埴輪などの埴輪の出土も報告されている。<sup>14)</sup>



さて、中期末葉になると鳥見山山麓では森谷山古墳群（23）・赤尾崩谷古墳群（25）が築造される。森谷山古墳群は径10m前後の円墳3基と方形のマウンドを有する室町時代の火葬墓1基で構成されるものであり、粘土槨に組合式木棺を納めた2号墳や鉄鎌・鉄斧・鉄鏃などの鉄製品や勾玉・管玉で構成される首飾りが出土した3号墳<sup>17)</sup>が知られる。

赤尾崩谷古墳群は調査された5基のうち1～3号墳が中期末葉に位置づけられる。一辺15m前後の方墳2基（1・3号墳）と径12mの円墳1基（2号墳）があり、いずれも刳拔式木棺の直葬墳である。3基に共通してガラスを中心とした玉類が1基につき約3000点前後と大量副葬される特徴があり、1号墳からは垂飾付耳飾、2・3号墳からは馬具が出土するなど渡来系集団の副葬品にみられる様相を呈している。

また、同じ時期には鳥見山南西に位置する浅古地域に全長約50mの前方後円墳である兜塚古墳（13）が築造される。兜塚古墳では、前方部墳頂で竪穴系の石室と家形石棺が露出している。石棺は阿蘇溶結凝灰岩製の刳拔式の家形石棺で蓋石には縄掛突起が4個作り付けられているものであるが、東側の小口が著しく破壊されており、調査では石棺の西側からは馬具・鉄鏃・数々の玉類<sup>19)</sup>が出土している。遺構・遺物の様相から築造時期は5世紀後半から6世紀初頭と考えられ、家形石棺を伴う古墳としては近畿でも最古級の1つに位置付けられている。

続く後期には、鳥見山山麓では森谷山古墳群と赤尾崩谷古墳群の間に位置する谷筋に大谷古墳（24）が築造される。墳形や内部構造は判然としないが、壺の口縁に坏を縦に付着させた異形土器<sup>20)</sup>が出土しており注目される。同様の土器は大阪府鬼虎川遺跡などでも出土しているが、この土器はこれまでの研究により韓式系土器の一種と認識されている。このため異形土器の存在は大谷古墳の被葬者と渡来系集団との関係を推察させる遺物と言えるだろう。

赤尾崩谷古墳群（25）においては中期に引き続き、4・5号墳が1～3号墳の背後に近接して築造されている。このほか奈良県遺跡地図によると赤尾熊ヶ谷古墳群の背後に続く尾根上には、横穴式石室を有する15A-20号墳（40）が存在することが示されている。15A-20号墳は西からの尾根を大幅にカットして築造した東西23m、南北26m、高さ6mを測る2段築成の墳丘を持つ大型の方墳である。この古墳は鳥見山山麓の一般的な古墳の規模からすると突出して大きなものであり、<sup>22)</sup>当地の首長墳の1つになり得る存在といえるだろう。墳丘の南側には石室材の抜き穴らしき痕跡が確認できるものの発掘調査がなされていないため詳細は不明であるが、今後注意すべき存在である。

このほか赤尾地内に所在する鳥見山麓の尾根上には大正8年に奈良県史蹟勝地調査会により発掘調査された福塚古墳<sup>23)</sup>（42）が存在する。福塚古墳の調査は奈良県が実施した初めての発掘調査といえるものであり、学史的にも極めて意義深いものである。報告によると古墳は丘陵の頂上と思われる所に位置する古墳1基と、そこから6m余り下がった斜面に位置する1基からなる。そのうち傾斜地に位置する古墳では石材が一部露呈した小石室が検出され、鉄刀・須恵器壺といった遺物が出土している。この所在地については報告書に周辺の地形見取図が添付されるもののかなり抽象的なものであり、現地形と対応させることは困難であったが昭和33年発行の『古墳—桜井市古墳総覧—』<sup>24)</sup>には地図上に所

在地が記載されている。これを現在の奈良県遺跡地図と照合したところ、遺跡地図記載の15A-53号墳或は54号墳がこれに相当するものと考えられる。

このほか後期古墳として特筆すべきものには鳥見山南麓に築かれた秋殿古墳（11）とこうぜ古墳群（10）がある。秋殿古墳は鳥見山南麓の尾根の先端に築かれた方墳であり、発掘調査は行われていないが一辺約21mの墳丘を持っている<sup>25)</sup>。横穴式石室は全長11.2m、玄室長4.6m、幅2.3mと比較的大きな規模を持つものだが、早くから開口していたため副葬品などは知られていない。

こうぜ古墳群は全長約50mの前方後円墳と2基の小円墳からなる古墳群である。掘割の一部と墳丘測量が行われたのみで詳細な発掘調査は行われていないが、1号墳とされた前方後円墳では前方部と後円部の双方に石室の存在が確認されており<sup>26)</sup>、県内でも数少ない存在として注目されるものである。

さて、天王山古墳群北方の外鎌山北麓に形成された外鎌山北麓古墳群では忍坂5号墳からやや時間を置いた後、5世紀末～6世紀初頭になって竜谷・慈恩寺・忍坂の各支群で古墳の築造が本格化する。中でも慈恩寺1号墳（33）は全長約45mの前方後円墳と考えられる古墳で、群中では最大の規模を誇る。後円部頂で検出された刳拔式の木棺を直葬した埋葬施設からは金環・銀製装飾付中空勾玉・銀製空玉・ガラス玉など多量の副葬品が出土している<sup>1)</sup>。

忍坂谷の奥に位置する栗原の谷筋には、後期中葉以降その先陣としてカタハラ古墳群（2）が築造される。計6基からなる古墳群であるが、6世紀中葉から7世紀前半の古墳3基と土壙墓群などが調査されており、とりわけ6世紀中葉に位置づけられる1号墳は橿原市沼山古墳（6世紀後半）と同じ築造プランで造られたいわゆる穹窿状天井をもつ横穴式石室を内部主体としており<sup>27)</sup>、渡来系集団特有の石室形態を有する古墳のひとつとして重要な位置を占めている。

カタハラ古墳群の位置する谷の入口付近には今回報告する天王山古墳群（1）が存在する。個々の古墳は築造時期にばらつきがあると考えられるものの、国史跡の1号墳を中心に数基の古墳からなる群集墳である。詳細は報告部分で細述するが1号墳は一辺約45mを測る3段築成の大型方墳で、巨石を積み上げた横穴式石室内には二上山産白色凝灰岩製の刳拔式の家形石棺が安置されている<sup>28)</sup>。6世紀末葉の古墳と推定され、規模やその構造などからは早くから『記・紀』にみられる崇峻天皇の倉梯岡上陵とする説も出されている。

天王山古墳群の東方には、音羽山から派生した丘陵端部を切断して築造された越塚古墳（4）がある。花崗岩の巨石を用いた横穴式石室内には二上山産凝灰岩製の組合式家形石棺の底石が残されており<sup>29)</sup>、6世紀末葉の築造と考えられている。

7世紀に入り終末期が近づく頃になると栗原谷にはムネサカ古墳、鳥見山南麓にはエンドウ山古墳群（7）などが築造される。いずれも切石技法を用いた花崗岩の巨石で横穴式石室を構築しており、石材の間には漆喰が塗られている。また、ムネサカ古墳は石室規格が明日香村の岩屋山古墳とほぼ同じであることで知られている<sup>30)</sup>。

栗原カタツバ遺跡群（3）においても6世紀末から7世紀代に築造された横穴式石室墳が11基確認されている。古墳群は居住区が形成される尾根の北斜面に対して南斜面および北西斜面に集中して築

造されている。殆どの墳丘は水田造成に伴い大きく削平を受けていたが、11号墳では凝灰岩製の石棺、9号墳からは墨書土器などが出土している<sup>11)</sup>。

終末期に入ると、周辺地域では外鎌山南麓に築造された舒明天皇陵とされる八角形墳の忍坂段ノ塚古墳<sup>31)</sup>（43）や鏡女王墓（44）のほか、鳥見山南麓の舞谷古墳群<sup>32)</sup>（9）、外鎌山西麓の忍坂8・9号墳（35）、栗原谷東方女寄峠付近の花山塚・花山東塚古墳など<sup>33)</sup>、榛原石の板石を磚積みした磚槨式石室を有する古墳が数多く築造されていく、この種の古墳は奈良県内では盆地東南部の桜井から宇陀地域を中心にその分布があるが、現在大和で確認されている17基の磚槨式石室墳の内、9基が周辺地域に集中することは特筆すべき点である。韓半島の墳墓形態との類似点や石材の加工技術などから、渡来系の技術者集団が密接に関与した古墳であると考えられる。なお、磚槨墳以外の同時期の古墳は総じて減少傾向にあり、古墳時代も終焉を迎えることとなる。

飛鳥時代の集落およびその他の遺跡としては、脇本遺跡をはじめ、城島遺跡や栗原カタソバ遺跡群が知られる。このうち城島遺跡では城島小学校の改築に先立つ第7次調査で大溝と石溝で区画された中に掘立柱建物や柵列などを配した7世紀中頃を最盛期とする邸宅跡が検出され、当地の豪族である大伴氏にゆかりのある人物の居館とする説<sup>34)</sup>などが出されている。

栗原カタソバ遺跡群では石垣と溝が巡らされた前面に大型掘立柱建物が2棟配置された施設が確認された。これらの遺構は宇陀から奈良盆地へと通じる街道に面して立地していることから、道路を管理する施設や官衙的な性格を持つものではないかと考えられている<sup>11)</sup>。

奈良時代になると周辺でも初瀬谷で最古の寺院となる可能性が高い慈恩寺跡（27）や、中臣朝臣大嶋が草壁皇子のために発願したとされる栗原寺跡などの寺院が建立されるようになる。

また時代は下るが、忍阪集落内に所在する17世紀創建の石位寺（46）には、白鳳期の作品とされる石造薬師三尊仏が安置されている。この石仏は重要文化財に指定されており、栗原から流れついたという伝承から栗原寺伝来の石仏とされ、三重塔の四方仏とする説<sup>35)</sup>もある。

終末期以後の墓制については、周辺では奈良時代のものと思われる火葬蔵骨器外容器が出土した忍坂10号墓<sup>1)</sup>（36）や栗原鳥ヶ谷古墓、忍坂遺跡（38）の第4次調査で検出された平安時代の本棺墓、室町時代の火葬墳墓とみられる森谷山5号墳<sup>17)</sup>（23）などが確認されている。

このうち忍坂遺跡第4次調査検出の本棺墓は、鉄釘留めの組合式本棺を東頭位で直葬したもので、棺内からは化粧道具の一部と考えられる八稜鏡や横櫛といった副葬品が出土したことから、被葬者は女性の可能性が高いと推定されている<sup>36)</sup>。

最後に特筆すべき遺跡としては南北朝時代の城砦群がある。これらの多くは南朝方に属した三輪西阿によって築かれたものと考えられており、戒重城を本丸としてその詰城と考えられる外鎌山城跡（37）や鳥見山城跡（15）、赤尾城跡（41）等のほかに、竜谷城跡、出雲城跡、初瀬茶臼山城跡などの城跡が数多く確認されている<sup>37)</sup>。

（橋本）



【註記】

- 1) 前園実知雄編 1978『外鎌山北麓古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第34冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 2) 清水眞一 1997「初瀬遺跡第3次発掘調査報告」『桜井市内埋蔵文化財1996年度発掘調査報告書1』(財)桜井市文化財協会
- 3) 清水眞一 2000「脇本遺跡第9次発掘調査」『桜井市内埋蔵文化財1999年度発掘調査報告書4』(財)桜井市文化財協会
- 4) 光石鳴巳編 2011『脇本遺跡Ⅰ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第109冊 奈良県立橿原考古学研究所  
井上主税編 2014『脇本遺跡Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第115冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 5) 平成13年度に(財)桜井市文化財協会が発掘調査を実施。未報告。
- 6) 萩原儀征 2002「脇本遺跡」『大和の考古学100年』(財)由良大和古代文化研究協会
- 7) 前園実知雄 2004『奈良・大和の古代遺跡を掘る』学生社
- 8) 清水眞一 1991『城島遺跡外山下田地区調査報告書』桜井市教育委員会
- 9) 橋本輝彦 2001『城島遺跡第20次調査報告』『平成12年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会  
小畑佳子 2002『城島遺跡第22次発掘調査報告』『桜井市内埋蔵文化財2001年度発掘調査報告書1』(財)桜井市文化財協会
- 10) 関川尚功・清水眞一・橋詰清孝 1987「忍阪遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1986年度(第一分冊)』奈良県立橿原考古学研究所
- 11) 関川尚功・近江俊秀・奥田尚 2003『栗原カタソバ遺跡群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第六十五冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 12) 上田宏範・中村春寿 1961『桜井茶臼山古墳 附櫛山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第十九冊 奈良県教育委員会  
寺沢薫ほか 2011『東アジアにおける初期都宮および王墓の考古学的研究』研究成果報告書 平成19年度～平成22年度科学研究費補助金基盤研究(A)
- 13) 伊達宗泰他 1977『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第三十五冊 奈良県立橿原考古学研究所編
- 14) 橋本輝彦編 2008『赤尾熊ヶ谷古墳群－鳥見山北麓における古墳群の調査－』(財)桜井市文化財協会
- 15) 久野邦雄他 1973『磐余・池ノ内古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第二十八冊 奈良県教育委員会
- 16) 福辻淳 2007『桜井公園遺跡群－双築古墳群と安倍山遺跡の発掘調査－』(財)桜井市文化財協会
- 17) 堀田啓一 1969「外山の森谷山古墳群発掘調査予報」『大和史学』第五卷第二号 大和史学協会
- 18) 橋本輝彦・木場佳子 2004「赤尾崩谷古墳群」『大和を掘る22』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 19) 島田暁 1954「桜井町の文化財遺物－兜塚」『櫻井町史』櫻井町
- 20) 斎藤忠 1936「磯城郡城島村大字外山の出土遺物」『奈良県史跡名勝天然記念物調査会抄報』第一輯 奈良県
- 21) 木下亘 2002「鬼虎川遺跡出土の坏付き瓶について」『鬼虎川遺跡第22次調査概要報告』大阪府教育委員会 (財)東大阪市文化財協会
- 22) 奈良県教育委員会 1998『奈良県遺跡地図』第2分冊
- 23) 高橋健自・阪谷良之進 1920「磯城郡赤尾の福塚」『奈良縣史蹟勝地調査会報告書』第七回 奈良縣
- 24) 小島俊次 1958『古墳－桜井市古墳綜覧－』桜井市文化叢書第一冊 桜井市役所
- 25) 泉森皎 1982「秋殿古墳」『磯城・磐余の後、終末期古墳と寺院跡』奈良県文化財報告書第39集 奈良県立橿原考古学研究所編
- 26) 福辻淳 2010「こうぜ古墳群第1次」『桜井市内埋蔵文化財2006年度 発掘調査報告』(財)桜井市文化財協会
- 27) 橋本輝彦編 2000『カタハラ古墳群発掘調査報告書』桜井市内埋蔵文化財1999年度発掘調査報告書2 (財)桜井市文化財協会
- 28) 梅原末治 1938「大和赤阪天王山古墳」『日本古文化研究報告9』日本古文化研究所
- 29) 伊達宗泰 1960「桜井市栗原越塚古墳」『奈良県文化財調査報告』第3集 奈良県教育委員会
- 30) 西光慎治他 2007「王陵の地域史研究～飛鳥地域の終末期古墳測量調査報告Ⅱ～」『明日香村文化財調査研究紀要第6号』明日香村教育委員会
- 31) 笠野毅 1994「舒明天皇忍坂内陵の墳丘遺構」『書陵部紀要』第46号 宮内庁書陵部陵墓課
- 32) 堀田啓一・前園実知雄ほか 1994『舞谷古墳群の研究』磚塚墳研究会
- 33) 泉森皎 1982「花山東塚古墳」「花山西塚古墳」『飛鳥・磐余地域の後、終末期古墳と寺院跡』奈良県橿原考古学研究所
- 34) 清水眞一 1992『城島遺跡田中地区発掘調査報告書』桜井市埋蔵文化財1991年度発掘調査報告書1 (財)桜井市文化財協会
- 35) 太田古朴 1979「第三章石造美術 第一節石仏」『桜井市史』上巻 桜井市役所
- 36) 丹羽恵二 2005「忍阪遺跡第4次発掘調査報告」『桜井市平成16年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会
- 37) 村田修三 1980『日本城郭大系』10 新人物往来社



## 第3章 既往の調査

### 第1節 古記録にみる天王山古墳群

ここでは古記録に残された天王山古墳群に関する情報を整理しておくこととする。天王山1号墳に対する記録の中で比較的古いと考えられるものに、元禄9年（1696）成立の松下見林による『前王廟陵記』<sup>1)</sup>「歴帝陵考」や林鶯峯（1618～1680）による『御陵所考』<sup>2)</sup>がある。いずれもが天王山1号墳を崇峻陵とする立場をとるもので、後世の写本でしか確認していないが、『御陵所考』では字岩屋（山）所在の崇



写真2 崇峻天皇陵の様子

峻陵として周りに垣をめぐらした墳丘と開口する石室や石棺の様子のほかに、石棺南小口の方形孔が描かれており、江戸時代前期の1号墳の様子を知ることができる資料として注目されるものである。

地元に残る古い記録には元禄の修陵に際して行われた陵墓の有無調査に際し、倉橋村役人から南都奉行である内田伝左衛門守政に対して差し出された「覚」<sup>3)</sup>がある。この文書は元禄10年（1697）に作成されたもので、崇峻天皇の陵として字観音堂と字岩屋の塚穴の二か所を御陵の候補として挙げているものの、「覚」では字観音堂、字岩屋の両方ともが「何之御陵とも申無御座候」「御陵并岩屋崇峻天皇と申伝無御座候、外二字なと（ママ）ニも承及不申候、尤何之御陵御廟共申伝無御座候」と地元では墳墓としての認識はされていたものの被葬者については手掛かりとなる伝承や記録は一切残されていないことがよく解る。

二か所の候補地のうち、字観音堂とされた場所が現在崇峻天皇陵に治定されている地点にあたるもので、文書によると一帯は天皇屋鋪と呼ばれ、かつては茅葺の観音堂などが存在したようである。

一方、字岩屋の岩屋山とされた地点が天王山1号墳にあたっている。墳丘は高さ十間、根廻り五十五間と記録されており、やはり石室が開口していたようで穴の入口は二尺四方、石室の奥行きは七間一尺八寸、石室奥には長さ四尺三寸、横幅二尺四寸、高さ三尺九寸の石櫃（石棺）の存在も記録されている。

この地元からの報告を受けて南都奉行所では字岩屋の岩屋山を崇峻陵とし、奉行内田伝左衛門は絵師の三郎左衛門秀行に絵図を作成させているが、御陵の治定は容易ではなかったようで修陵の完成を受けて作成された細井知慎による元禄11年（1698）の『諸陵周垣成就記』<sup>4)</sup>では岩屋山と天皇屋鋪双方の絵図を記録し、岩屋山の項には「字赤坂山トイフ崇峻陵アレド廣大ニシテ書紀式ナドノ文ニカナイガタシ」、観音堂の項には「ここ御陵の形ハなけれども正しく御陵なるべし」と崇峻天皇の位牌を祀る金福寺が所在する天皇屋敷を崇峻陵の所在地として扱っている。

このような中、一般的には岩屋山を崇峻陵とする見解が広がりを見せたようで、享保19年（1734）の並河誠所編『日本輿地通志畿内部』<sup>5)</sup>「大和志」では倉梯岡陵を「倉橋村ノ東、今日赤坂陵畔ニ有冢

六」とするほか、明和9年（1772）の本居宣長による『菅笠日記』<sup>6)</sup>では崇峻陵として1～3号墳とみられる3つの石室が開口する様子が、天明2年（1782）の荒木田久老による『やまと河内旅路の記』<sup>7)</sup>では崇峻陵として松が茂る墳丘と石室入口に垣が廻らされた様子が記録されている。このほか、記録の残るものには天明4年（1784）の大神宗保による『大和国中山陵絵図』<sup>8)</sup>や、寛政12年（1801）には草稿が完成していたとされる蒲生秀實による『山陵志』<sup>9)</sup>なども岩屋山説を支持している。

このように元禄以来、長らく崇峻陵とされてきた天王山1号墳に対する評価は、嘉永年間に入って状況が一変する。それは嘉永元年（1848）に著された北浦定政の『打墨縄』<sup>10)</sup>や、安政2年（1855）に奈良奉行所の与力らが行った探索などにおいて御陵は金福寺本堂周辺が適地とされたことで、これに基づいて文久2年（1862）年には金福寺を陵地と決定し、百三十五両を投じて大掛かりな文久の修陵が行われている。

その後、明治9年（1876）には御陵の位置が再度変更され、現在の治定地の東山上にある雀塚<sup>11)</sup>（径12mの円墳）が治定されるにいたっている。この「雀塚」や字「天皇屋鋪」を崇峻陵とする考えに対しては、明治13年（1880）の宮城三平による『山陵記』<sup>12)</sup>のように、依然として天王山1号墳を有力とする文献がみられることから、必ずしも広く認められたものでは無かったようだが、最終的には明治22年（1889）に宮内省より奈良県宛てに通達<sup>13)</sup>が出され、崇峻陵は現在地に治定されることとなっている。

以上、天王山古墳群に関する古記録を整理してきたが、本墳に関する記録の全てが『古事記』・『日本書紀』に見られる「倉梯岡上」・「倉梯岡」に葬られたとされる崇峻天皇の陵墓探索と密接な関係を持つものであることは特筆すべきである。詳細な調査が行われていない現状でこれを検討するのは困難であるが、昭和40年（1965）には森浩一により突出した規模墳丘や石室を持つこと、石室の形態的特徴から6世紀末頃の築造と考えられ、崇峻天皇の崩年とほぼ一致することなどを勘案して、天王山1号墳こそが真の崇峻天皇陵ではないかとの説<sup>14)</sup>が改めて出され、現在多くの研究者の賛意を得る事となっている。

## 第2節 大和國古墳墓取調書にみる天王山古墳群

次に明治26年（1893）に奈良県属であった野淵龍潜によって作成された『大和國古墳墓取調書』<sup>15)</sup>にみられる天王山古墳群の様子を見ていくこととし、1号墳に関連する部分の全文を再録しておく。

「第三百二十六号 十市郡多武峯村大字倉橋字赤阪ニ在り古来崇峻御陵ト稱ス 其外形即チ山容ヲ見ルニ丸塚ニテ如何ニモ帝陵ノ状ヲ具フ 現今ハ官林中ニ在リ猥ニ出入スルヲ得サルヲ以テ別ニ発掘ノ模様ナシ 崇峻御陵ハ大字倉

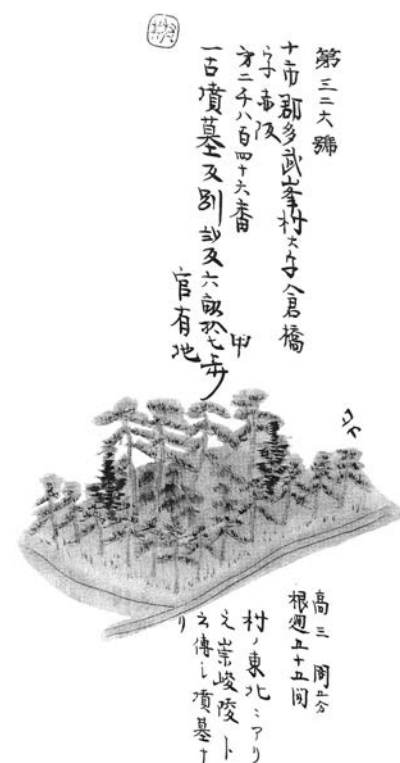


図5 『大和國古墳墓取調書』所収の1号墳

橋に御確定ニナリタルヲ以テ今更喋々スベキニ非スト雖トモ古書類ニ徴スルニ延喜式ニ倉梯岡陵トアリ本塚如何ニモ岡ノ名ニ適セリト考フ古事記ニ御陵在倉梯岡陵ト扶桑略記ニ山陵大和國城上郡倉梯岡（今ハ十市郡ナルモ古ハ式上郡ノ内ナリシカ）総国風土記ニ十市郡倉橋郷倉梯岡陵 崇峻天泊瀬部尊<sup>16)</sup>ト山城志ニ陵倉梯村東今日赤阪陵畔有塚六ト山陵考畧ニ此御陵赤といふ坂の上に在り圓き塚にて松樹多く繁れりト山陵志ニ一名赤阪山一名御陵山其他諸書に散見スルモ皆御陵ト為セリ且ツ元禄度安政度ノ舊幕府調査ニモ御陵ニ當テタリ由是考之本塚ハ 崇峻御陵ニ非レバ必ス他皇后ノ御陵ナラン」

この記録からは江戸の末葉に「字天皇屋鋪」に治定された崇峻陵も、明治に至ってもなお天王山1号墳を有力な候補地とする考えが根強くあった様子がうかがえるとともに、「猥ニ出入スルヲ得サル」「発掘ノ模様ナシ」との記述や、作成された絵図（図5）に石室やその入口に関する記録が全くみられないことなどからは江戸時代には開口していた石室への入口がこの段階には埋没などによって石室内への侵入が不可能となっていた可能性をうかがうことができる。

このほか、本書には第272号として3号墳の様子が記録されている。絵図には南に向かって開口する石室が描かれているが、墳丘・石室ともに現在と変化は認められない。解説では墳形やその位置関係から1号墳の陪塚ではないかとの考察が行われている。

### 第3節 奈良縣史蹟勝地調査会による調査

この調査成果は大正3年（1914）刊行の『奈良縣史蹟勝地調査会報告書第二回』に所収されたもの<sup>17)</sup>で、当時奈良女子高等師範学校教授で調査会の委員でもあった佐藤小吉によって行われたものである。調査が実施された日時<sup>18)</sup>の記載はないものの、報告の刊行日から勘案すると同年に実施されたものと想

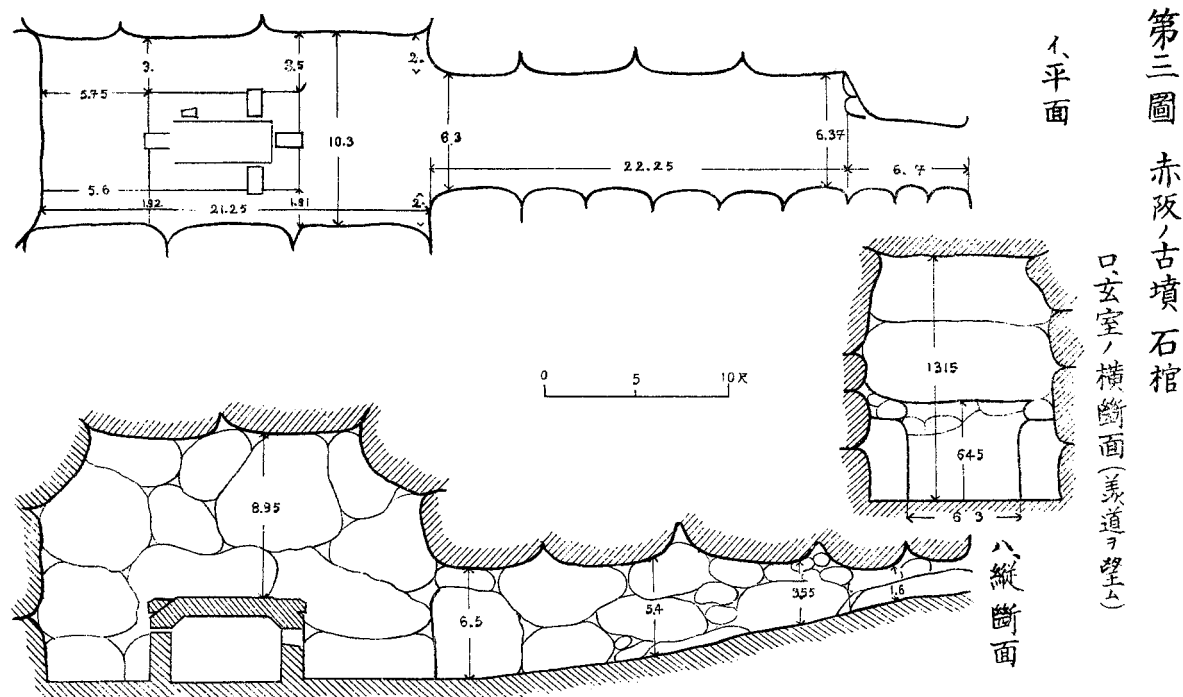


図6 奈良縣史蹟勝地調査会による石室測量図

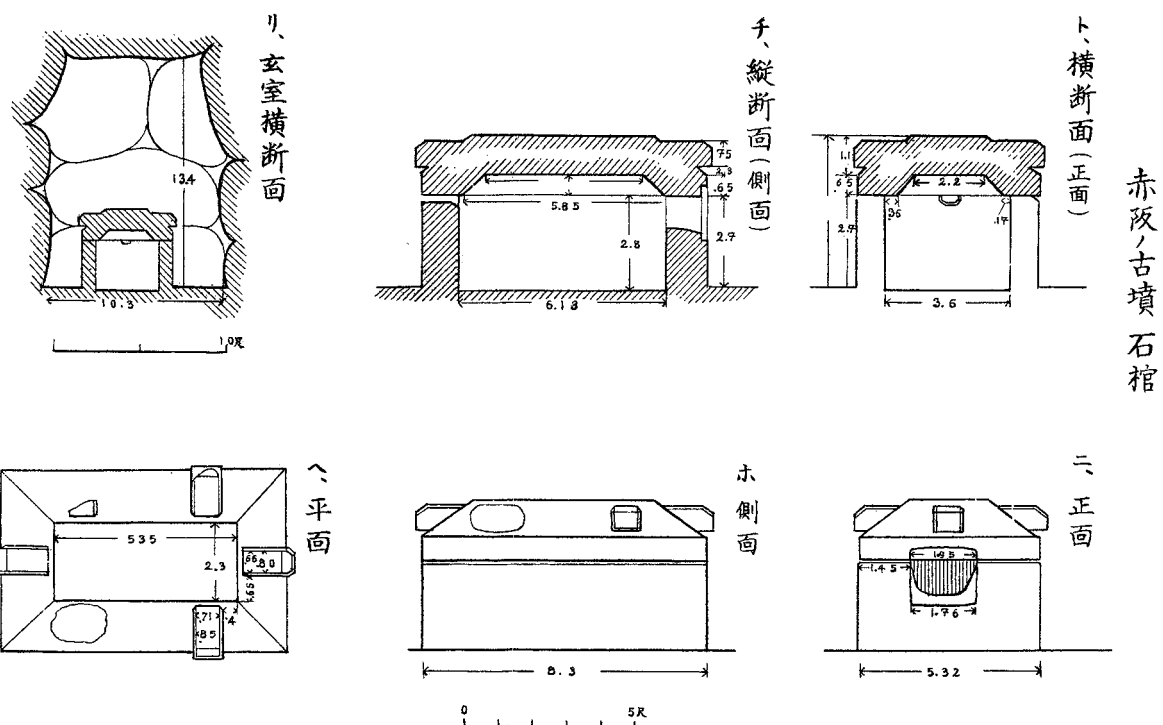


図7 奈良縣史蹟勝地調査会による石棺実測図1

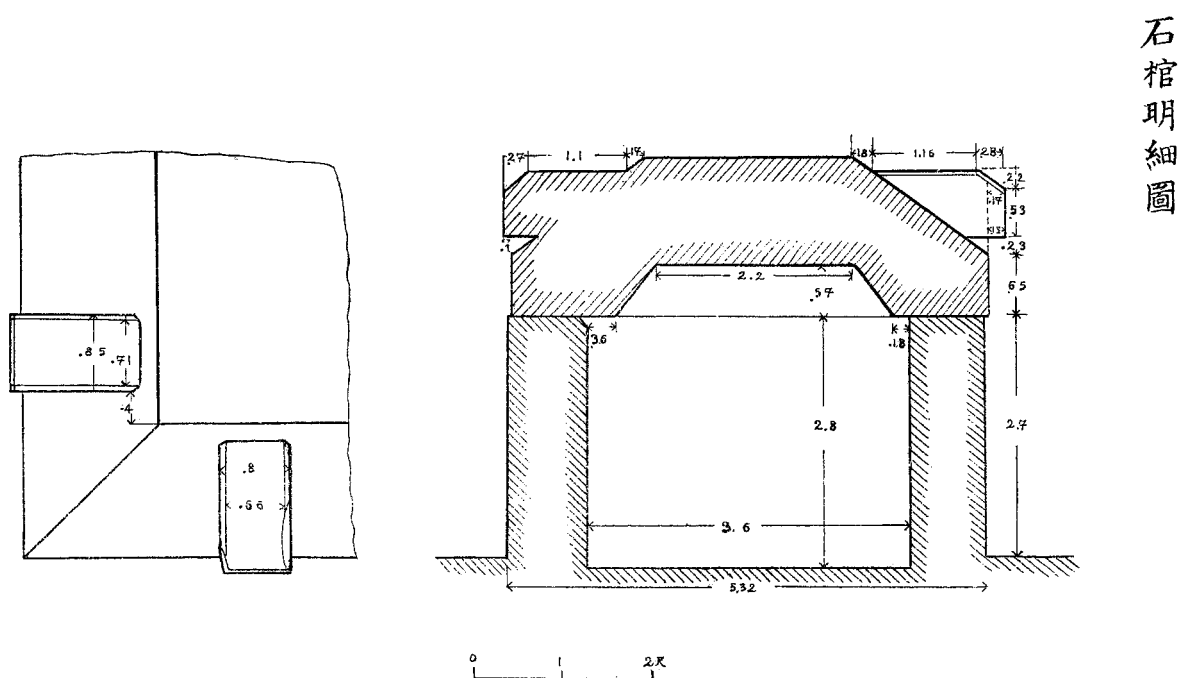


図8 奈良縣史蹟勝地調査会による石棺実測図2

像され、図6～8に示したように石室及び石棺の測量が実施されるとともに、各部の詳細な観察所見と計測値が提示されている。

この記録の中で注目すべきは元禄期以来「字岩屋の岩屋山」としかみられなかった天王山1号墳に



対する呼称が、地元での俗称として「赤阪ノ古墳」や「天皇山」の名称が初めて使用されたことで、次節で細述する田村吉永による「赤阪天王山古墳」の命名はこの記録がもとになったものと考えられる。

このことは元禄期に天王山1号墳が崇峻陵に治定され、文久期になって「天皇屋鋪」に治定地が変更されるまでのおよそ160年間の間に天王山1号墳を天皇山と呼称する慣習が出来上がったことに起因するものと考えられ、陵墓の治定が古墳の呼称を変えてしまった事例として注目される。

なお、この報告では周辺に陪塚が存在することが報告されているものの、1号墳も含めて立地や墳丘に関する所見の記載はない。

#### 第4節 田村吉永による調査

田村吉永による調査は昭和7年（1932）に行われたものである<sup>18)</sup>。この調査で最も特筆すべきは現在の古墳名称でもある「赤阪天王山古墳」<sup>19)</sup>の名称が初めて使用されたことと、それまでは石室や石棺ばかりが注目され、顧みられることの無かった墳丘を中心に様々な考察が行われている点であろう。

この田村による調査が行われる以前は多くの文献が墳丘に関して全く記載がないか、あっても円墳として認識されていたようであるが、現地を踏査した田村はその墳丘が方墳となることを確信し、初めて墳丘の測量を行なうとともに、天王山1号墳が方墳であることを明らかにしている（図9）。

なお、田村の報文によると個人蔵のため現在詳細は不明ながら、桜井の絵師 岡本桃里によって幕末に著された古墳の絵図<sup>20)</sup>には天王山1号墳が方墳として描かれているようで、江戸の段階で墳丘にまで着目して記録が作成されていたことは注目に値するものである。

さて、田村による墳丘観察の所見には石室や石棺に関する詳しい報告以外に、先述したように墳丘が方形を呈することや詳細な墳丘各部の観察記録があり、墳丘規模が南北157尺、東西は北側で166尺、南側で約172尺とやや東西に長い墳丘を持つことなどが記載されている。

また、墳丘の北側には本墳が3段築成であることを示す平坦面が顕著に残っていること、墳丘高は南側で約33尺を測ることなどが報告されるとともに、石舞台古墳や春日向山古墳（用明天皇陵）、山田高塚古墳（推古天皇陵）など、他の方墳との比較を基に古墳末期に築造された後期古墳との位置づけがなされている。

このように田村による調査は天王山1号墳の墳丘形状や規模を初めて明らかに

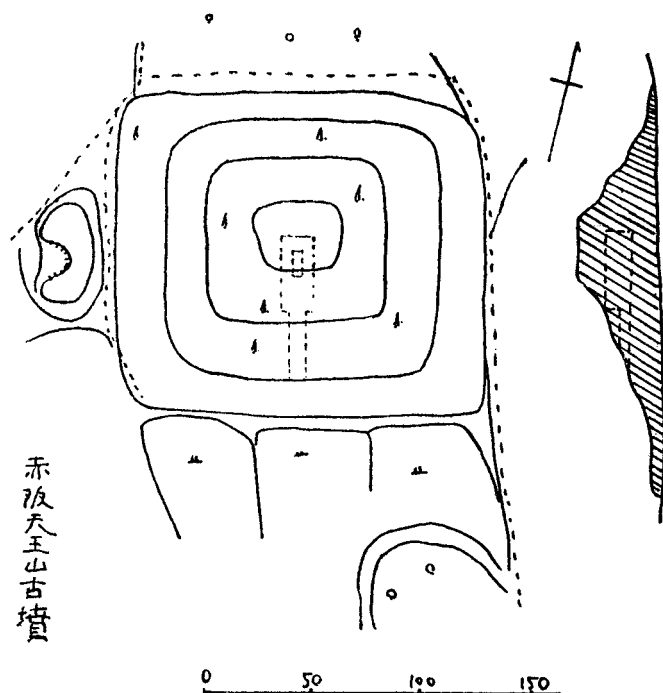


図9 田村吉永による墳丘測量図

ただけではなく、他の古墳との比較検討という考古学的手法に基づき、初めてその築造時期を古墳末期と位置づけた点が大きな成果であると言える。

## 第5節 日本古文化研究所による測量調査

日本古文化研究所による測量調査は実質的に梅原末治以下、京都大学考古学研究室のメンバーによって昭和10・12年（1935・1937）に実施されたもので、先述した佐藤・田村の調査成果を受けてより正確な測量図の作成を行い、墳形や内部構造をより明らかとすることが目的とされている。

この調査によって作成された測量・実測図は図10～14に示したものがある。中でも図10に挙げた略測分布図は既に知られていた周辺に展開する小規模な古墳との位置関係を初めて把握したもので、1号墳とその他の古墳の関係が明瞭に見て取れよう。図11は天王山1号墳の墳丘測量図である。測量によって得られた墳丘はほぼ方位に則って築造されており、平面プランは東西150尺に近く、南北は約140尺あまり、高さは30尺、墳頂には約40尺の平坦面が存在するとされている。

また、平面図では確認できないが、断面図では墳丘の北面に段築に伴うテラス面が存在し、やや高さのある1段目の墳丘の上にほぼ同じ高さの2・3段目が乗る3段築成の様子が観察されたほか、後世の攪乱部分における観察からは本墳に葺石や埴輪の存在は確認できないと報告されている。

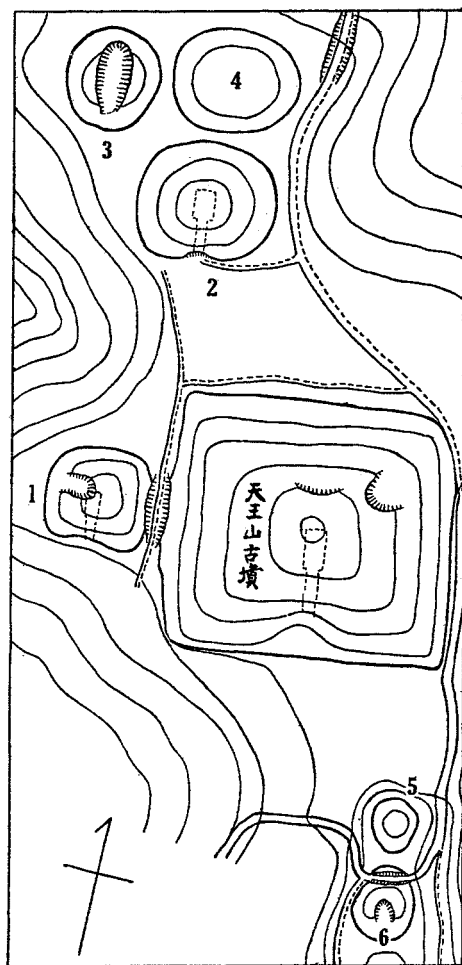


図10 日本古文化研究所による  
地形略測図

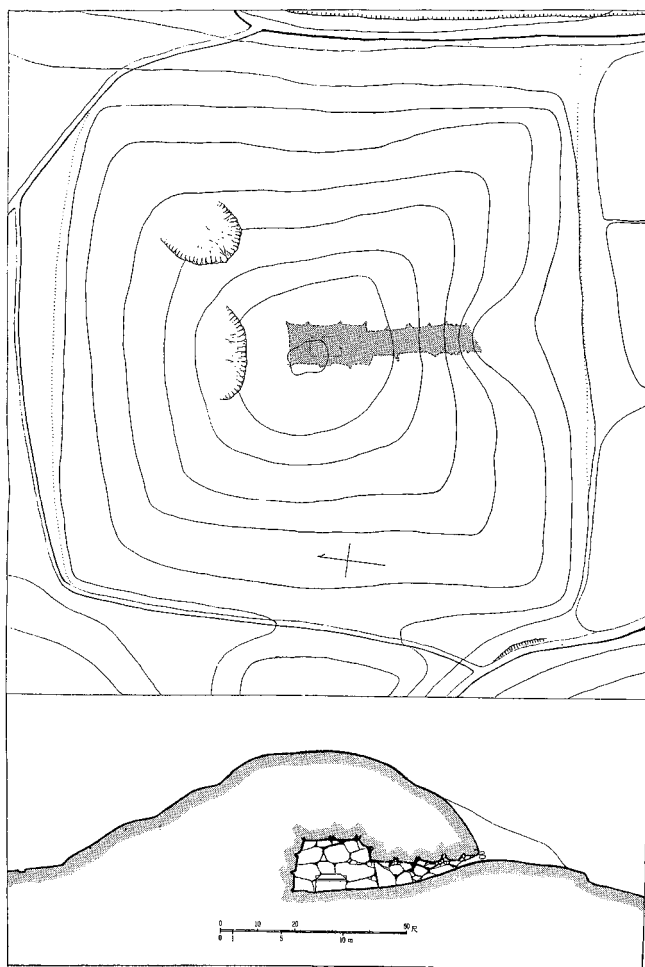


図11 日本古文化研究所による天王山1号墳墳丘測量図

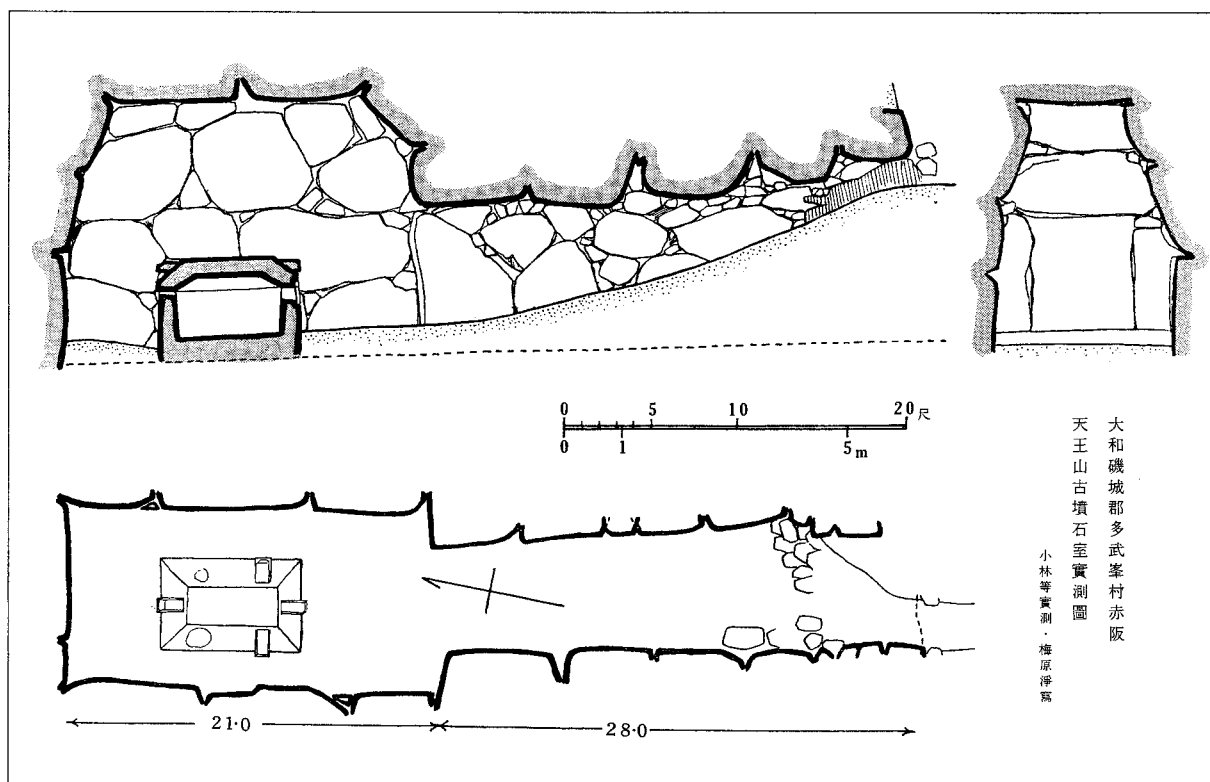


図12 日本古文化研究所による石室実測図

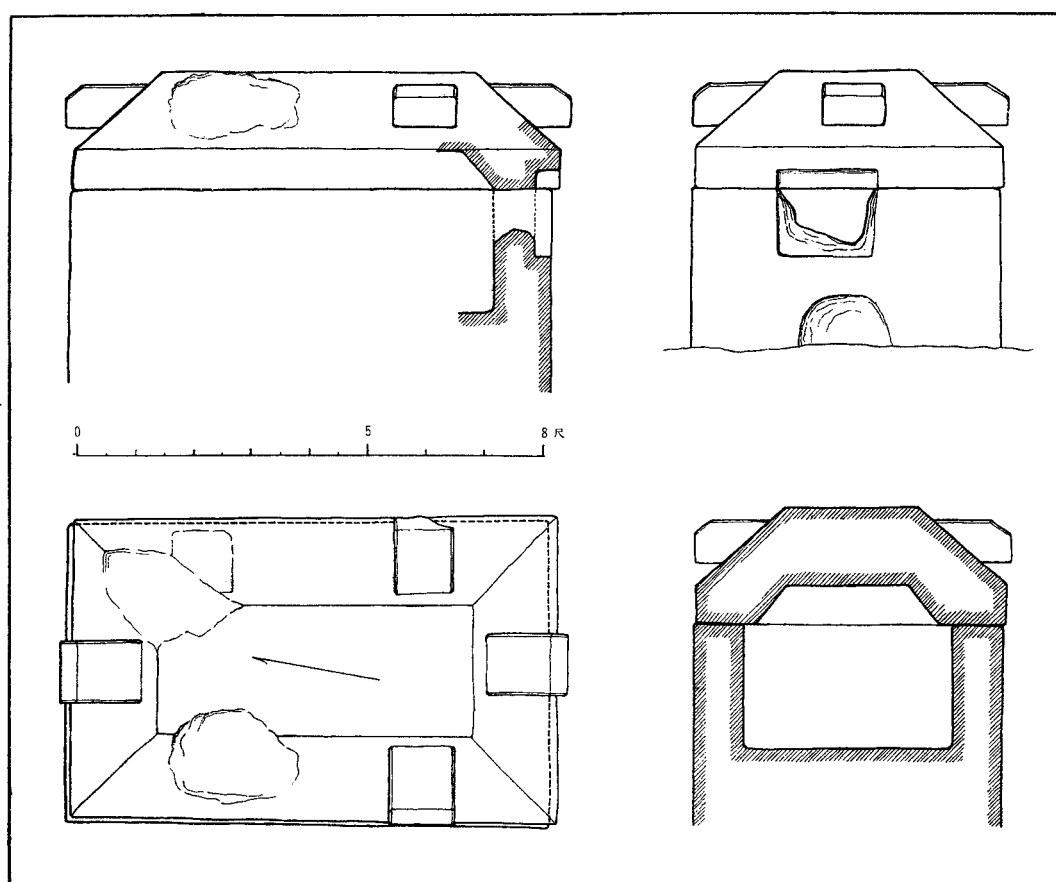


図13 日本古文化研究所による石棺実測図

なお、石室と墳丘の関係については墳丘のほぼ中央に石室が存在することの他に、図11の下段に示した断面図の観察から羨道の天井付近のレベルが北面の墳丘基底レベルに近いことを挙げ、石室基底は田村による測量図（図9）のように墳丘1段目のテラスに相当するのではなく、墳丘よりも下部に位置し、墳丘の大半が盛土によって構築されたものであることが指摘されている。

さて、石室の状況は実測図を見る限り現在もあまり変化は認められず、良好に保たれているようである。報告による石室の規模は玄室が長さ約28尺、幅約10尺、高さ約14尺で、羨道は長さ約28尺、玄門部幅が6尺とされ、形態的には羨道の天井が入口に向かうにしたがって高くなっていくこと、入口付近には1尺内外の閉塞石が露出していることなどが報告されている（図12）。

また、石棺は身の長さ8尺、幅5尺5寸、高さ4尺と報告されているが、これも細部の観察記録を読む限りでは現状に変化は認められず、比較的良好な状態で保存されている（図13）。

図14に挙げたのは周辺に点在する古墳のうち、当時石室が開口していた2・3号墳石室の略測図である。このうち2号墳については土砂の流入が進み、現在は人の進入は不可能となっているが、当時は辛うじて中に入れたようで壁面の記録は欠落しているものの、平面及び縦断面図が作成されており、石室内部の形状をうかがうことができる。

なお、2号墳の墳形については明確な記載がないが、墳丘に関する記載や図10の略測図からは一辺63～64尺程度の方墳と考えられていたようである。石室は片袖式のもので、羨道部長が16尺、玄室は長さ14尺6寸、幅6尺内外と記録されている。

また、この他に石室入口の天井石には加工が施されていること、墳丘がすべて盛土で構築されている可能性があること、想定される石室基底が1号墳と同様に墳丘基底よりも下部に位置する可能性があることなどが指摘されているが、現在では加工の状況がどのようなものなのかは判然としない。

3号墳は羨道部壁面と平面及び縦断面図が作成されている。墳丘は径約70尺、高さ15尺前後の円墳で、両袖式の石室を有し、羨道は長20尺、玄室長14尺、玄室幅8尺4～5寸、玄室高は8尺6寸だが

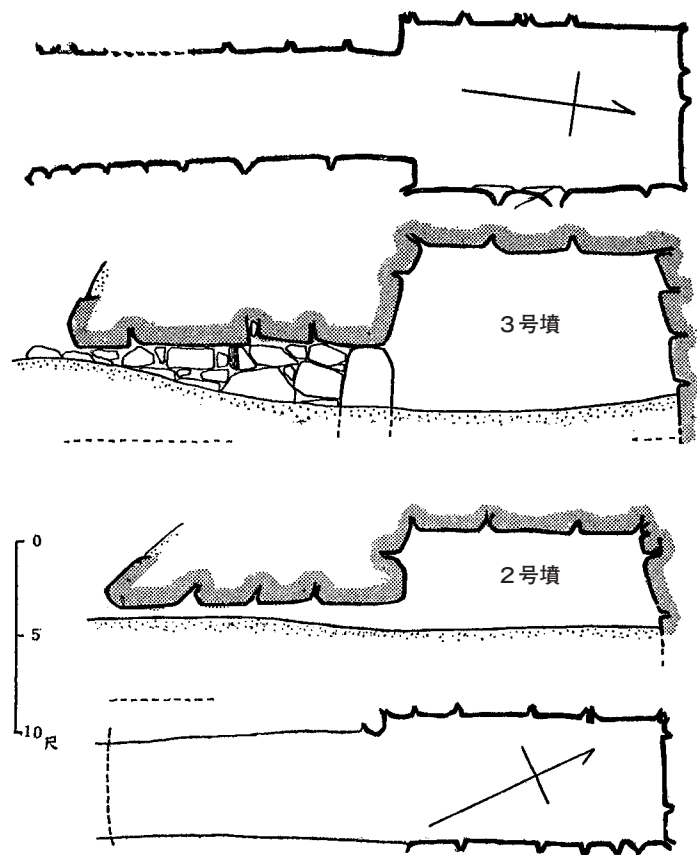


図14 日本古文化研究所による天王山2・3号墳石室略測図  
（古墳の号数は現在の名称に改めて表記している）



埋没部分を勘案すると10尺を超えると想定されている。

周辺の古墳については3号墳の北方でその存在が確認されている4・5号墳のうち、4号墳は石室材を抜き取ったような窪みがあり、両古墳ともに3号墳のように比較的規模の大きな墳丘を持ち、墳丘面に拳大の割石が恰も葺石のように散布しているさまが記録されている他、1号墳より東へと続く尾根上には径30～40尺、高さ2間程度のやや小規模な4基の円墳（カタハラ3～6号墳に相当するか？）が連続して築かれている状況が報告されている。

この調査は今から約80年も前の調査だが、これ以降は測量等を含め基礎的な調査は行われておらず、この時の調査成果と観察所見が現在に至る本古墳群に対する基礎資料となり、昭和29年（1954年）12月25日には1号墳が「天王山古墳」として史跡に指定されている。この梅原らによる調査は今日的には測量の精度や方法、遺構の解釈等に若干問題となる部分があるものの、昭和初期の段階において現在に至るまで基礎資料として耐えうる精度の資料が提供されたということは本調査が非常に質の高いものであった事を示すものと言えよう。（橋本）

#### 【註記】

- 1) 松下見林 1778『前王廟陵記』※この記録は元禄9年（1696）に成立したもので、安永7年（1778）に刊行されている。
- 2) 林鶯峯『御陵所考』
- 3) 宮内庁書陵部蔵『山陵取締之件』
- 4) 細井知慎 1699『諸陵周垣成就記』
- 5) 並河誠所編 1734『大和志』『日本輿地通志畿内部分』
- 6) 本居宣長 1772『菅笠日記』
- 7) 荒木田久老 1782『やまと河内旅路の記』
- 8) 大神宗保 1784『大和国中山陵絵図』
- 9) 蒲生秀實 1848『山陵志』
- 10) 北浦定政 1848『打墨繩』
- 11) 雀塚は奈良県遺跡地図では14D-0148号の古墳として登録されているが、現在でも崇峻天皇 倉梯岡陵飛地として宮内庁によって管理が続けられている。
- 12) 宮城三平 1880『山陵記』幽蘭室蔵版
- 13) 内閣記録局 1891『法規分類大全』
- 14) 森浩一 1965『古墳の発掘』中央公論社
- 15) 野淵龍潜 1893『大和國古墳墓取調書』奈良縣  
明治期における野淵らによる県内古墳の悉皆調査報告は肉筆による『古墳墓見取図』第1～4冊の4冊と、解説文である『大和國古墳墓取調書』甲～丙の3冊からなるものであるが、ここでは書名が煩雑となるのを避け、7冊の影印本である秋山日出雄編 1985『大和國古墳墓取調書』（助由良大和古代文化研究協会）で採用された書名で統一することとする。
- 16) 「大和志」の誤りか。
- 17) 佐藤小吉 1914「赤阪ノ古墳」『奈良縣史蹟勝地調査会報告書第二回』奈良縣
- 18) 田村吉永 1935「大和に於ける方形墳」『大和志』第二卷第十一號 古墳號 大和國史會
- 19) 赤阪の阪の表記については多くの文献が「阪」の字を用いているが、本報告では明治期の旧土地台帳や地元に残る古文書等において用いられた「坂」の字を正式な字名として採用し、「赤坂」と表記することとする。
- 20) 当時兵庫在住の個人所蔵資料にこの絵図があったようで、田村氏は現物を実見し内容を確認されている。
- 21) 梅原末治 1938「第二 大和赤阪天王山古墳」『近畿地方古墳墓の調査三』日本古文化研究所
- 22) 梅原らによる報告では現在の1号墳を天王山古墳とし、2号墳からを順に1号～6号と墳丘の名称を設定しているため、現在の呼称とは一致していない。ここではすべて現在の名称で統一して記述することとする。

## 第4章 測量報告

### 第1節 古墳群の分布とその名称

第2章でも述べたように天王山古墳群は音羽山（標高851m）より北西へと派生する小規模な尾根群の一つに築造されている（図1，4・図版1～3）。現在は市道により切断されているものの、南東に展開するカタハラ古墳群とは同一の尾根上に所在し、1号墳から北ではやや北西方向へと延びる規模



図15 天王山古墳群の分布状況（1/1,000）

の大きな西尾根と、北東方向へと延びる小規模な東尾根に尾根が分岐しており、この尾根上を中心として古墳が展開している。

今回、事前の踏査に基づき測量調査を実施した結果、図15に示すようにこれまで周知されていなかった多くの古墳および古墳状隆起の存在が推定されるに至ったため、既知の古墳と合わせ便宜的に1～15号墳と命名した。この中には確実に古墳と確認できるものだけでなく、その存在に疑問の残るものも含まれるが、今後の遺跡の保護や研究に備える事を考慮し、古墳の可能性が考えられるものすべてを拾い上げる事としている。なお、東西2つの尾根のうち西尾根には3～12号墳が、東尾根には13～15号墳の存在が推定され、狭い範囲に多くの古墳が密集して築かれている。

## 第2節 各古墳の現況

### 1. 天王山1号墳【図16～24・図版4～44】

#### (1) 墳丘の構造

1号墳は今回報告する古墳群中で最も南に位置する方墳で、周知のとおり「天王山古墳」として史跡の指定を受けている古墳である。今回の報告では他の古墳との識別を明確にするため便宜的に指定名称とは異なる1号墳の呼称を使用することとする。

さて、現在墳丘の南東隅付近は道路建設によって大きく削平を受けているが、本来は平成11年（1999）に調査を実施した6世紀代のカタハラ古墳群と同一の尾根筋に立地している。カタハラ古墳群は痩せた尾根の稜線上を中心として径10～15m前後の円墳が数基点在するものだが、尾根筋には大きな墳丘を築造できるような平坦面が無く、唯一、1号墳の築造されている標高155mあたりの地点が最も広い面が取れる位置にあたっている。この地形的な状況から、墳丘は平坦面を最大限に利用できるように概ねGN-18°-Wとやや西に傾いた方位で築かれている。

なお、1号墳の西には隣接して2号墳が築かれている。詳細は後項で述べるが、図16からは2号墳墳丘の東側が1号墳に切られている様子がうかがえる。恐らくは1号墳の築造に際し、先行して存在した2号墳墳丘の東側を削り、切通しを設けたものであろう。

さて、これまでに行われた田村や梅原などによる墳丘測量では、1号墳は南北辺に対してやや東西辺が大きい方墳として報告される一方、その測量図に現れた墳丘形状は整美な方形を呈しているが、実際には北辺に比べて南辺がやや幅が狭い上に、西辺が南に行くにしたがって東へと、東辺が南へ向かうにしたがって西へと窄まったやや歪な墳形を呈している。図16に示したのは今回墳丘および周辺地形を測量した際の素図で、図17はこれに筆者の現地観察に基づいて基壇やテラス、現状の墳丘裾などを書き加えたものである。以下、この両図を参考に墳丘の様子を検討していくこととする。

まず初めに墳丘規模を見ていこう。発掘調査を経たものではないことと、やや歪な墳形のため細かな数値を提示するのは困難だが、現地観察による、見かけの墳丘裾から導き出される墳丘規模は北面に近い地点で東西幅約50.5m、西面に近い地点で南北幅約47mとこれまでの報告の通り、東西規模が若干大きくなるようである。



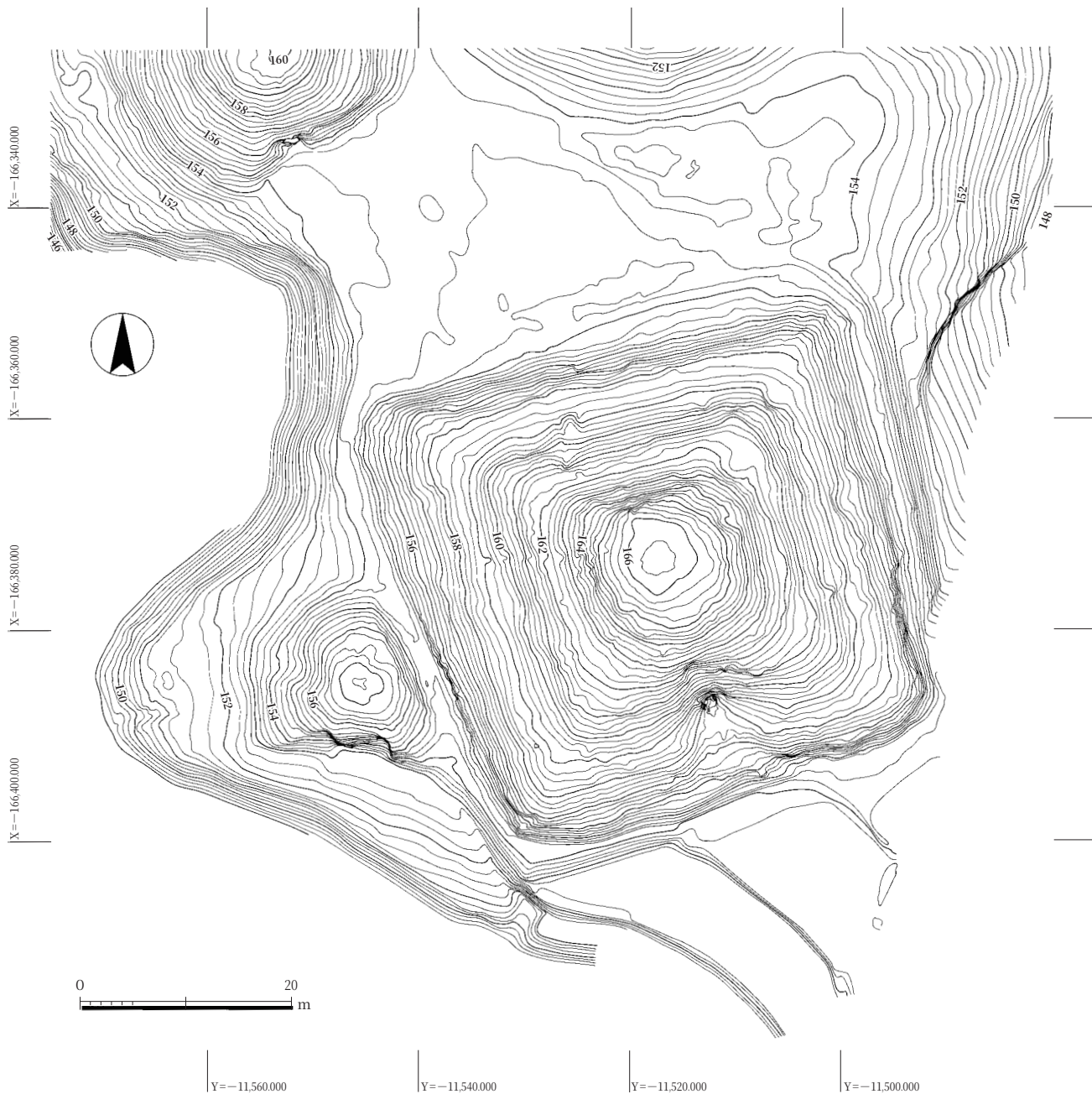


図16 天王山1号墳周辺の地形測量図1 (1/600)

また、今回の測量調査の成果からは墳丘の南西隅部分と東面の基底より下に基壇状の段が付加されていることが推定された。1号墳の墳丘は基本的に3段築成で、墳丘裾は概ね標高154.5m～155mとほぼ一定のレベルに保たれているが、墳丘の北東隅部から東面にかけては高さ2.5mほどの基壇状の斜面が存在し、最も低い地点で標高152mあたりに基壇基底が存在している。墳丘南西隅部分の基壇状の遺構は東面のものに比べ明確ではないが、西面から南面へかけてのコーナー部分に推定する事ができる。この部分に想定される基壇基底も概ね標高152mあたりに位置するものだが、南面部分では南側に水田区画が存在することや、西面部分では後述する2号墳南側の墳丘を破壊する攪乱部分の斜面と基壇状の斜面が接続することなどから、後世の地形改変による造作の可能性も否定できない。



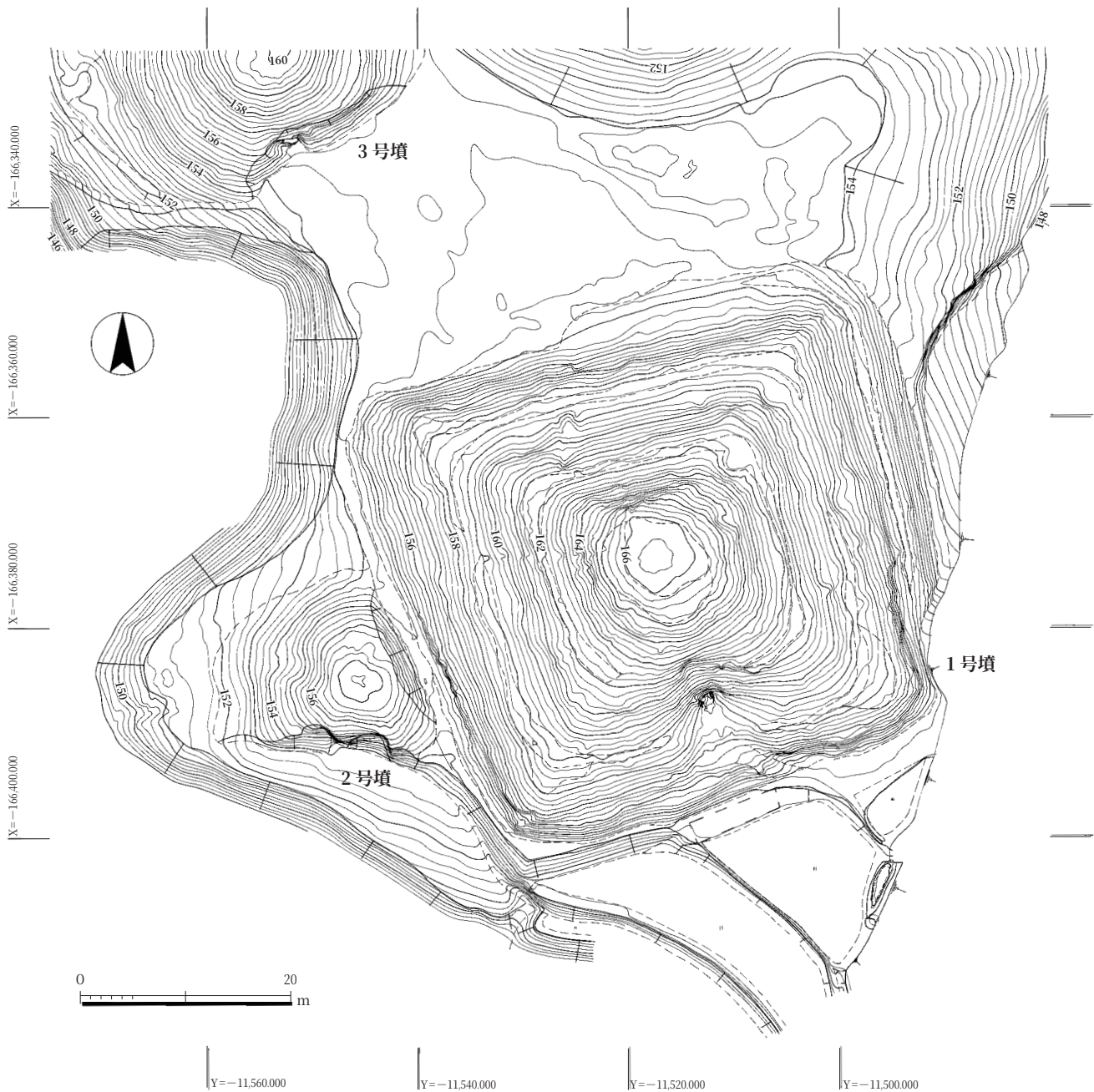


図17 天王山1号墳周辺の測量図2 (1/600)

しかしながら、墳丘南側に存在する3枚の水田が東から西へと大きな傾斜を持って棚田状に造成されていることから、墳丘の築造に際して北東から南西へむけての自然の傾斜地形があり、これを解消するために、基壇状の遺構が造作された可能性も考えられることから、ここではその可能性のある部分として提示しておくこととする。なお、この推定される基壇部分を含めた墳丘の規模は最大で東西約52m、南北約49.5mとなるが、先述したとおり1号墳は歪な墳丘を持つことから、測定する地点によって数値に変動があることを断っておく。

さて、墳丘上部の構造に目を向けることとしよう。現地踏査や測量図からの検討では墳丘上には段築によるものとみられる上下2つの平坦面が廻る様子が確認できる。墳丘下段の平坦面は墳丘南側の

石室開口部一帯が大きく削られているほか、四隅部分と東辺部分にやや流失が進んでいる傾向があるものの、標高158.5m付近に幅1.5m前後の平坦面が全周するようで、基底部との比高差はおよそ3.5mである。墳丘上段の平坦面は石室開口部の上にあたる部分は流失しているものの、他は比較的残りが良い。平坦面は標高161.5m付近に位置し、下段との比高差はおよそ3m、幅は1m前後と現状のみかけでは下段よりはやや幅の狭いものである。

墳頂部の標高は166m～166.25mで、上段の平坦面とは4.75mほどの比高差がある。ここには径8mほどの不整形の狭い平坦面があり、その西から南側にかけてはごく緩やかな傾斜を持った平坦面が存在する。この外縁の平坦面を含めた墳頂部平坦面はその大きさが長軸約11.5m、短軸約10mで、本来墳丘と同じ方形を呈していたと思われるが、墳丘の流出が著しく現状で旧形は判然としない。墳丘高は、現状の墳丘基底から墳頂部までの高さは約11.75m、墳丘東辺の基壇部裾からの高さは約13.75mで、墳丘上には拳大前後の礫の散布が少量認められるが、その散布は局地的かつ少量のものであり、これらをもって葺石の存在を示すとは言い切れないと考えている。実際、墳丘各所の削平や崩落、根起きなどに伴う攪乱部において、あるべきと考える葺石が確認できないのが実情で、これについては将来の調査を待つこととしたい。

なお、今回の測量調査では墳丘が良好な状態で保たれていることを再確認した一方、各所に大きな樹木が繁茂し、風害や樹勢の衰えによる樹木の倒壊時の根起き痕が多数認められ、墳丘の保存に少なからず悪い影響を与えていることも確認できた。今後の墳丘管理では適切な時期に伐採を行い、墳丘に大きく根が入らないよう樹木の成長をコントロールする必要があるだろう。

## (2) 石室

### 石室の構造

石室は南南東に開口する両袖式の横穴式石室である。石室の主軸はGN-16°-Wであり、現状の墳丘主軸としたGN-18°-Wとはほぼ同じ方位で設置されていると見て良いだろう。羨道側より多量の土砂の流入があり、全容は知る由もないが、現状で確認できる石室規模は全長15.3m以上、玄室部の長さは6.5m、幅は奥壁部で3.2m、中央部で3.0m、前壁部では3.2mである。玄室の高さは最も土砂の堆積が少ない奥壁側で4.2mあるが、本来の床面はそれほど深い位置には無いと思われる。

羨道部は長さが8.8m以上、開口部の幅は1.8m、中央部でも1.8m、玄門部では1.7mと開きは無いと言って良い。また、羨道部の高さは玄門部で1.9mだが、中央部で1.16m、開口部では50cmと土砂により開口部の高さは著しく低くなっている。この石室の状況は最も古い測量報文である大正3年(1914)の佐藤小吉による石室測量図(図6)と比較しても羨道部に若干の土砂流入の増加はあるものの、100年の間に大きな変化は無いようである。

### 奥壁

基底部での幅は3.2m、石室中軸線上における基底からの高さは4.1mで、先述したように若干だが流入土の堆積があるようである。石材は大型のものを横方向に配して3石の積み上げが見られるが、基底石は幅3.2m以上、高さ1.5m以上と巨大な石材が用いられているほか、上部にもこれに面を揃えなが

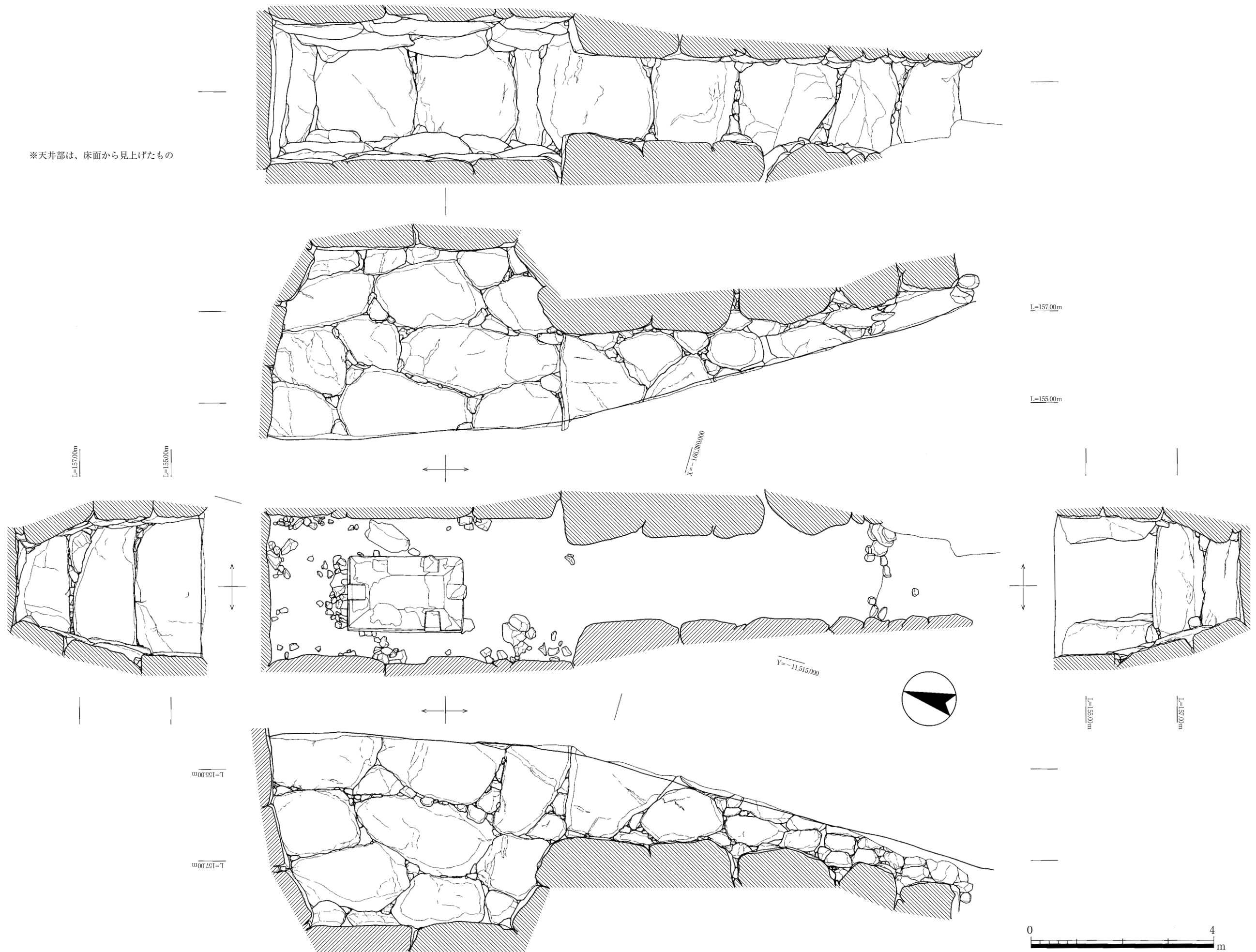


図18 1号墳石室実測図 (1/80)



ら2つの石材が用いられている。なお、2段目では東側が若干低い事を解消し、石材上面の高さを揃えるために、幅1mほどの石材が東側に積まれている他は3つの石材だけで構成されており、基底石が約4°と若干内傾気味に据えられているのに対し、2石目からは持ち送りが顕著で約14°、3石目は約29°と徐々に傾きが強くなっている。

### 側 壁

側壁は袖を境として玄室部と羨道部に分けられる。右側壁は玄室部では3段の積み上げを基本としているのに対し、左側壁は3段の積み上げを意識しつつも天井部の高さを揃えるためであろうか、やや小形の石材をその上に積み上げており、結果的に4段の積み上げを行うこととなっている。玄門部から通る石材積み上げの目地も左右の壁で違いがあり、右側壁では玄門部において羨道部天井石が架構される高さから玄室部基底石上面へと北へ下がりながら目地が通るのに対し、左側壁では羨道部天井の高さを揃えつつ北へと目地が通っている。この結果、右側壁においては基底石上面に目地がくるのに対し、左側壁では基底から2石目の石材の上面に目地が通っており、左右の側壁においても架構法に違いを認める事ができる。

玄室部における左右の側壁の架構法の違いは持ち送りの方法にも見る事ができ、右側壁では基底石が3°とほぼ垂直に立てられ、2石目から上部が約12°と持ち送りが2石目から始まっているのに対し、左側壁は基底から2石目までが2°～6°以内とほぼ垂直に積まれ、石室中央部では3石目が約27°と極端な角度で持ち送られている。

羨道部分の側壁は左右ともに羨道側に傾斜する面を持った袖石に被せるように石材が積まれており、袖石の設置と羨道部側壁の構築との間に作業上のプレスがあったことがうかがえる。羨道部の多くは流入土によって埋もれているため、その全容は不明だが、確認できる石材は玄室部に比べると著しく小さく、中でも右側壁の方が、左側壁よりも小さな石材が使用される傾向にある。

### 前 壁

前壁部は玄門部の袖石と羨道部天井石、そしてこの上に乗る石材の都合4石のみで構成されており、前壁部の基底幅は3.2m、高さは4m分が確認できる。玄門部の幅は1.7m、高さは1.9mである。羨道部天井石の玄室側は石材の傾斜面を利用し、その上部の石材と合わせて約27°と奥壁や左側壁の上部に近い角度の持ち送りを作り出している。

### 天 井

天井部は持ち送りによって狭められた4.4m×1.8m前後のスペースを2石の天井石によって塞いでいる。図18には石室床面から見上げた状態の図を示しているが、ほぼ同じ大きさの石材が丁寧に組み合わせられており、隙間を埋めるような小さな詰石はあまり見受けられない。

羨道部の天井は5石分が残存している。このうち玄門部から羨道側への2石は、ほぼ水平な高さに天井面を揃えて架構されているのに対し、これより入口側への3石は高さが徐々に高くなるような構築方法がとられている。この玄門部と羨道入口部の天井の高さの差は約90cmで、玄門側2石は玄室部と同じく天井面が平らになるようにフラットな面を利用し丁寧な架構が行われた様子が感じられるが、





L=156,00m



Y=-11,515.000

X=-166,376.000

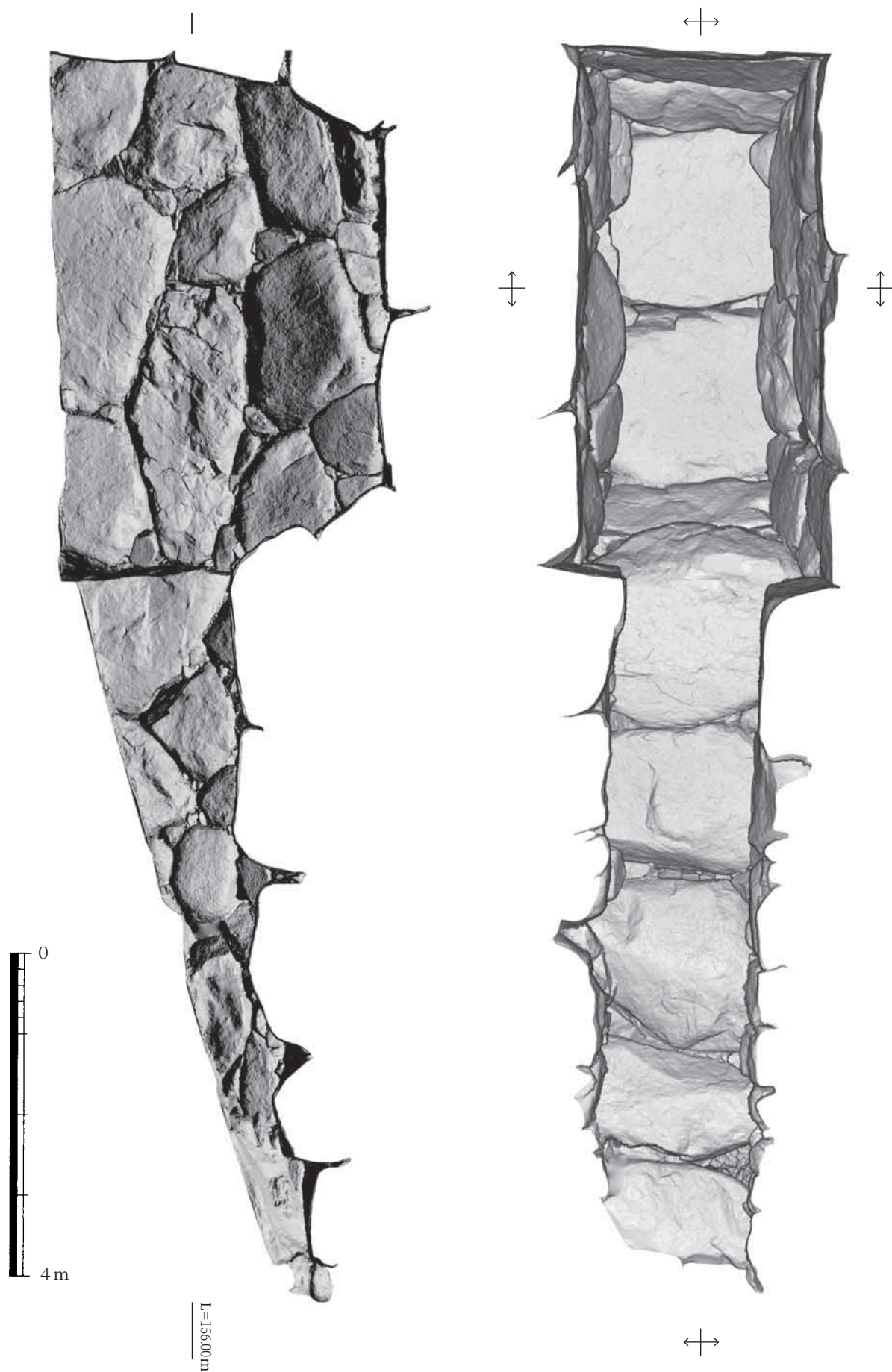


図19 1号墳石室三次元計測図1 (1/70)



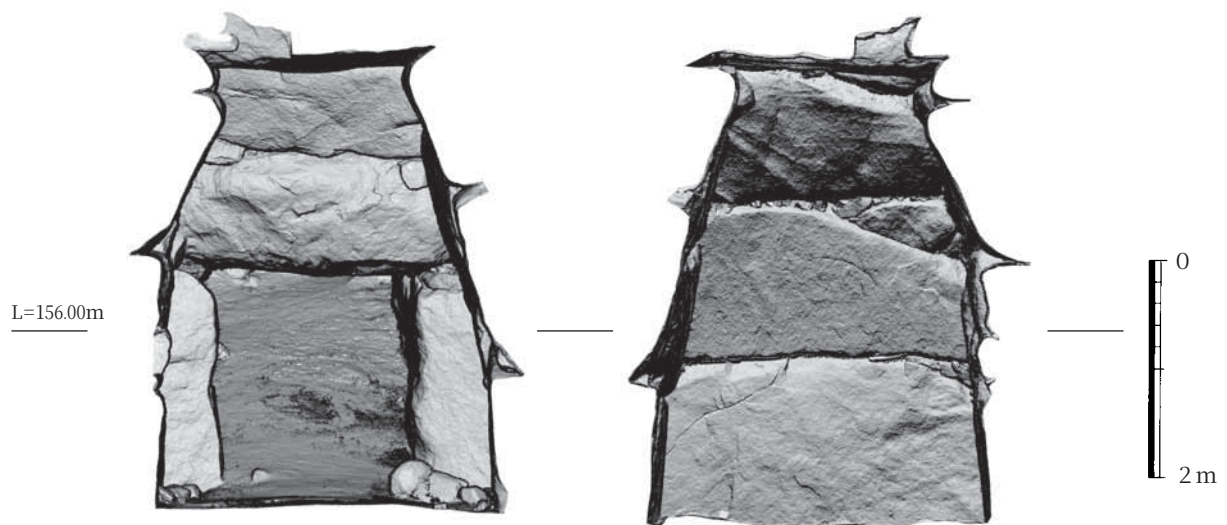


図20 1号墳石室三次元計測図2 (1/70)

入口側の3石にはそのような配慮はあまり認められず、石材間の隙間も多く目地の詰石も顕著である。

なお、石室開口部に露頭する羨道右側壁部には天井石下面のレベルより上まで側壁の一部となるような石材が積まれている様子が確認できる(図18・図版22)。また、土砂の堆積により判然としないが、奥壁側から見て開口部左側には天井石下面よりも高い位置に閉塞石の可能性がある石材が露出している。これらの石材が築造当初からの原位置を保つものとするれば羨道部の天井石は5石までで完結し、南に向かって幾らかは側壁が続くような構造も推定し得るが、現状では旧状を窺うことはできない。

#### 床面の状況

床面は流入した土砂によって埋没が進んでおり、羨道部分にはかなりの土砂が堆積しているが、奥壁から約13m地点、現在の石室入口付近では一部閉塞石の露出が認められる。この閉塞石は20～60cm大の石材で2段から3段程度の石材の積み上げが確認でき(図18・図版28)、出入口の東側によく残されている。これらは玄門付近の天井石よりも高い位置にあり、大半は流入土の下に残されていることが推察できる。

なお、玄室部、特に奥壁周辺は後述する家形石棺の状況から、それほど多くの土砂が堆積しているようには見えない。現在床面には数cm大の小礫と人頭大以上の石材の2者が散乱しているが、前者は壁面の目地や裏込めから抜け落ちた詰石や、床面に本来敷かれてい

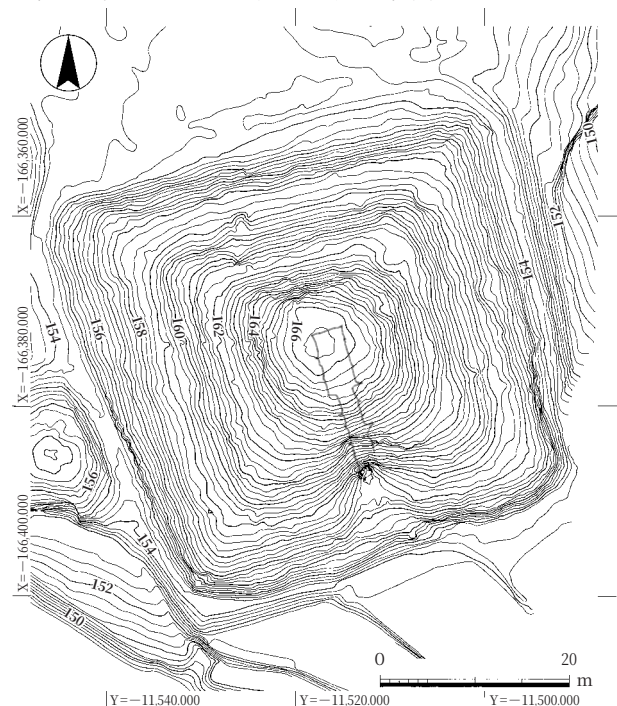


図21 1号墳の石室の位置 (1/800)

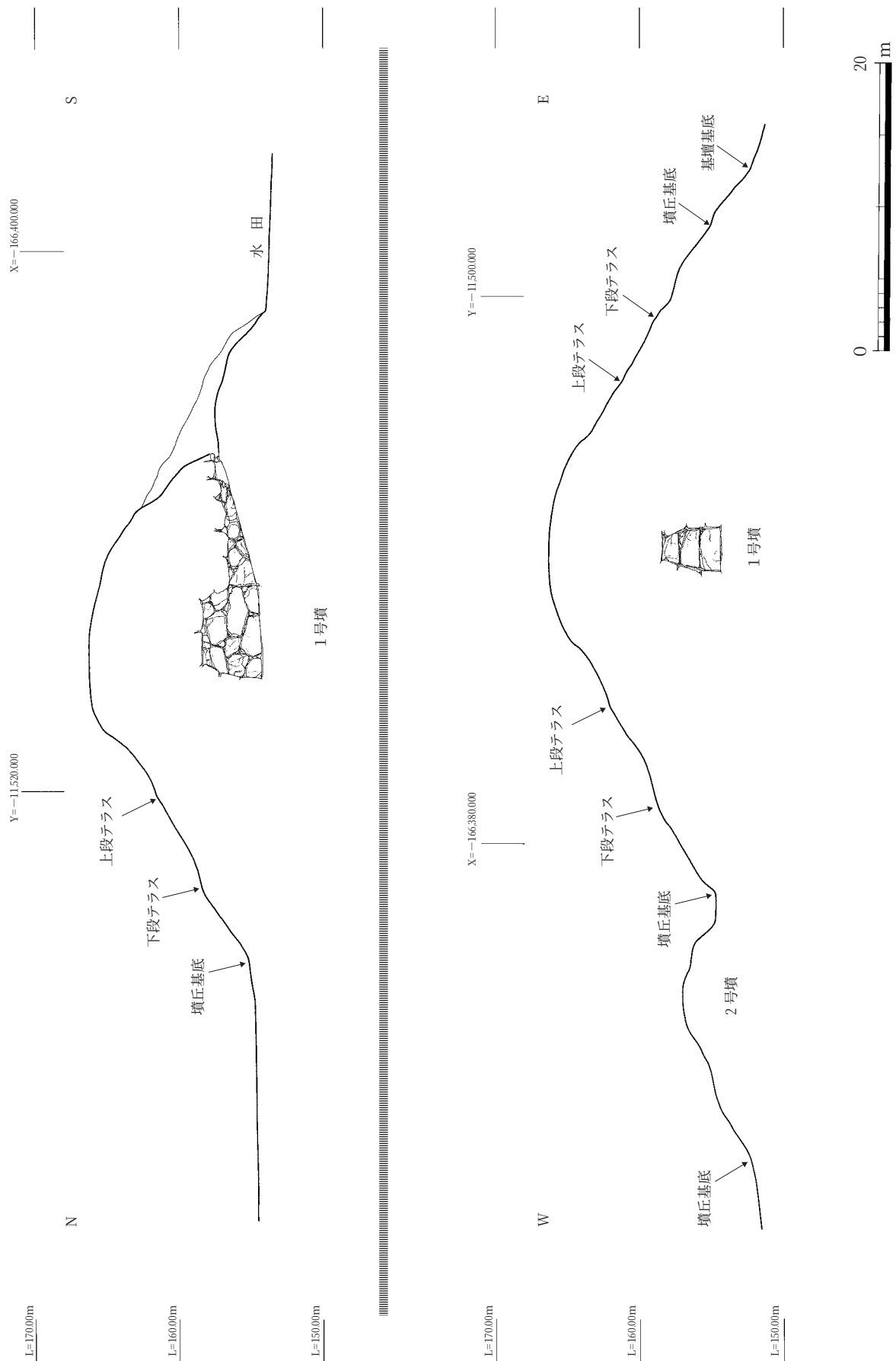


図22 1号墳墳丘断面図 (1/400) ※石室中軸線からの見通しである。



たとえられる礫敷などの石材が混在している可能性があり、後者は壁面の石材が風化や重量を受けて破損し、落下したものと考えられる。

### 墳丘との関係

石室と墳丘の位置関係を見ておこう。図21には1号墳の墳丘図に石室の位置を落とした図を示した。平面的には石室は墳丘のほぼ中心付近に玄室が位置し、先述したように石室主軸と墳丘主軸も合致したものである。羨道部分は墳丘の南半部分で埋没しており、現状では羨道がどこまで延びるのかは不明である。今後の調査を待つこととしたい。

図22は想定される石室の中軸線上において等高線をもとに墳丘および石室の断面図を作成し両面を合成したもので、上段は墳丘中央部における南北断面、下段は東西の断面を示したものである。

この図の観察では墳丘の南北方向においては石室の位置や現状の墳丘勾配などから、墳丘の南面が後世の削平を最も大きく受け、本来の墳丘裾の位置が不鮮明となっている様子がみてとれるが、東西方向は墳丘の残りが良く、推定される東西の墳丘裾から約24mの地点が玄室の中心部にあたること、東西墳丘裾間においては墳丘の中心となる地点に正しく石室が位置していることが確認できる。

さて、かつて1号墳の石室は昭和7年の田村吉永による調査時には墳丘の2段目あたりに石室床面が位置するとされていたが（図9）、昭和12年の梅原らの測量報告（図11）では1号墳の石室開口部は墳丘裾にはほぼ一致するものの、玄室床面は開口部よりも更に低い位置にあることから、墳丘裾よりも玄室床面が下に位置すると報告され、田村とは違う見解が示されていた。

この両者の検討を参考に、新たな測量図で石室と墳丘裾の関係の検討を行ったところ、先の2つの検討とは異なり、石室床面と墳丘裾の高さがほぼ一致するものであることが確認出来た。

数値を挙げて確認すると、流入土上面ではあるが石棺北側の玄室床面の高さが標高154.28mであるのに対し、墳丘西側の見かけの墳丘裾は154.25～154.50m、墳丘北側では154.75m、墳丘東側では154.75m、墳丘南側は農具小屋の設置により削平を受け基底が判然としないが154.00mと、概ね154.50m前後に見かけの墳丘裾があたっている。この見かけの墳丘裾から土砂によって埋没している遺構面までの深さは明らかでは無いが、本来の墳丘裾のレベルが更に低くなることは明らかなで、地形や墳丘の勾配などから勘案すると玄室床面、墳丘裾ともにその高さは154.00mあたりに位置するものと考えられ、1号墳においては墳丘裾の高さと玄室床面の高さがほぼ同じ高さに設定されていたことがうかがえる。

なお、先述したように羨道部床面の高さや石室開口部がどこに位置するのかは判然としない。昭和12年の調査時には現在の石室開口部前面の羨道の掘り下げが行われたようで、羨道が南へと延びる様子がうかがえる写真が掲載されているが、写真が不鮮明である上に報文中にこの部分に関する記載が無いのは残念である。

### （3）石棺

石棺は玄室の軸線に沿うように南北に据えられている。奥壁から石棺までの距離は1.68m、左側壁からは約84cm、右側壁からは50～60cmとやや右側壁の空間が狭く、石室の中心からはやや北西寄りに位置している。棺の材質は第5章 分析編で報告されているように、牡丹洞東方付近の流紋岩質凝灰角

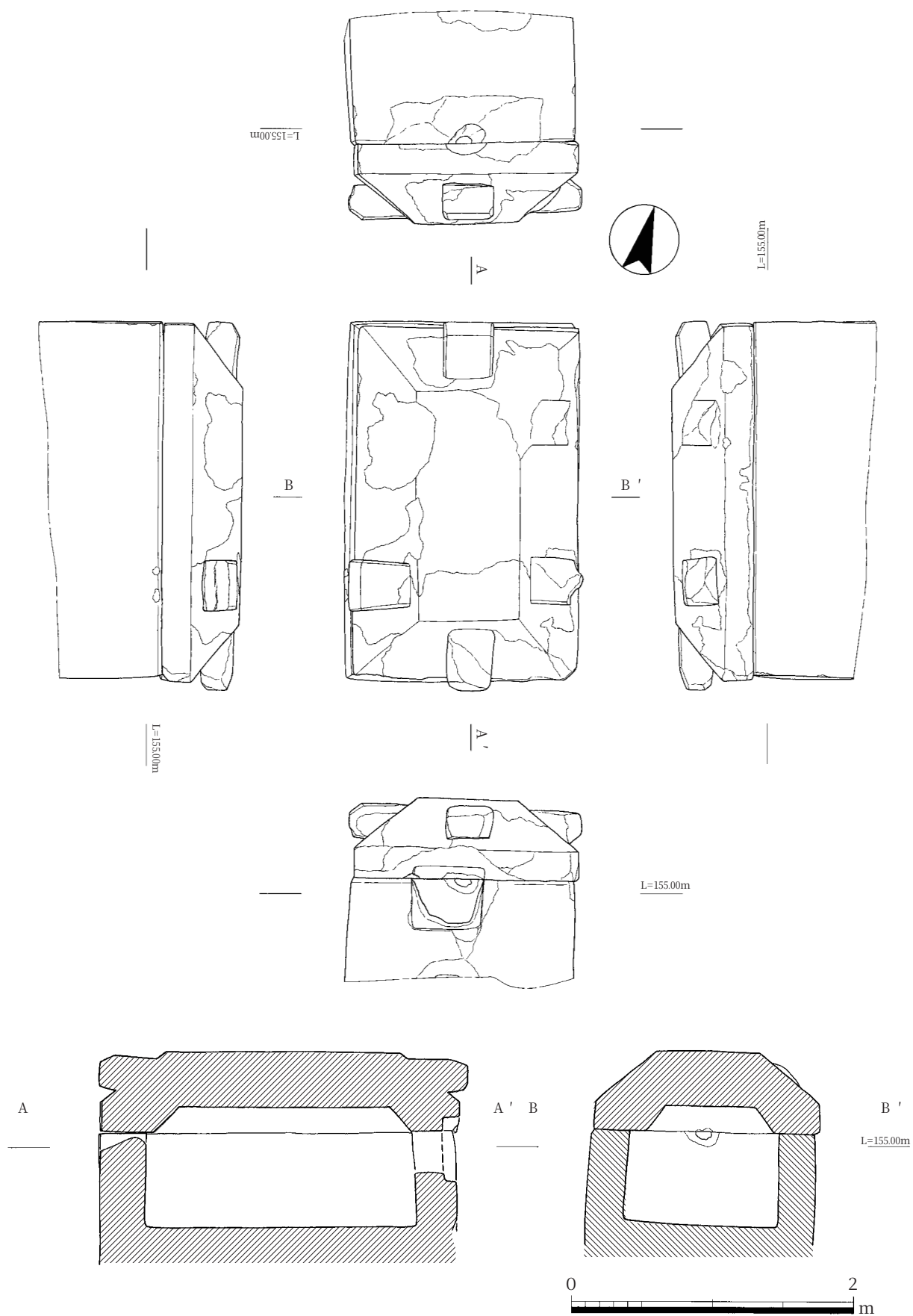


图23 1号墳石棺実測図 (1/40)

礫岩が使用された刳抜式の家形石棺で、身と蓋がほぼ完存している（図23・図版30、31）。

石棺の高さは南小口で棺身が76cm以上、棺蓋が56cmの総高132cm以上を測り、北小口では棺身が95cm以上、棺蓋が56cmの総高151cm以上を測る。棺身は底部が流入土によって埋れ不明な点が多いが、露出している部分で計測するとすべての面において棺身の下部がやや大きく造られており、東棺側では下部が長さ250cm、上部が249cm、西棺側は下部が250cm、上部が248.5cm、南小口では下部が161cm、上部が158cm、北小口では下部が156cm、上部が155cmと各面ともごくわずかだが上部がやや窄まるような形状を呈している。このことから、棺身は棺側で2.5mと東西の側面が同じ大きさに揃えられているのに対し、小口は北面で156cm、南面で161cmと南小口がやや幅広に造られていることがわかっている。

次に棺身の内寸を確認しておく。南北の中軸線上における棺の内寸は長さ193cmで、東棺側の長さは191cm、西棺側の長さは188.5cmで、幅は中央部で106cm、北側小口では110cm、南側小口では110cmとあまり差は認められない。また、棺内の深さは北側小口で66cm、南側小口で67cmと南北で棺底のレベルはほぼ一定であるのに対し、東西では東棺側の中央で66.5cm、西棺側中央では64cmと西が若干高い様子がうかがえる。また、棺の厚みは北小口で約34cm、南小口で約29cm、西棺側では約27cm、東棺側では約26cmと小口がやや厚い傾向がある。

なお、棺身の南北両小口には2つの小孔が開けられている。南小口にあたる羨道側のものは小口面の中央よりやや左に寄った部分に幅49cm、縦40cm程度の不定形の穴が認められるもので、孔の周囲には棺蓋部にまで及ぶ方形の刳り込みが施されている。刳り込みの大きさは下辺が48cm、上辺が49cm、右辺が43cm、左辺が45cmのもので、刳り込みの深さは棺身の部分で8cm前後、棺蓋の部分では12cm前後であった（図23・図版32）。

この刳り込みは、先の田村や梅原らによる報告では棺身と棺蓋に整然と対応して刳り込みが施されていることから、現状の孔は後世に拡大されたにしても本来この部分には小孔があり、これを塞ぐ蓋石を嵌め込むための細工が当初から存在したのではないかとされている。この孔は古くは林鷺峯（1618－1680）による『御陵所考』所収の絵図にもその表現を見ることができるが、仮にこの孔が盗掘などを目的としたものであるならば、この様な丁寧な作業を行う必要は無く、状況から判断すると田村や梅原らによる観察所見は正鵠を射たものと考ええる。

今少し詳しくこの刳り込み部分を観察してみよう。棺身の中軸からは少し西にずれたものであるものの、掘り込みの枠線が棺身部分と棺蓋部分で正しく通ることは図23や図版30をみても明らかである。また、棺身と棺蓋の表面からの刳り込みの深さはそれぞれ異なるものの、刳り込みの中の面は棺身と棺蓋部分で正しく面を揃えて掘り込まれていることは丁寧な作業が施された事を物語っている。

一方、北小口にあたる奥壁側の孔は明らかに後世の所作によるものと考えられる。孔は不定形の幅20cm、高さ10cm程度の小孔が石棺内部まで貫通させられたもので、穿孔の状況からは石棺の外側より穿たれたものであることは明らかだが、南小口側の孔や蓋石の構造が当初からのものとすれば、敢えてここに穿孔を行う必要はないものである。この穿孔は大正3年の佐藤による報告にも既に記載されているものだが、悪戯等によるものであろうか。

次に棺蓋の様子をみてみよう。残念ながら奥壁側左右の縄掛け突起が失われているが、棺蓋本体は大きな欠損もなくほぼ完存している。縄掛け突起を含まない棺蓋の大きさは、長辺にあたる東棺側では長さ250cm、西棺側では252cmを測り、短辺にあたる北小口では156cm、南小口は158.5cmと、若干西棺側と南小口が大きくなっているが、敢えて棺の大きさに差をつけたものではないと考える。

なお、棺蓋の上面平坦面は長さ159cm、幅は北端が復元で74cm、中央部で72cm、南端で72cm、高さは北端で56cm、中央部で57cm、南端では55cmと上面平坦面は若干北が幅広く、高さも強いて差をつけたようなものでは無く、製作上の誤差の範囲と理解したい。

次に縄掛け突起の様子を見ておこう。縄掛け突起は南北の小口側蓋傾斜面にそれぞれ1基ずつ、東

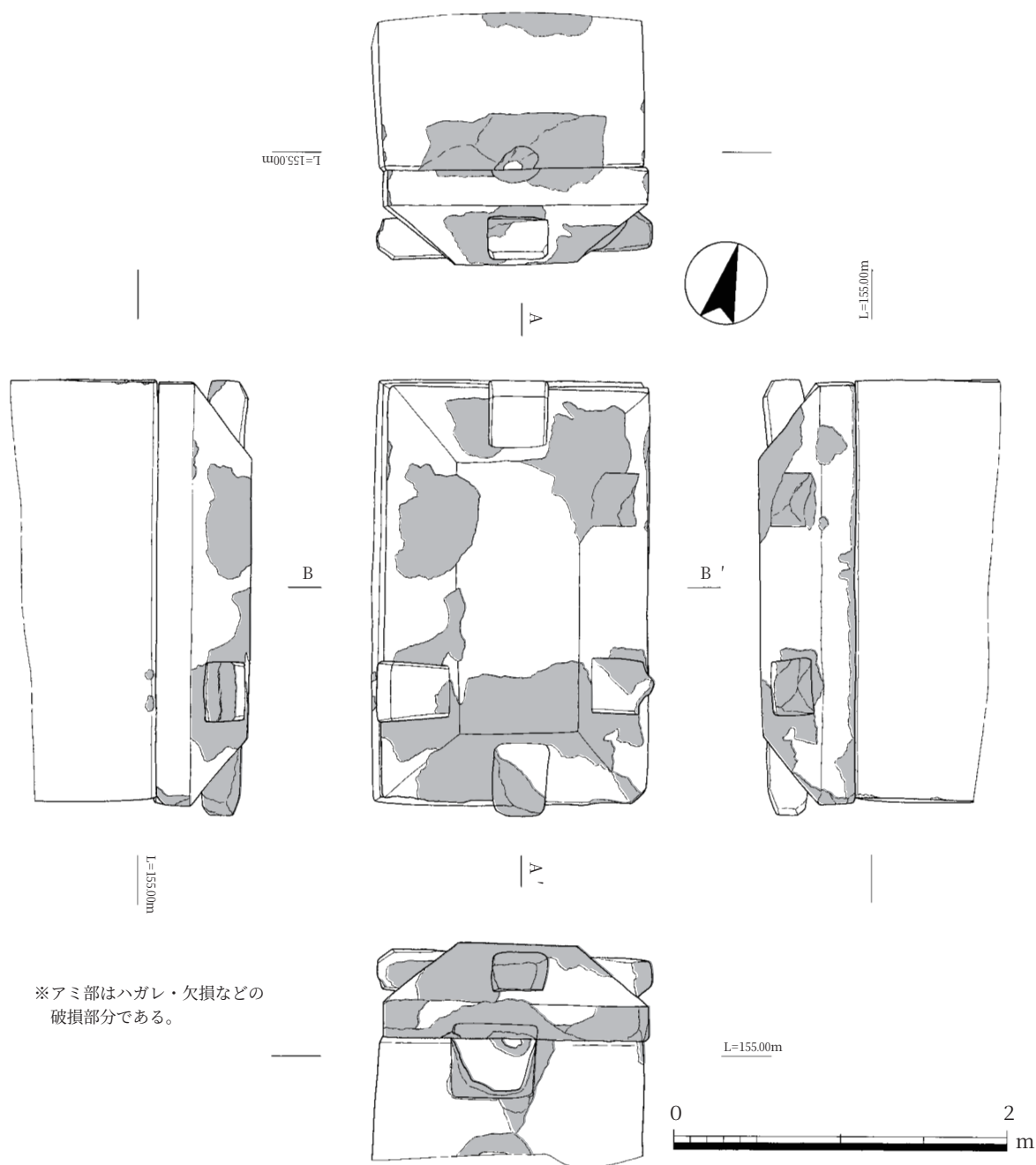


図24 1号墳石棺の破損状況 (1/40)



西の両側蓋傾斜面にそれぞれ2基ずつの計6基が存在したようであるが、残念ながら両側の奥壁側の縄掛け突起は完全に失われてしまっている。残る4基の縄掛け突起も旧状をほぼ残すのは図24・図版33～40に示したように奥壁側小口の1基と西側面南側の1基のみで、後は欠けてしまったものや表面が剥落してしまっており、一見良好に見える石棺もかなり傷みが進行しており、何らかの保存の策をとる必要を強く感じる。

さて、残された縄掛け突起はすべてが棺蓋本体よりも外側へ5～6cm程度張り出すもので、残りの良い奥壁側小口側のものは幅35cm、長さ40cmで、西側面南側のものは長さ44cm、付け根部分の幅30cm、先端部分の幅は37cmと開き気味の形状をみせる。他の縄掛け突起のうち、東側面北側のものは突起そのものが欠失しているが、基部の残存痕から幅は32cmであったことが確認でき、東側面南側のものは幅33cm、南面小口のものは幅33cmであることが確認出来たが、いずれもが先端部分は失われており、長さは確認することができない。また、残りの良い北小口や西側面南側の縄掛け突起では上面先端部の隅落としと縁辺の面取りの整形が顕著で、この2基の縄掛け突起の角度は北小口のものは水平に対して3.5°、西側面南側のものは1°上方へと延びるものであった。

棺蓋内面の様子をみてみよう。中軸線上における内面の刳り込み部の長さは182cmで、中央部の幅は91cm、天井部の東・西辺の長さは146cm、幅は北辺で59cm、中央部で64cm、南辺で64cm、刳り込みの深さは北端で17.5cm、南端で17cm、中央部西端で18cm、東端で17cmであった。また、蓋の下面にあたる棺身との接地面は北小口側で幅37cm、南小口側で34cm、棺側西側で37cm、東側で32cmといずれにおいても棺身の口部より幅が広く、内側から見ると身と蓋の稜線にはズレが生じている。

なお、石棺内部の様子を熟覧するにあたり、棺蓋と棺身の合わせ面の蓋側に赤色顔料が残存していることを確認した。棺身側はスペースの都合上、その残存の有無を観察する作業が行えなかったが、この赤色顔料の存在についてはこれまでのどの報告においても認識されていなかったもので、かなり早い段階に顔料の剥落が進んでいたものと考えられる。現時点で赤色顔料の存在が確認できるのはこの部分だけで、他の面においては肉眼では確認できない。本来は少なくとも棺内の全面に赤色顔料が塗布されていたものと考えているが、これについては将来の詳細な分析結果を待つこととしたい。

なお、今回の調査ではこの赤色顔料や、棺蓋外面の一部に残る光沢を持った黒色の付着物について、石棺蓋より剥落した石材の細片を一時的に持ち帰り<sup>2)</sup>、成分分析を奥山誠義氏に実施して頂いた。その結果、黒色の付着物については実態を明らかにする事はできなかったが、赤色顔料は第5章 分析編の報告のとおり、ベンガラであることが判明している。

さて、最後になったが、石棺の表面の状況と製作時の調整痕を観察しておくこととしたい。石棺の状況は先に述べたように棺蓋の多くに表層の剥離や破損がある一方、棺内や棺身などは概ね良好な状態を保っているようにもみえるが、実はそうでは無さそうである。それは棺身の表面と棺蓋や縄掛け突起付近のオリジナルの表面部分を比較すれば明確で、棺蓋本来の表面はきめの細かい粒子からなる石材の面が残り、その表面に大きいもので長さ5cm、幅4～4.5cm前後の斜め方向の金属製工具による調整痕が明瞭に認められるのに対し（図版40、41）、表層が剥離した部分では調整痕が確認できないば

かりか、きめの細かな粒子が失われ、粗い石粒が露出してざらついた状態となっている。棺身の表面は全面にわたって表層が剥離した部分と同じ様相を呈するうえ、調整痕も全く確認できない状態にあり、破損を受けていない部分についても表層が完全に剥離、或いは流失してしまっている可能性が考えられる。

棺外面に残る調整痕は棺蓋東西の傾斜面を中心に残存しているほか、図版41に示したように南小口側の縄掛け突起の下にも調整痕が明瞭に認められた。この部分の工具痕跡は長さ1.7cm、幅1cm程度と棺蓋の他の部分に残る調整痕よりも幅も狭く、ストロークも極めて短いもので、恐らくは縄掛け突起の下という作業スペースの狭さに対応して工具が交換され、作業が行われたものと考えられる。

棺内を見てみよう。先に記したように棺身と棺蓋の合わせ部で確認された赤色顔料が確認できないことから、一定の表層の劣化が進んでいると推察されるが、棺身および棺蓋天井の平坦面にかかる傾斜面までは平滑に仕上げが行われており、調整痕等は確認できない。

一方、天井部の平坦面には仕上げの作業が行われた痕跡が無く、幅4cm、長さ5cm前後の非常に粗い工具痕が全面にわたって顕著に残されている（図版44）。棺内の他の部分が平滑に仕上げられているのに対し（図版42、43）、天井部平坦面のみが凹凸の激しい工具痕が残されたままで仕上げの研磨が行われていない様子は極めて不自然な状況である。今はこの工具痕が石室開口後につけられたものである可能性も否定できないが、狭い棺内に潜り込んでわざわざこのような痕跡を付ける必要が無いことや、棺身や天井の斜面部には同様の工具痕が全く無く、天井平坦面のみが存在することなどを勘案すると、当初からのものとするのが妥当とみるが、その理由については説明することができない。

## 2 天王山2号墳【図16、17・図版45～47】

### （1）墳丘の構造

この古墳は1号墳に隣接する古墳として早くから観察・測定の対象とされてきた経緯があり、昭和7年の田村による調査の際に1号墳とともに略測図が作成されている。この図では2号墳はやや長楕円気味の円墳のような形状に描かれ（図9）ており、墳丘に関する記載は無いものの、天王山古墳群に対する調査が大和における方墳の実態調査の一環として行われたものであった点を考慮すると、2号墳が円墳として認識されていたことは間違い無さそうである。これに対し昭和12年の梅原らによる調査では南辺約19mのやや角張った封土を持つと報告されており、測量図（図10）からは方墳と認識されていたことがうかがえるが、今回実施した測量調査では復元で径20～25mの円墳となる可能性が高いことが確認できた（図16、17）。

さて、2号墳の墳丘は南側が後世の削平を大きく受け、羨道部の天井石が露出することとなっているほか、東側は1号墳の墳丘と重複するような位置関係にあり、見た目には2号墳の築造が先行し、後に1号墳の築造によって墳丘の東側が削平されたかのように見えるものである。

この両古墳の築造の前後関係は1号墳築造時の環境や事情を探る上で重要で、恐らくは先行した2号墳を一部破壊して1号墳が築かれたものと考えているが、現状では測量図以外に資料が無く、詳細な検討は将来に委ねることとしたい。

墳丘の状況を今少し見ておこう。見かけの墳丘裾は地形的に低い墳丘西側では若干外へ張り出しており、現状で推定される墳丘裾は標高152mの等高線がめぐるあたりに位置するものと考えている。この地点から墳頂部までの距離を勘案して復原すると東西軸では径約25m弱と、南北軸の復原規模の約20mよりもやや大きく、墳丘の高さは墳丘西側で推定される墳丘裾からは約5.3m、北側からは約3.75mとなる。なお、削平を受けた断面部分や墳丘上での観察では段築の痕跡や埴輪、葺石の存在を認めることはできない。

## (2) 石室の構造

2号墳の石室は羨道部にたまった土砂の影響により、現在は羨道部天井石が一部確認できるのみで玄室への進入はおろか内部の様子をうかがうことはできない。この石室に関する情報は梅原らによる昭和13年の報告書に掲載された石室の略測図(図14)と昭和33年(1958)の小島俊次による石室の観察記録<sup>3)</sup>があるのみである。これらの記録によると早くから石室には土砂の流入が進んでいるが、辛うじて進入が可能であったようで、小島の記録には石室各部の詳細な数値が報告されている。ここではより詳細な記録である小島による計測値を紹介して2号墳の概要を確認しておくこととする。

小島によって報告された石室の現状は、玄室の長さ約4.4m、幅約1.8m、高さ約1.5m、羨道の長さ約4.9m、幅約1.7m、高さ約40cmで、西側にのみ約30cmの袖が付く右片袖式の石室とのことである。

また、梅原らによって作成された略測図からは玄室部のおおまかな石材の架構状況を知る事ができる。これによると流入土上面の高さではあるが、左右の側壁では大きいもので110cm、小さいもので30cm程度の石材を用いて側壁が積まれている様子や、奥壁は3石以上、前壁は2石、天井石は3石で構成されていること、羨道部は天井石が4石分残存していることが確認できる。

なお、梅原らによる報告では開口部正面の天井石に加工があることが指摘されているが、現状ではどれを指すものか確認し得ない。

最後に1号墳の石室と2号墳の石室のレベルの関係をみておくこととしよう。2号墳の石室床面の正確な高さを導き出すのは困難であるが、羨道部天井石が露出しているため粗方の高さを推定することはできる。かつて石室の略測を行なった梅原らの図(図14)では羨道部床面は天井石から約1.45mの高さに復元のラインが引かれている。この復元ラインは石室の規模からしても概ね納得できるもので、今回作成した測量図に照らすと羨道部床面は151.8m前後の高さにあたるが、墳丘西側における見かけの墳丘裾の高さから勘案しても概ね整合性のあるものと言える。これに対して1号墳の玄室床面は現状で154.28mであることから、2号墳の石室が約2.5mも低い状況がうかがえる。この両者の高低差は尾根の中央部と端部に築かれた立地の差ともとれるが、墳丘が重複するような位置関係も含めて考えると、先行して築かれていた2号墳の墳丘東側を削った後に、これに被せるかのように1号墳が築かれた可能性が想像される。

## 3. 天王山3号墳【図25, 26・図版48～57】

### (1) 墳丘の構造

1号墳の北約20mの地点に位置する円墳で、天王山古墳群の中では唯一調査が行われている古墳で



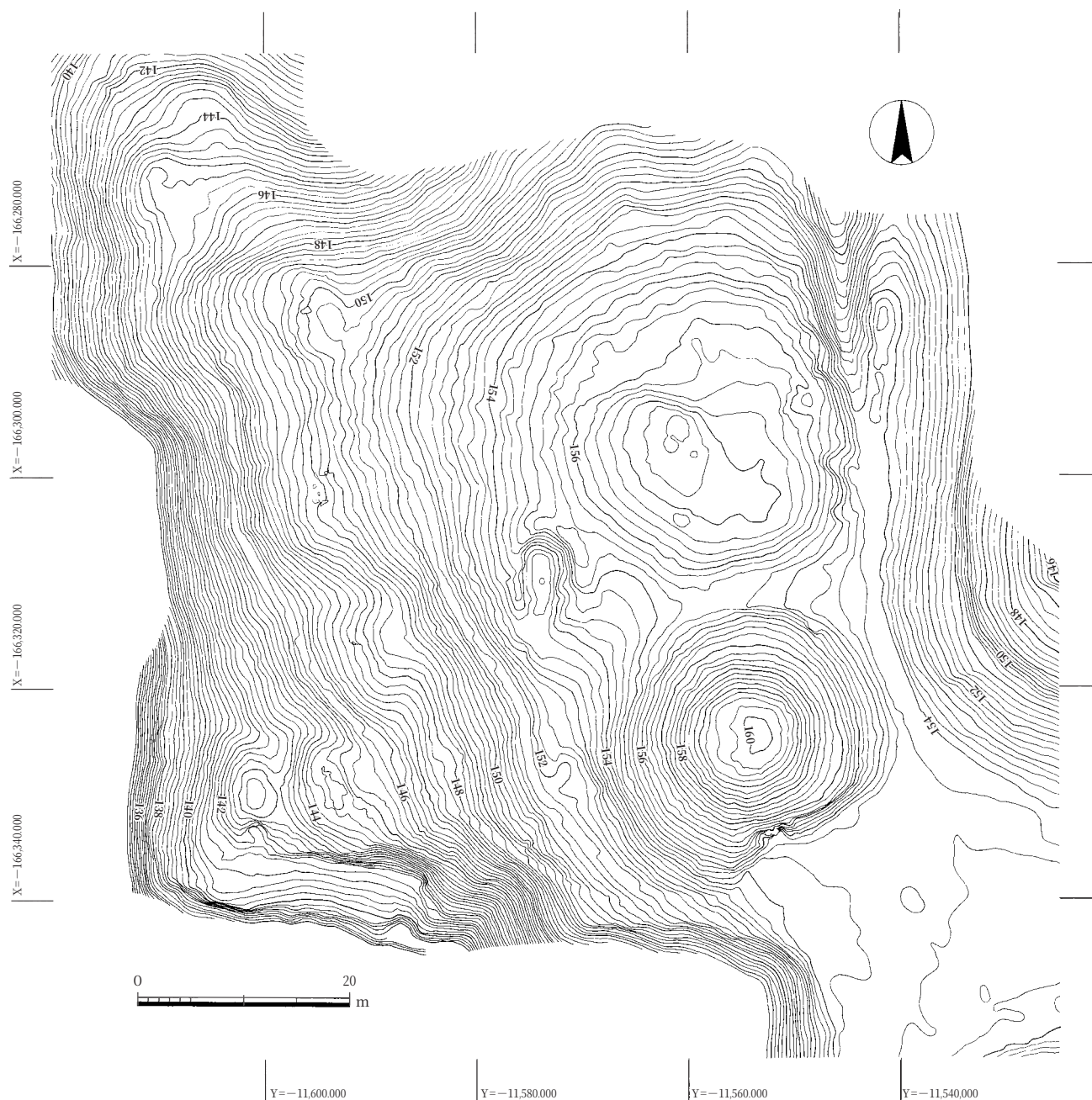


図25 天王山古墳群西尾根部の地形測量図1 (1/600)

ある。調査は昭和58年（1983）4月に県立橿原考古学研究所によって石室内の調査<sup>4)</sup>が行われ、須恵器などの遺物が出土しているようだが、調査の記録は全く公表されておらず、その内容は不明である。

墳丘は石室開口部側の南側が後世の削平を受けている他は非常に残りが良く、綺麗な墳丘を残している。現状での見かけの墳丘規模は直径約30mの円墳で、正確には東西が約30m、南北が約28mとやや東西に大きいようだが、これは墳丘の西側の地形がそのまま谷部へと下る地形を持つことにより、墳丘がやや西に張り出しているためである（図25、26）。

なお、墳丘の北西及び北東の尾根の斜面部分には幅5m前後の掘割状の窪みが認められるが、尾根の鞍部にあたる5号墳との間にまでめぐものか否かは判然としない。3号墳と5号墳の間は隣接す





図26 天王山古墳群西尾根部の地形測量図2 (1/600)

る両者の墳丘の存在によって一見掘割が存在するかのように見えるものの、墳丘裾間の標高は155.40mと後述する玄室床面のレベルである153.1mより2.3mも高いもので、墳丘の西側における墳丘裾や石室との関係を勘案すると、掘割は尾根の鞍部よりも低い北西から西側斜面部分にのみ掘削されている可能性も考えられる。

また、墳丘高は墳丘北側の墳丘裾より約4.6m、最も計測値が高くなる墳丘西側からは約7.5mと高さがある。現状での墳丘裾は墳丘北側で標高155.5m、東側で154.25mあたりに位置するようだが、西側は小道までの間に墳丘傾斜の変化が認められず、一応152.5mあたりに想定しておくこととする。

これに対し、墳丘の南側は裾の状況が判然としない。玄室床面のレベルが153.1m前後であることは

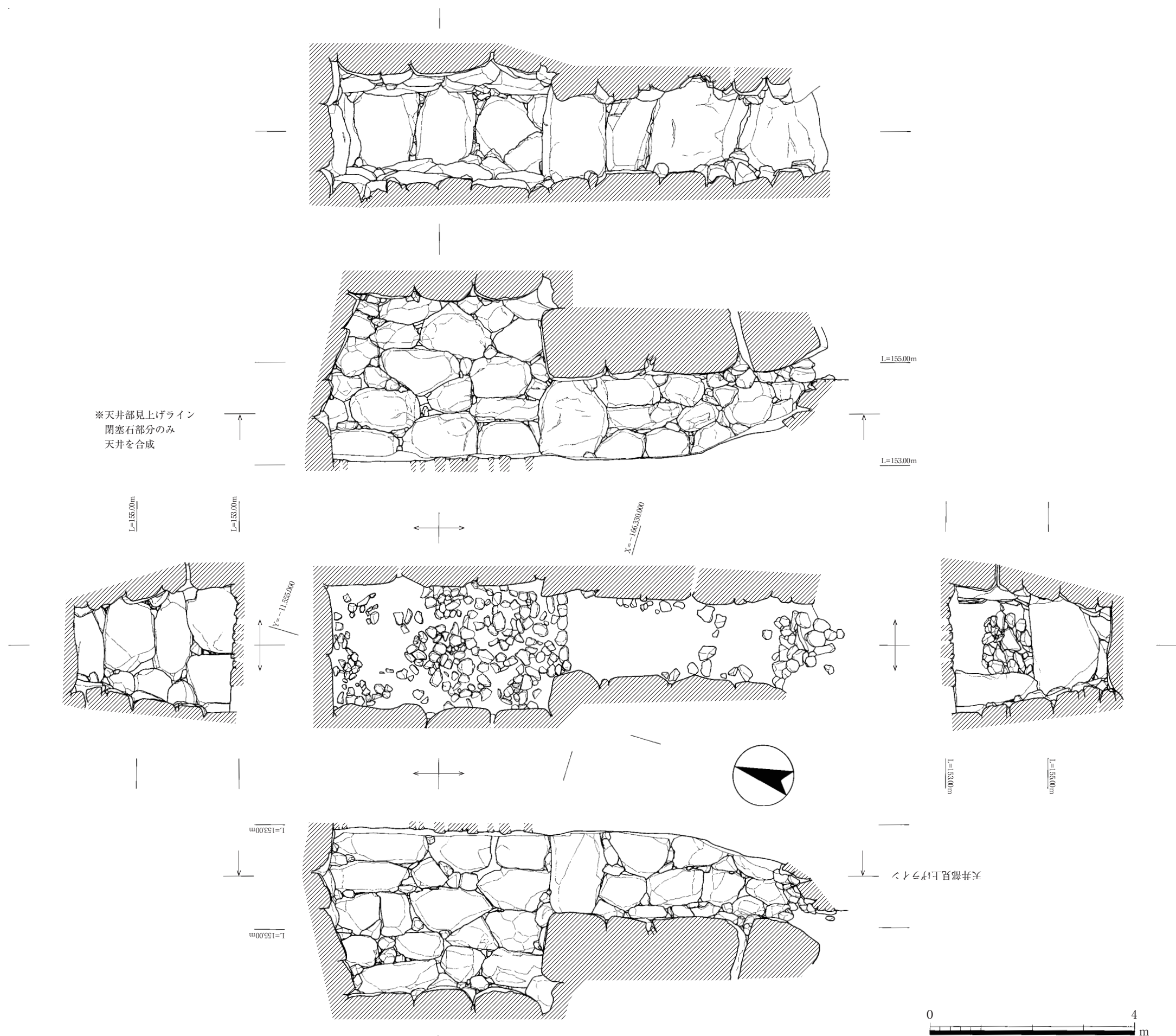


図27 3号墳石室実測図 (1/80)

南側の墳丘裾のレベルがこれに近いが、さらに低いものとなる可能性を示唆するものとするが、墳丘の南側から1号墳の北側にかけての一带には玄室床面よりも1m以上高い標高154.25～154.50m前後の不自然な平坦面が広がっており、3号墳墳丘の南側一帯を埋めるような形で広い範囲を平坦化させるための造成作業が後世に行われたようである。この平坦面の造成がいつ頃行われたものであるのかは、発掘調査を経ていない現状で知る術は無いが、先に検討したように1号墳の玄室床面や墳丘裾が標高154.00mとこの平坦面の高さに近い数値を持つことを勘案すると、この大規模な造成面は1号墳の築造に先立って行われた整地作業の結果である可能性が高い<sup>5)</sup>と考えている。

このことは3号墳の状況だけでは無く、先述した2号墳の不自然な立地や、2・3号墳の石室床面が1号墳や整地面より低いレベルに位置することからも想定できるもので、1号墳が先行する古墳群の中にスペースを無理に確保して築造されたことを示すものとする。それは明日香村所在の石舞台古墳などの事例<sup>6)</sup>とも共通するもので、先行する小規模な墳丘を持った古墳群と、巨大な墳丘と石室を持った1号墳の被葬者の関係を考える上でも興味深い事例となろう。

なお、削平を受けた断面や墳丘上での詳細な観察では本墳も2号墳と同様に段築や埴輪、葺石などの存在を認めることはできなかった。

## (2) 石室

### 石室の構造

3号墳の石室は南東方向に開口する両袖式の横穴式石室で、主軸をGN-17°-Wに持つ。先述したように石室内は昭和58年に調査が行われており、玄室部では土砂の堆積はあまり認めることができない。石室は両袖式で、規模は現状で全長9.4m以上、玄室部の長さは約4.2m、玄室部幅は奥壁部で2.3m、中央部で2.4m、前壁部では2.5mである。玄室床面には後述するように築造当初からのものか否かは不明だが、敷石が面的に露出した状態で残されており、この敷石上面から天井までの高さは玄室中央部で3.1m、床面のレベルは標高153.1m前後である（図27）。

羨道部は長さ5.2m以上、開口部の幅は1.7m、中央部では1.5m、玄門部では1.5mとやや開口部が広く、右側壁入口部の石材がやや外へと開き気味に配されているように見えるが、この部分から先の側壁の状況が不明であり、羨道が本来羨門部に向かって開きを持つものか否かは判然としない。

また、玄門部床面はほぼ露出しており玄門部分の羨道の高さは1.5mと当初の状態を知ることができる。そして、羨道中央部では1.7m、開口部では60cmと流入した土砂や閉塞石の存在により開口部の高さは著しく低くなっている。昭和12年の梅原らによる石室略測図（図14）と比較すると石室内の流入土はほぼ無くなっており、昭和58年の調査に際して閉塞石から内側の土壌が除去されたものと考えられる。

### 奥壁

基底部での幅は2.3m、石室軸線上における基底からの高さは3.3mである。奥壁は基本的に4段積で、基底石には同じような大きさの石材を2石配しているが、ここから上部は東側に2段にわたり大きめの石材を据え、西側にやや小さな石材を3段分据えて高さを揃えた後に、最上段に大きめの石材を1石横方向に架構して奥壁を造りだしている。持ち送りの状況は基底石の面が約6°とやや外傾した面







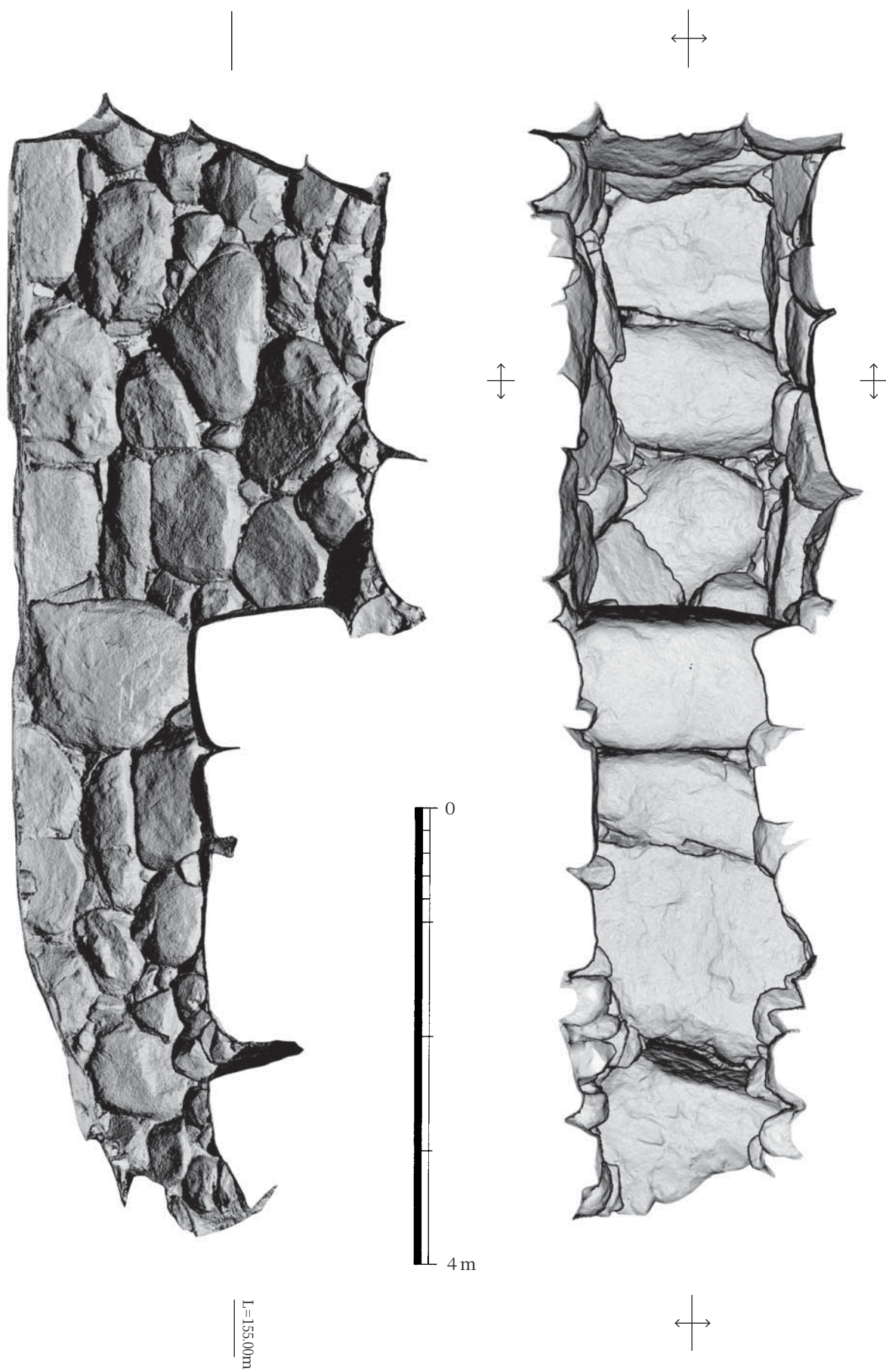


図28 3号墳石室三次元計測図1 (1/50)

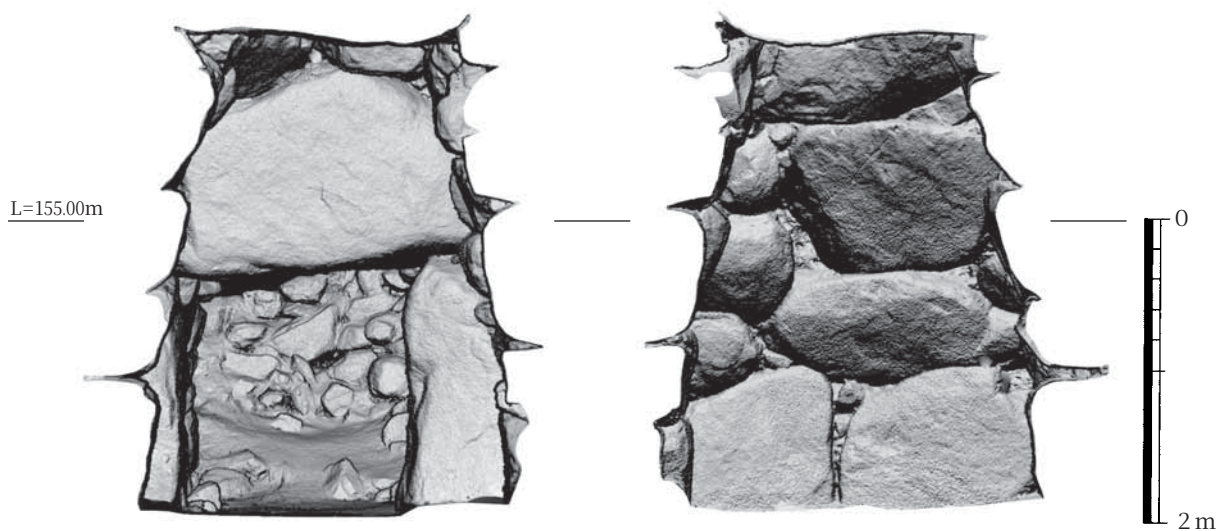


図29 3号墳石室三次元計測図2 (1/50)

を玄室に向けて据えられているが、基底部分から持ち送りを意識して据えられたものでは無さそうである。持ち送りが顕著になるのは2石目から上部で、概ね $16^{\circ}$ の勾配で内傾させながら石材の積み上げが行われている。

#### 側 壁

側壁は袖を境として玄室部と羨道部に分けられる。両側壁とも玄室部では概ね4段の積み上げを基本として構築されていると思われるが、厳密なものではなく、5段積となるところも多い。

玄門部から通る石材積み上げの目地は左右の壁で違いがあり、右側壁では羨道部側壁上面の高さが、玄室部では2段目の石材上面へと目地が通るのに対し、左側壁では羨道部側壁上面の高さがやや上方へと向かいながら玄室部の3石目の石材上面へと目地が通っている。

また、玄室部における側壁の持ち送りは地点によるものの基底石の内傾する面を利用しつつ、基底石あるいは2石目付近より持ち送りがはじまっており、右側壁が $10.5^{\circ}$ 、左側壁が $10^{\circ}$ と左右の側壁がほぼ同じ勾配で構築されている。袖は左右ともに玄門部に大きな石材を1石立て、この石材によって袖をつくりだしているが、右袖が65cmと深さがあるのに対し、左袖は25cmと非常に浅く偏りがある。

さて、羨道部側壁の石材は玄室部に比べてやや小さめの傾向はあるものの、比較的大きめの石材が架構されている。左右の側壁はともに袖石を含めて玄室側より4石目の基底石南側から斜め上方向に目地が通っており、この目地より南側では小型の石材がやや粗雑に積み上げられている様子がうかがえる。

#### 前 壁

前壁部は玄門部両袖石と羨道部天井石の計3個の大型の石材と、そしてこの上に乗る2つの小型石材の都合5石で構成されており、前壁部の基底幅は2.5m、高さは3.2m、玄門部の幅は1.5m、高さは1.5mである。羨道部天井石の玄室面は石材の傾斜面を利用し、その上部の石材と合わせて約 $8.5^{\circ}$ と角度はそれほど強くないものの、他の壁とともに弱い角度の持ち送りを作り出している。

## 天 井

天井部は持ち送りによって狭められた3.5m×1.4m前後のスペースを3石の天井石によって塞いでいる。図27、28には石室下位から見上げた状態の図を示しているが、天井にはほぼ同じ大きさの大型の石材が組み合わされている様子がうかがえるとともに、前壁部分の図29でははっきりと見えていないが図28の天井見上げ図では、前壁最上段に積まれた2つの小型の石材が側壁から前壁へと渡るように据えられている様子がよくわかる。このような石の据え付けは奥壁部分には認められないもので、前壁部分でのみ確認できる造作である。

羨道部の天井は4石分が残存している。このうち玄門部から羨門側への3石は、天井となる面がほぼ水平な高さに揃えて架構されているのに対し、羨門側の1石は天井面にやや丸みを持っている。

## 床面の状況

3号墳の床面は先述したように、昭和58年に調査が行われた際に石室内部の土砂が取り除かれたように、玄室床面には敷石と見られる石材が露出した状態を見る事ができる（図27、28）。これらは拳大～20・30cm前後の大きさの石材が面を揃えて敷き詰められたものだが、既に調査の手が入っているためこれらの敷石が築造当初からのものなのか、もともと敷かれていた石材を発掘調査後に復元したものかは調査当時の記録が公表されていないため判然としない。

ここではこれらの石材を一応当初のものとしてその状況をみておくこととする。敷石は奥壁から羨道側へ向かって4.6mの地点まで敷かれており、玄室の全域のみならず羨道の一部にまで及んでいる。敷石の先端は玄門部から羨道側に40cm入ったところに仕切りとして6石の石材を羨道に直交するように配置しており、玄室の南半部分の敷石は非常に残りが良い。一方、奥壁側は後世に床面が荒らされたためか石材の欠落が目立ち、残された石材も原位置を保つか否か判然としないものが多い。

なお、羨道部分には調査後に流入したとみられる土砂が少量堆積しているが、奥壁から約8.6mの地点、現在の石室入口部分には閉塞石の露出が顕著に認められる。この閉塞石は20～40cm大の石材で構成されており、石室側は調査時に精査がおこなわれ、一度は基部まで露出されたものと見られる。上部の閉塞石は後世の人の進入によって取り去られているが、残された閉塞石の高さは推定で約1.6m、玄門部の天井よりも高いもので、一部は流入土の下に残されていることが推察できる。

## 墳丘との関係

石室と墳丘の位置関係を見ておこう。図30には3号墳の墳丘図に石室の位置を落とした図を示した。平面的には石室は墳丘の中心よりやや西に石室が位置するように見えるが、先述したように墳丘の西側は谷部へと落ち込む地形との関係から墳丘がやや西へ張り出しているため、想定される墳丘裾との位置関係から見れば石室はほぼ中央に位置している。

なお、羨道部分は閉塞石までは確認できるもののこれより以南は埋没しており、どこまで延びるのかは不明である。

次に、図31は石室の中軸線上において等高線をもとに墳丘断面図を作成し、これに石室の位置を合成したもので、上段は石室の主軸中央部における南北断面、下段は東西の断面を示したものである。



この図では墳丘の南北方向においては石室の位置がやや南に偏るように見えるが、墳丘の南面は後世の削平を大きく受けていることから、本来の墳丘裾は図の見かけの裾よりもさらに南に位置することと、石室前面が先述した整地により埋め立てられ、平坦面が造成されている様子がよくわかる。

墳丘の東西方向は墳丘の残りが良く、目立った損壊は認められない。墳丘の東側は谷地形との間に若干の平坦面が残り、墳丘裾を比較的明確に捉えることができる一方、墳丘西側は墳丘の流出のため勾配がややなだらかなり、裾を捉えるのが困難な状況となっている。

図31で墳丘の西側に残る裾状の平坦面は後世にできた小道で、この小道が墳丘裾の位置を反映している可能性も考えられるが、石室のレベルや墳丘測量図の検討からは小道の部分までを墳丘に含めるのは難しいと考え、標高152.5mの等高線あたりに裾を想定している。

なお、石室はこの復元による東西の墳丘裾から約15mの地点が玄室のほぼ中心にあたっており、東

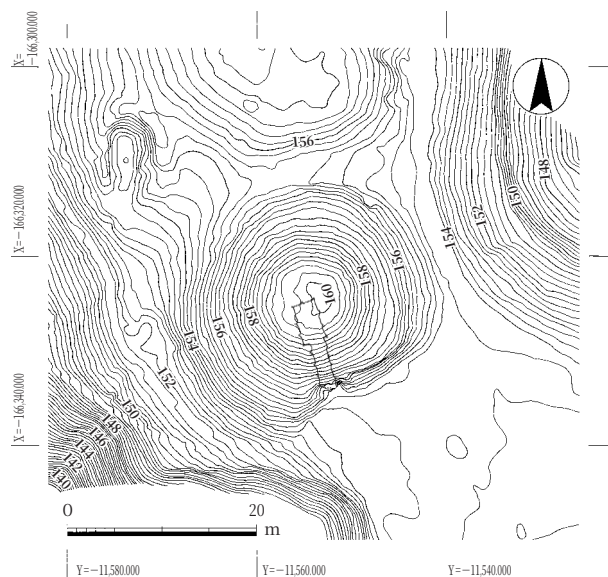


図30 3号墳の石室の位置 (1/800)

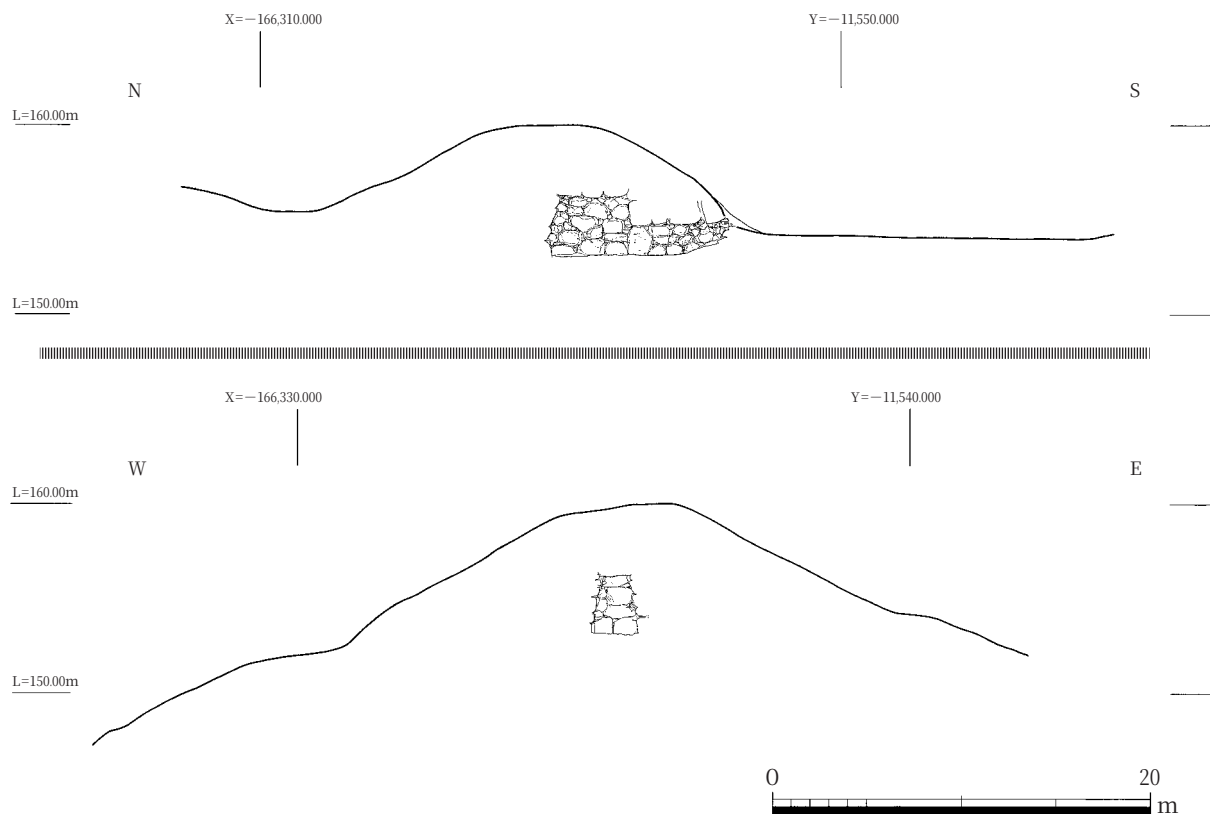


図31 3号墳墳丘断面図 (1/400) ※石室中軸線からの見通しである。



西墳丘裾間においては墳丘の中心に石室が位置していることがうかがえる。

#### 4. 天王山4号墳【図25, 26, 32・図版58～60】

##### (1) 墳丘

3号墳の北西に位置する古墳である。墳丘の状態は良好では無いが、北東には後述する5号墳との間に両墳丘の存在による幅の狭い掘割状の窪みが残ることや、墳丘の南東側に残る墳丘状の高まりの様子から径10m程度の円墳になると推定しており、墳丘の位置関係からは3・5号墳より後出するものと考えている。

さて、4－5号墳間の掘割状の窪み底面の高さは標高155.40m前後で、この部分に限ってのみ本来の墳丘の雰囲気をつかう事ができるが、他の部分は後世の著しい改変により、旧状を大きく損ねている。特に墳丘中央に残る石室材の抜き取り穴の存在は、先の梅原らの報告にも見られるように早くから知られたもので、南へ向かって開口する逆U字形の攪乱穴は南北約8.5m、東西約5.5mと非常に大きく、その形状からは、南の3号墳北西斜面部分に位置する掘割方向に向かって開口する小規模な横穴式石室が存在したものと考えられる。

この石材の抜き取りはかなり徹底して行われたようで、攪乱穴内には石材や石室の様子を知る手掛かりは無く、現在は落ち葉や腐葉土が厚く堆積している。現状での攪乱穴内の高さは標高153.28m、竹林の進出を受けて見通しが悪くなっており、墳丘や抜き取り穴の観察が困難になりつつある。

#### 5. 天王山5号墳【図25, 26・図版61～64】

##### (1) 墳丘

3号墳の北に隣接する円墳で、径約30mの墳丘を持つ。墳丘南西側は墳丘が比較的良好に残されているのに対し、墳丘東側は里道の切通しにより南北方向に墳丘の一部が削り取られ、北半は墳頂部から高さ1.5m分ほどの墳丘が削平により失われてしまっている。墳丘裾は墳丘の西及び南側では標高155.5mの等高線あたりに位置することは明確だが、墳丘北側では裾の存在は判然としない。ここでは比較的良好に残る墳丘南側の等高線をもとに墳丘裾の位置を推定し、標高155mの等高線あたりに墳丘の北裾が位置するものと仮定した。

さて、墳頂部の最も高い地点の高さは標高157.52mで、ほぼ当初の墳丘高を残すと考えるが、南側墳丘裾や西裾からは約2m、北裾からは約2.5mとあまり高さのある墳丘ではない。この墳丘の状況からは埋葬施設は横穴式石室ではなく、木棺直葬などのような構造のものではないかと考えている。

この事は墳丘高の問題だけではなく、削平を受けた墳丘部分に横穴式石室などに由来するような石材や、石室の存在した痕跡が全く認められないことから推定し得るものである。なお、削平を受けた断面部分や墳丘の観察からは段築や埴輪、葺石などの存在も、これを認めることはできなかった。

#### 6. 天王山6号墳【図32・図版65～69】

##### (1) 墳丘

3号墳の西約20m、標高143～145mの西斜面に推定した古墳だが、これまでその存在は確認されていなかった古墳であり、奈良県遺跡地図には記載のないものである。

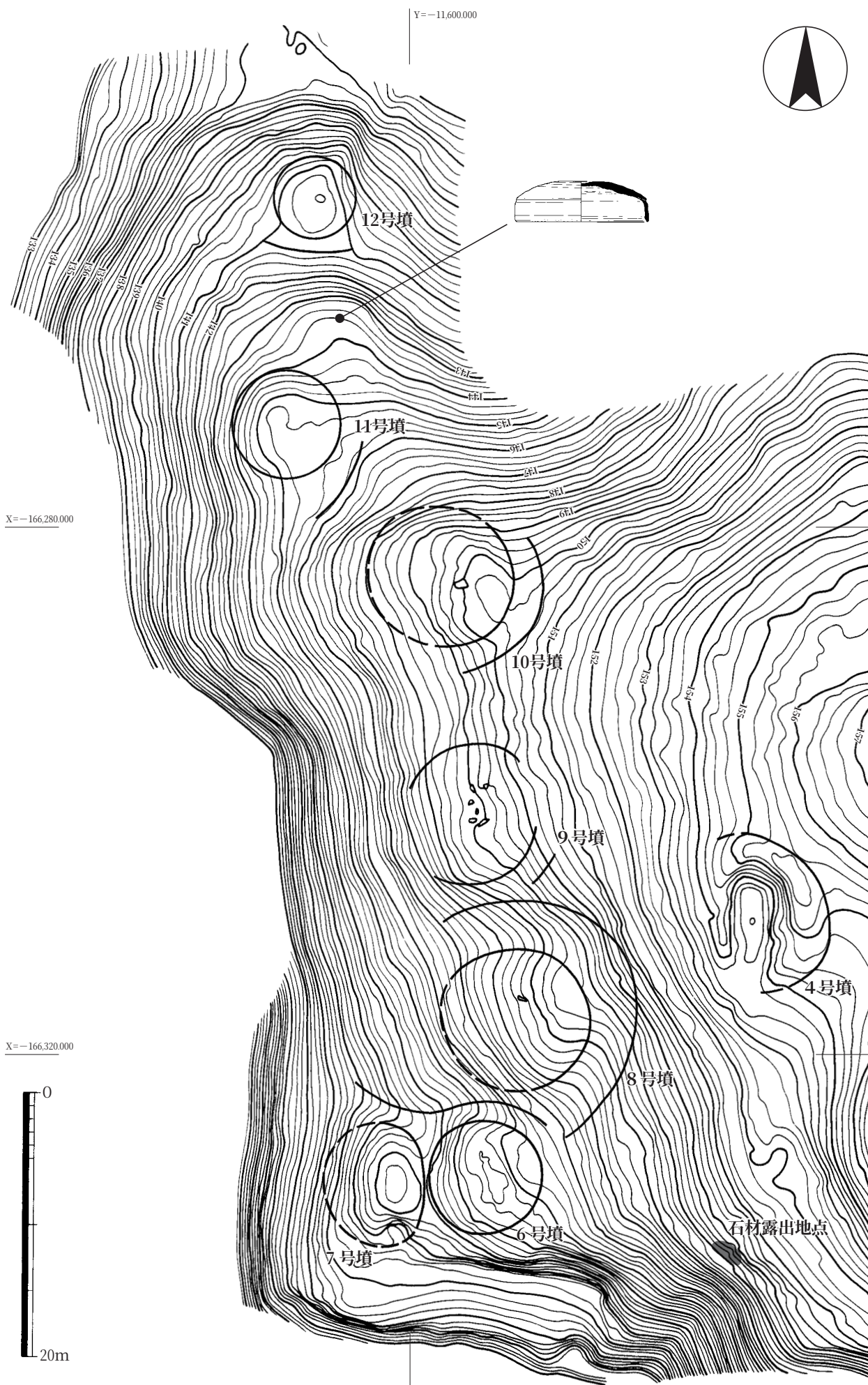


图32 4~12号墳墳丘復元案 (1/400)

この古墳の墳丘最高点は標高144.65mを測り、墳頂部には南北方向に深さ20～30cm程度の不整形に長い窪みが存在し、この中には40cm大の石材が1点露出している。この石材は丘陵上の露頭で見受けられるものとは異なり、角にやや丸みを持った河原石と判断されるものであるが、墳頂ではこの1石のみしか石材が確認出来ず、埋葬施設等に関連するものか否かは判然としない。

墳丘を見てゆくこととしよう。6号墳の墳丘の残存状況はあまり良いものではないが、墳丘の北側から西にかけての墳丘と、墳丘南東の一部に認められる弧を描く墳丘ラインの状況からは図32に示すような径9m程度の円墳であったことが窺える。

このことは墳丘の周囲に掘削された掘割の形状からも肯定し得るもので、墳丘の東・南側ではその存在は確認できないものの、北および北東の一部には現状で幅1.5m前後の浅い窪みが弧を描いて廻る様子が明確に認められる。特徴的なのは墳丘の西側が後述する7号墳に接する形で墳丘が築造されていることで、現状の墳丘裾は標高143mの等高線にほぼ一致する。

なお、この部分における墳丘裾と墳頂の比高差は約2.6m、そして6－7号墳間の窪み底面の幅は約1mと非常に狭いものであった。現状では葺石・埴輪は認められない。

## 7. 天王山7号墳【図32・図版68～72】

### (1) 墳丘

6号墳の西に接して存在する古墳で、標高140～143mの西斜面に位置する。周辺に点在する小規模な古墳の中では唯一横穴式石室の存在が確認できる古墳で、本墳もこれまでその存在は報告されていなかったものである。

7号墳の墳丘の最高点は標高143.35mを測り、墳頂部と先の6－7号墳間の窪み底面との比高差は僅かに1.27mと東側から見た墳丘は小さなものだが、西側の墳丘裾は標高140.25mの等高線あたりにくるものと想定しており、3m前後の墳丘高を有すると考えている。

この墳丘西側は比較的急峻な斜面に位置するため墳丘の流出が著しいようで、石室は現存する見かけの墳丘の中軸よりもやや西側に位置している。残存する墳丘は墳丘東側から北東部分にかけての等高線がほぼ当初の墳丘形状を示していると見られ、復元では南北10m弱、東西8m程度と正円ではなく、地形に制約された楕円形の円墳になると考えているが、先に想定した墳丘西側の裾の位置やその状況は確認できない。なお、現状では葺石・埴輪などの存在は認められない。

### (2) 石室の状況

埋葬施設は南に向かって開口する横穴式石室である。開口部は墳丘南側の標高141.75mあたりに位置するが、埋没した羨道と玄室天井石の間がわずかに開いている状態で、その高さは約30cmと低く内部への進入は困難である。外からの目視による観察では、やや小ぶりの石材で構築された両袖式の石室であることがわかるが、玄室内はかなりのレベルまで埋没が進んでおり、高さ1m程度の空間しか認められない。箱尺を差し込んで行った計測では開口部からの石室の奥行は約4m、玄室長は約2.8m、羨道は約1.2m分の存在が確認できた。

なお、この開口部は現存する墳丘や玄門との位置関係を勘案すると羨道の途中で開口しているとみ



られ、本来の羨道部の長さは現状よりも長いものと考えられる。

## 8. 天王山8号墳【図32・図版73～76】

### (1) 墳丘

6号墳の北に隣接する古墳で、今回の調査で新たに推定したものである。西斜面に位置し、墳丘の最高点は標高148.60mで、6・7号墳のように明確な墳丘の高まりは存在しないが、墳丘の北から東、そして南へと周囲を巡る幅約3.5～4mの幅の広い掘割状の窪みによって墳丘の存在が推定できる。掘割の現状は墳丘の北と南には明瞭な窪みが存在する一方、墳丘の東側は上方からの土砂の流入のためか埋没が進んでおり、測量図からは掘割の様子を読み取ることは困難である。しかしながら、現地の観察では掘割の名残と判断されるごく浅い窪みを認めることができ、墳丘の背面を弧状にめぐる掘割の存在を推定することができる。

なお、墳丘西側部分は後世の墳丘流出が著しく裾部の位置は明瞭ではないものの、南北の掘割と墳丘の西を通過する小道との接続部分あたりまでは墳丘が丸く廻る様子が確認できることや、小道より西（下部）の地形にも墳丘の一部とみられる丸みのあるラインがかろうじて読み取れることから、墳丘裾は標高144.50mの等高線のあたりに位置すると判断しており、掘割の状況も合わせて想定される8号墳の墳丘規模は径約11m、西裾からの高さは約4mの円墳と考えている。

さて、本墳においても葺石や埴輪などの存在は確認できないものの、墳頂部付近には石材の露出が認められる。一つは長さ80cm以上の比較的大きな石材で、この石材の東側には大きさは判然としないが、列を為すように殆ど埋没した石材が数石存在するようである。位置的にはこれらの石材が埋葬施設に係わるものである可能性を考えているが、墳丘の現状は石室が南へと開口するには掘割底との比高差があまり無く、横穴式石室が存在するスペースを認めるのは困難な状況であり、墳頂部に小石室のような埋葬施設の存在を想定している。

なお、8号墳にみられるような石材の露出は今回墳丘の存在を推定した地点以外に、3号墳から8号墳へと至る小道の東斜面などでも確認されており、カタハラ古墳群<sup>7)</sup>のように墳丘を持たない小石室や土壙墓などの埋葬施設が数多く存在する可能性も考えなければならないだろう。

## 9. 天王山9号墳【図32・図版77, 78】

### (1) 墳丘

8号墳の北に隣接する古墳で、これも今回の調査で新たに推定したものである。現状では墳丘の流出と掘割の埋没がかなり進んでいるとみられ、明確な墳丘の存在を確認するのは困難な状況だが、墳丘の存在を知る手掛かりとなったのは西へとわずかに張り出す墳丘状の高まりと、想定される墳丘の東南に一部残された幅約2mの掘割状の窪みである。ここでは墳丘の高まりと掘割状の窪みが持つ曲線を参考に墳丘の復原を行い、図32に示したような径10m前後の円墳の存在を推定した。

また、墳丘の上部では葺石・埴輪などの存在は認められなかったが、現状の墳頂部を通る標高150mの等高線のあたりの石材の散布が認められた。石材は大きいもので長さ1m程度の石材が8個露出しており、埋葬施設にかかわる石材の一部と考えているが、推定される墳丘裾が標高147mあたりに位置



し、墳頂までの高さが2 m程度しか無いことから、横穴式石室の存在を推定することは困難であり、小石室などの規模の小さな埋葬施設の石材が露出しているものと考えている。

#### 10. 天王山10号墳【図32・図版79, 80】

##### (1) 墳丘

9号墳の北約7 mの地点、標高150m前後の西への緩斜面に位置するもので、今回の調査で新たにその存在を推定したものである。この古墳は尾根の稜線上に築かれたもので、墳丘そのものの残りは良好とは言えないが、墳丘の東南側には背面をカットする幅約2 mの掘割が弧状にめぐることが明瞭に認められる。現状の掘割底面と墳頂部の比高差は僅かに15cm前後と墳丘が非常に低いが、本来の墳丘もそれほど高さのあったものとは考えられない。

なお、掘割や等高線から復原した墳丘は図32に示したように径11m程の円墳と考えており、墳丘高は現状の墳頂部が標高150.38m、墳丘裾が標高148mの等高線あたりに想定されることから約2.4m程度と見られ、先の9号墳などと同様、本来高さのある墳丘を持つものでは無いと考えている。

さて、墳丘の中央に近い標高150mの地点には一辺1 m程の石材が露出しているが、他に石材は確認できず、埋葬施設に伴うものか否かは不明である。しかしながら、現状の低い墳丘の状況などを勘案すると横穴式石室の存在を推定するには無理があることから、本墳も小石室や木棺などを直葬した埋葬施設の存在を推定する必要がある。なお、現状では葺石・埴輪などの存在は認められない。

#### 11. 天王山11号墳【図32・図版81～82】

##### (1) 墳丘

10号墳の北西約7 mの地点、標高145m前後の北へ延びる細い尾根の稜線上に新たに推定したものである。現地では低平な墳丘状の高まりが確認でき、測量図でも等高線が北西方向へと張り出しを持つ様子が確認できること、測量図には現れないが墳丘推定地の中央部にごく浅い窪みが存在すること、推定される墳丘の南東側に背面のカットのような落ちが認められることなどから、図32には径8 m程度の墳丘を持つ円墳として復元をおこなっている。周辺に埴輪・葺石などの存在をうかがわせるものはないが、調査時には墳丘の北東約6 mの地点において須恵器坏蓋が採集されている（図33・写真3・図版82）。

この坏蓋は径15.1cm、器高4.5cmのもので、色調は内外面ともに5 Y 6 / 1 灰色を呈しており、6世紀前半頃のものともみられるが、墳丘より少し離れた地点からの出土であり、11号墳に伴うとは即断できないものである。周辺の地形をよく観察すると土器の出土地点は標高143m前後の等高線が北へと丸く



写真3 11号墳北東採集の須恵器 (1/3)

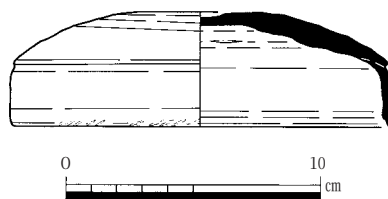


図33 出土須恵器実測図 (1/3)

張り出し、墳丘の存在を示すかのようにもみえることは、別の墳丘の存在も視野に入れておく必要があるだろう。いずれにせよ、この須恵器の存在は周辺に点在する墳墓群の時期などを反映するものである可能性があり、注目すべき遺物である。

## 12. 天王山12号墳【図32・図版83～85】

### (1) 墳丘

11号墳の北約10mの地点で新たに推定したもので、古墳は標高141m前後の北へ延びる細い尾根の稜線上に位置しており、西尾根上で確認できる古墳の中では最も北に位置する古墳である。この古墳は径6m程度の円墳と考えているが、墳丘が非常に低いうえに裾部の状況も明らかでは無く、図32では機械的に円形の復原線を図示することとしたが、墳丘の南側には幅2m前後の掘割と、緩く弧を描いた背面カットが不明瞭ながらも存在し、周辺に人為的な手が加えられていることを示唆している。

また、墳頂部は比較的広い平坦面を持つものの、その高さは現状の掘割底面よりも40cm程度高いだけで、本来高さのある墳丘を持っていたとは考え難く、埋葬施設は木棺などの直葬、あるいは小石室の存在を考えている。なお、現状では葺石・埴輪などの存在は認められない。

## 13. 天王山13号墳【図34・図版86】

### (1) 墳丘

1号墳の北東約10m、東尾根の付け根部分に新たに古墳の存在を推定したものである。現状では想定される墳丘の北西と南東部分の地形に掘割の存在をうかがわせるような括れが見られるのみで、この部分を根拠に径約14mの円墳の存在を考えたが、他に積極的に古墳と認定できる材料は無く、図34の墳丘復原では墳丘を機械的に丸く図示することとした。

天王山古墳群においては、西・東尾根ともに稜線上の地形的に恵まれた地点には必ず古墳が築かれており、13号墳を想定した地点も墳丘を築造するには恵まれた立地にあること、3号墳の項で述べたように1号墳北側の平坦面の造作にあたって、かなりの土砂の移動を伴った整地がおこなわれていると想定されることなどからは、本来存在した本墳の墳丘が1号墳の築造に際して削平を受け、平坦化された可能性なども想定できるものである。ここでは今後の検討の参考とするため敢えて墳丘の存在の可能性を示しておく。

## 14. 天王山14号墳【図34・図版88, 89】

### (1) 墳丘

13号墳の北約6mの地点に位置し、新たに古墳として推定したものである。墳丘は尾根の稜線上に築かれたもので、墳頂部には広い平坦面が存在する。墳頂部の高さは標高151mで、墳丘の北西と南東の斜面部分には、掘割の存在を想定させる標高150.50m～150.75mの等高線の括れが確認できる。

また、南側の尾根の背面部分には直線的にカットされたような高さのある斜面と、その下の平坦部に等高線には表れない掘割に由来するとみられるごく浅い窪みの存在が確認でき、人為的な手が加わっている様子がうかがえる。

これに対し、北側の墳丘裾の位置は判然としないが、標高146.25mの等高線付近に裾を意識したよ

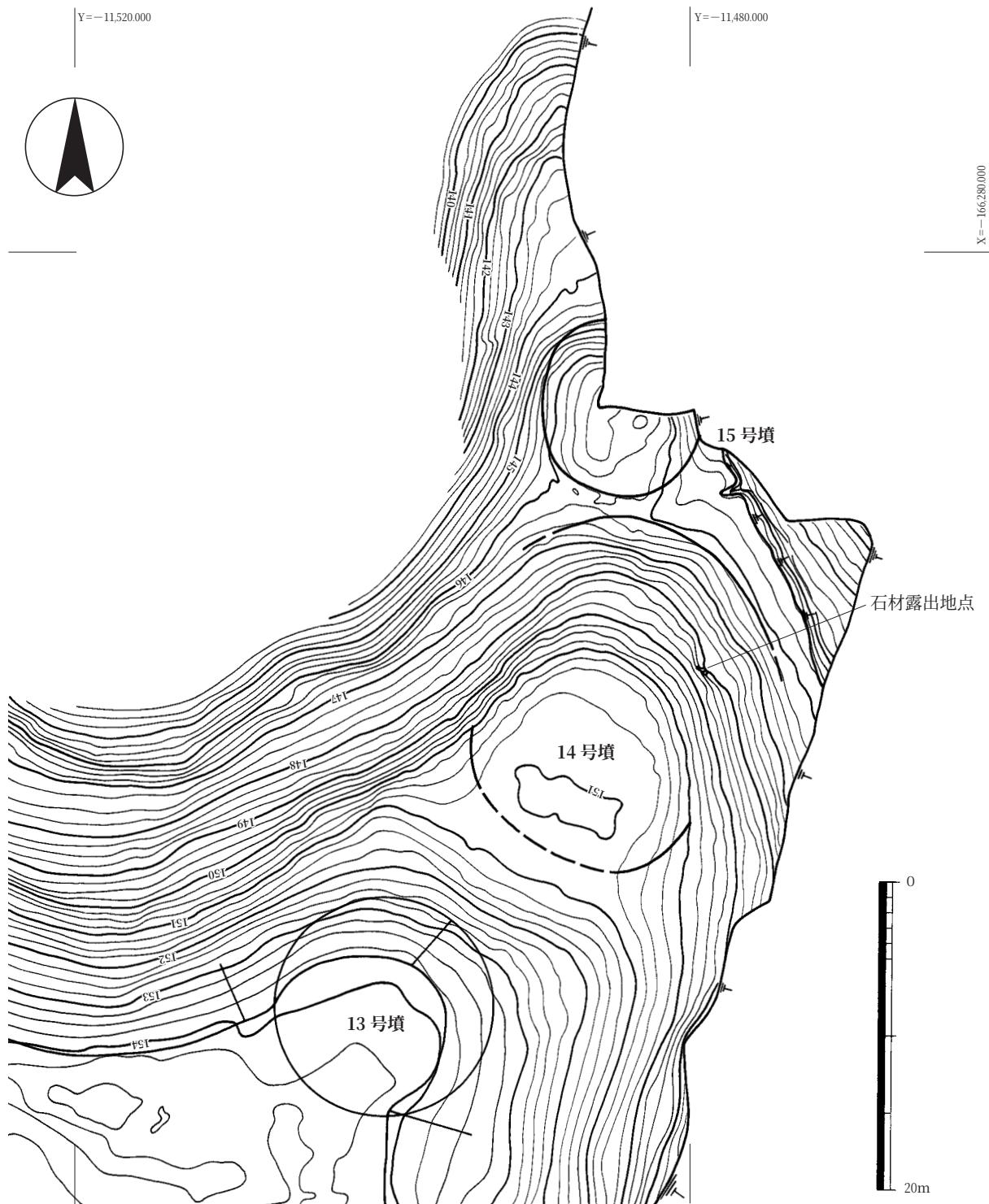


図34 13～15号墳墳丘復元案 (1/400)

うな整形の痕跡をうかがうことができることから、図34ではこの部分に裾のラインを表示した。

この地点を墳丘裾と仮定した時の南北の墳丘規模は約22m、東西は20m弱の楕円形の円墳となり、北側裾からの墳丘高は約4.7mと高さのある墳丘を持つこととなる。埋葬施設の構造を知る術はないが、墳丘の規模や高さからは横穴式石室の存在を推定することも可能であろう。

なお、墳丘の北東部分の等高線に乱れがある標高148.00mから148.50mの地点には1 m以上の大きさ

を持った比較的大きな石材が立ったような状態で埋没し、その前面には若干の平坦面が存在している。この石材については周囲の墳丘の等高線の乱れやその規模などを勘案すると、本墳の埋葬施設の構造を考える上で無視できない存在であるが、仮に横穴式石室の石室材とすれば北東方向に石室が開口することとなり、周辺古墳とは開口方向に違和感がある。後考のため記録することとし、実態の解明は今後の調査に期待することとしたい。

## 15. 天王山15号墳【図34・図版89】

### (1) 墳丘

14号墳の北に隣接するもので、奈良県遺跡地図では15A-0094として登録されている古墳である。やや細い尾根の稜線上に築かれたもので、東尾根上で確認できる古墳の中では最も北に位置する古墳であるが、墳丘の北東部分は東に位置する家屋の建築に際して削平を受けて崖となっており、墳丘の約4分の1が消失してしまっている。

さて、墳丘の南側では14号墳の裾部に接する形で幅約2mの浅い掘割の存在が確認でき、墳頂部の高さは標高146.80m、墳丘の北側では標高144.75mの等高線付近で明瞭な裾の存在が確認でき、墳丘の高さは約2mである。墳形は墳頂部付近では一見方墳かともとれる形状を示すが、墳丘北側における裾付近の墳丘ラインは丸くめぐっていることから、墳丘上部の形状は墳丘の流出による影響と考え、図34では径11mの円墳に復原を行なった。

なお、本墳の埋葬施設は低い墳丘の状況から横穴式石室の存在は考え難く、木棺などの直葬や小石室の可能性が考えられたため北東部の崖面において詳細な観察を行ったが、埋葬施設についての情報を得ることはできなかった。また、この時の観察からは墳丘の殆どが地山を削ることによって形成されていること、葺石や埴輪などの外表施設が存在しないことも確認されている。(橋本)

### 【註記】

- 1) 本書における石室の「左・右」の表現はすべて奥壁側から見た位置関係で記述している。
- 2) これらの分析に使用した石棺材の細片については剥落した物のみを一旦持ち帰り、非破壊分析を実施した後に棺内の原位置へと戻す作業をおこなっていることを、念のため付記しておく。他の古墳ではあるが、近年でも石棺の一部をサンプルと称して削り取ったり、剥落した破片を持ち帰ったりするような行為が行われた事例を聞き及んでいる。実際、1号墳の石棺の一部にも同様の行為が行われたかのような真新しい傷が目立つ部分があるが、石棺をやみくもに削るような行為は悪質な文化財の破壊行為以外の何物でもない。誠に謹んで頂きたい。
- 3) 小島俊次 1958『古墳―桜井市古墳綜覧―』桜井市文化叢書 第一冊 桜井市役所
- 4) 勝部明生・野田晃世編 1988『橿原考古学研究所 50周年記念特別展図録 石舞台から藤ノ木古墳』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 5) 1-3号墳周辺の地形観察にあたっては丹羽恵二氏から多くの御教示を得た。記して感謝致します。  
丹羽恵二編 2010『桜井の横穴式石室を訪ねて』(財)桜井市文化財協会
- 6) 河上邦彦・伊藤勇輔 1975『石舞台国営公園建設に伴う発掘調査現地説明会要旨』奈良県立橿原考古学研究所  
伊藤勇輔・河上邦彦 1976『石舞台地区国営公園予定地の発掘調査』『日本考古学協会昭和51年度総会 研究発表要旨』日本考古学協会
- 7) 橋本輝彦編 2000『カタハラ古墳群発掘調査報告書』桜井市内埋蔵文化財 1999年度発掘調査報告書2 (財)桜井市文化財協会



## 第5章 分析編

### 第1節 天王山1号墳・天王山3号墳に使用されている石材

奈良県立橿原考古学研究所 特別指導研究員 奥田尚

#### 1. はじめに

桜井市倉橋にある天王山1号墳と天王山3号墳の石室と石棺に使用されている石材を裸眼で観察し、石種を同定した。石種の特徴と採石推定地、石材の使用傾向について述べる。

#### 2 石種の特徴と採石推定地

1号墳の石室の壁石と天井石には石英閃緑岩、斑糲岩、変輝緑岩、石棺には流紋岩質凝灰角礫岩、3号墳には細粒黒雲母花崗岩、石英閃緑岩、斑糲岩、変輝緑岩が使用されている。これら石種の特徴と推定される採石地について述べる。石材の採石推定地については図35に示す岩石分布および谷川等にみられる礫形と礫種をもとに述べる。

細粒黒雲母花崗岩：色は暗灰色で、粒形が亜円である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～2mm、量が中である。長石は灰白色透明、粒径が1～2mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～2mm、量が中である。

このような岩相を示す石は栗原川右岸に分布する斑状黒雲母花崗岩にレンズ状をなして含まれる細粒黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。栗原川の川原石にみられる。

石英閃緑岩：色は灰色で、粒形が亜角・亜円である。レンズ状をなす変輝緑岩が含まれるものが多い。観察する方向によっては石材の半分以上が変輝緑岩の部分占める場合もある。変輝緑岩には桜井市高家付近の変輝緑岩のように斑状をなす長石が含まれるものがみられない。石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が3～4mm、量が僅かである。長石は灰白色、粒径が2～6mm、量が多い。黒雲母は黒色、粒径が2～3mm、量が僅かである。角閃石は黒色、柱状で、粒径が2～7mm、量が多い。

倉橋南方の寺川流域や音羽山の北斜面に広く分布する石英閃緑岩の岩相の一部に似ている。礫形では、1号墳に使用されているものは角をもち、3号墳に使用されているものは比較的に円い。また、石材のみかけの長径も1号墳のものが長い。このようなことと谷川の礫とを比較すれば、比較的に円いものは栗原川や寺川の川原にみられ、角ばったものは山地の斜面などにみられる。以上のことから、1号墳のものは当古墳南方の山麓付近、3号墳のものは栗原川の川原石を採石されたと推定される。

斑糲岩：色は灰緑色で、粒形が亜角・亜円である。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が3～5mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が2～4mm、量が中である。輝石は暗緑色、粒径が2～3mm、量が中である。

このような岩相を示す石は栗原川の川原石や音羽山の斜面にみられる斑糲岩の岩相の一部に似ている。

変輝緑岩：色は暗灰色で、粒形が亜角・亜円である。針状の長石と輝石がみられる。長石は灰白色、粒径が0.5～1mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が0.5～1mm、量が多い。

このような岩相を示す石は、石英閃緑岩にレンズ状をなして含まれる変輝緑岩の岩相の一部に似ている。採石地としては音羽山の山麓付近が推定される。寺川や栗原川の川原石にもみられる。

流紋岩質凝灰角礫岩：色は白色で、黒色の溶結凝灰岩礫が散在する。構成粒は溶結凝灰岩と軽石である。溶結凝灰岩は黒色、暗灰色で、粒形が亜角、亜円、粒径が2～40mm、量が多い。基質がガラス質である。軽石は白色、粒形が亜円、円で、粒径が2～50mm、量が多い。基質は白色緻密である。

このような岩相を示す石は二上層群下部ドンズルボー層の溶結していない凝灰岩の岩相の一部に似ている。採石地としては太子町春日の牡丹洞東方付近が推定される。

### 3. 石材の使用傾向

石室材と石棺材の使用傾向について述べる。

#### (1) 石室材について

1号墳と3号墳に使用されている石室材の粒径と採石地についての比較を行う。石室の石組の間隙を充填している石には小さい石が多い。また、充填材であるため小さい粒径のものを使用されて当然のことである。比較を目的とするためにみかけの長径が1mを超す石で比べることとする。

天王山1号墳：1mを超す石材は40個観察され、石種は石英閃緑岩が26個、斑礫岩が11個、変輝緑岩が2個、未調査が1個である。長径は3mを超すものが4個、2m以上3m未満のものが19個、1m以上2m未満のものが17個である。

天王山3号墳：1mを超す石材は41個観察され、石種は石英閃緑岩が15個、斑礫岩が24個、変輝緑岩が2個である。長径は2mを超すものが3個、1m～2m未満のものが38個である。

以上のように使用されている石材の石種と個数がほぼ同じである。しかし、みかけの長径に於いては、1号墳の方がはるかに大きな石材が使用されている。また、石種においても1号墳は石英閃緑岩が多く使用され（図36）、3号墳は斑礫岩が多く使用されている（図37）。石材の粒形を比較すれば、1号墳では石材が角ばっており、3号墳では円みを帯びている。このようなことから、角ばっている石は山地や谷で、円みを帯びているものは川原で採石されたと推定される。厳密な判断基準にたつものではないが、1号墳の石材は主として、当古墳の南方付近の山地で採石され、僅かのは栗原川付近で採石されている可能性がある。しかし、3号墳の石材は栗原川付近で採石されたと推定される。

#### (2) 石棺材について

6世紀の刳拔式家形石棺の石材について、桜井市と天理市を含む範囲の奈良盆地東南部の状況をみれば、1号墳は非常に珍しい古墳である。牡丹洞付近の凝灰岩が使用されている石棺は、御所市には散在してみられ、明日香村では都塚古墳、斑鳩の藤ノ木古墳、大和郡山市の笹尾古墳などがあり、ドンズルボー付近の凝灰岩では天理市のハミ塚古墳がある。

倉橋の地を奈良盆地東南部の地に含めるのであれば、1号墳のみが6世紀に牡丹洞東方付近の石材を使用した刳拔式家形石棺をもつ唯一の古墳であるといえる。

表1 天王山1号墳の石室材の石種と粒径

| 石種    | 石材のみかけの長径 (cm) |       |         |         |         |         |         | 合計  |
|-------|----------------|-------|---------|---------|---------|---------|---------|-----|
|       | 10～49          | 50～99 | 100～149 | 150～199 | 200～249 | 250～299 | 300～345 |     |
| 石英閃緑岩 | 21             | 27    | 6       | 4       | 8       | 5       | 3       | 74  |
| 斑礫岩   | 8              | 6     | 3       | 2       | 2       | 3       | 1       | 25  |
| 変輝緑岩  | 3              | 4     | 1       |         |         | 1       |         | 9   |
| 未調査   | 34             | 9     | 1       |         |         |         |         | 44  |
| 合計    | 66             | 46    | 11      | 6       | 10      | 9       | 4       | 152 |

表2 天王山3号墳の石室材の石種と粒径

| 石種       | 石材のみかけの長径 (cm) |       |         |         |         |         |         | 合計  |
|----------|----------------|-------|---------|---------|---------|---------|---------|-----|
|          | 10～49          | 50～99 | 100～149 | 150～199 | 200～249 | 250～299 | 300～345 |     |
| 細粒黒雲母花崗岩 | 1              | 2     |         |         |         |         |         |     |
| 石英閃緑岩    | 13             | 12    | 9       | 6       |         |         |         | 40  |
| 斑礫岩      | 18             | 26    | 14      | 8       | 2       |         |         | 68  |
| 変輝緑岩     | 13             | 7     |         | 1       | 1       |         |         | 22  |
| 未調査      | 27             | 1     |         |         |         |         |         | 28  |
| 合計       | 72             | 48    | 23      | 15      | 3       |         |         | 161 |

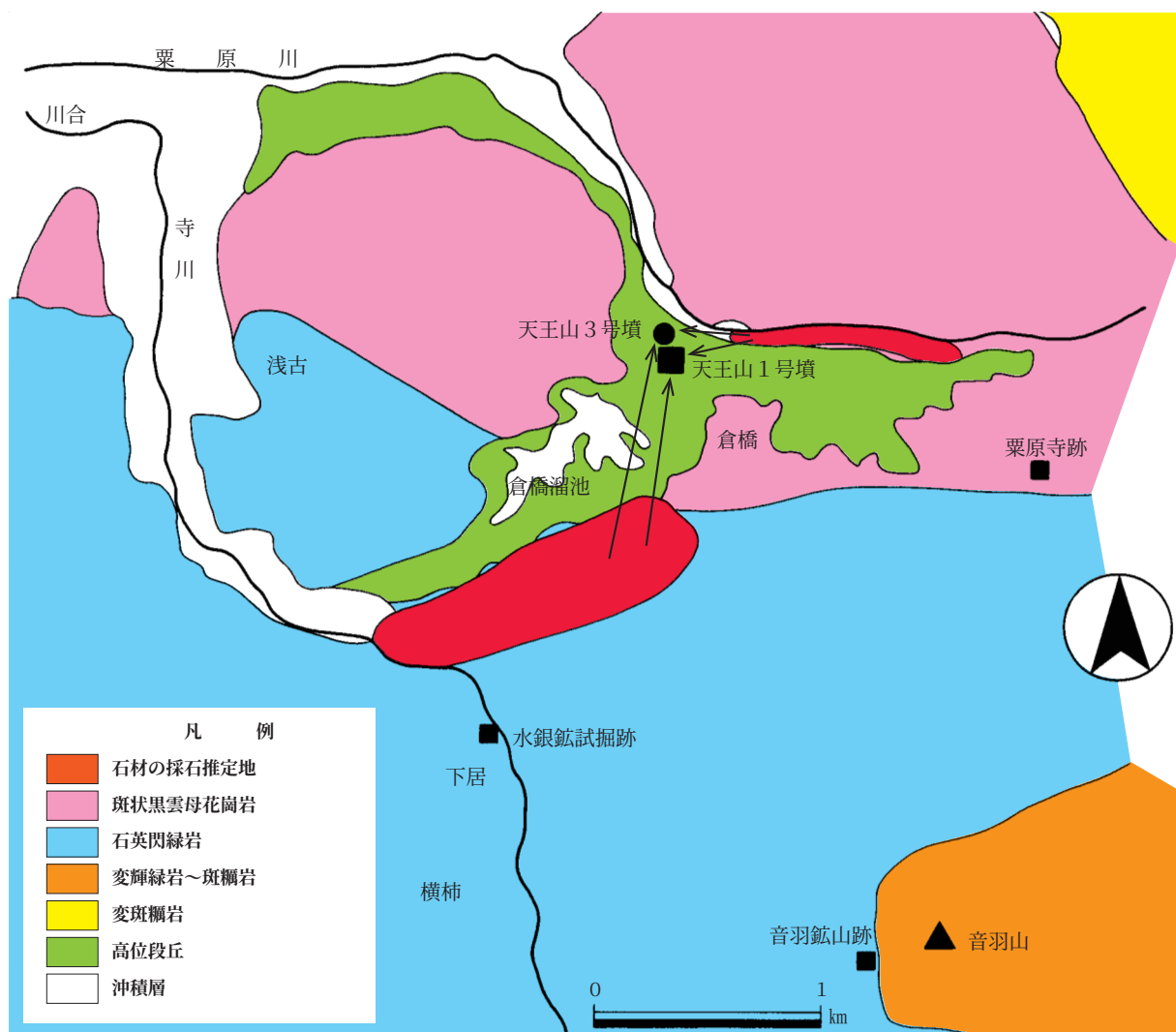


図35 岩石の分布と石室材の採取推定地

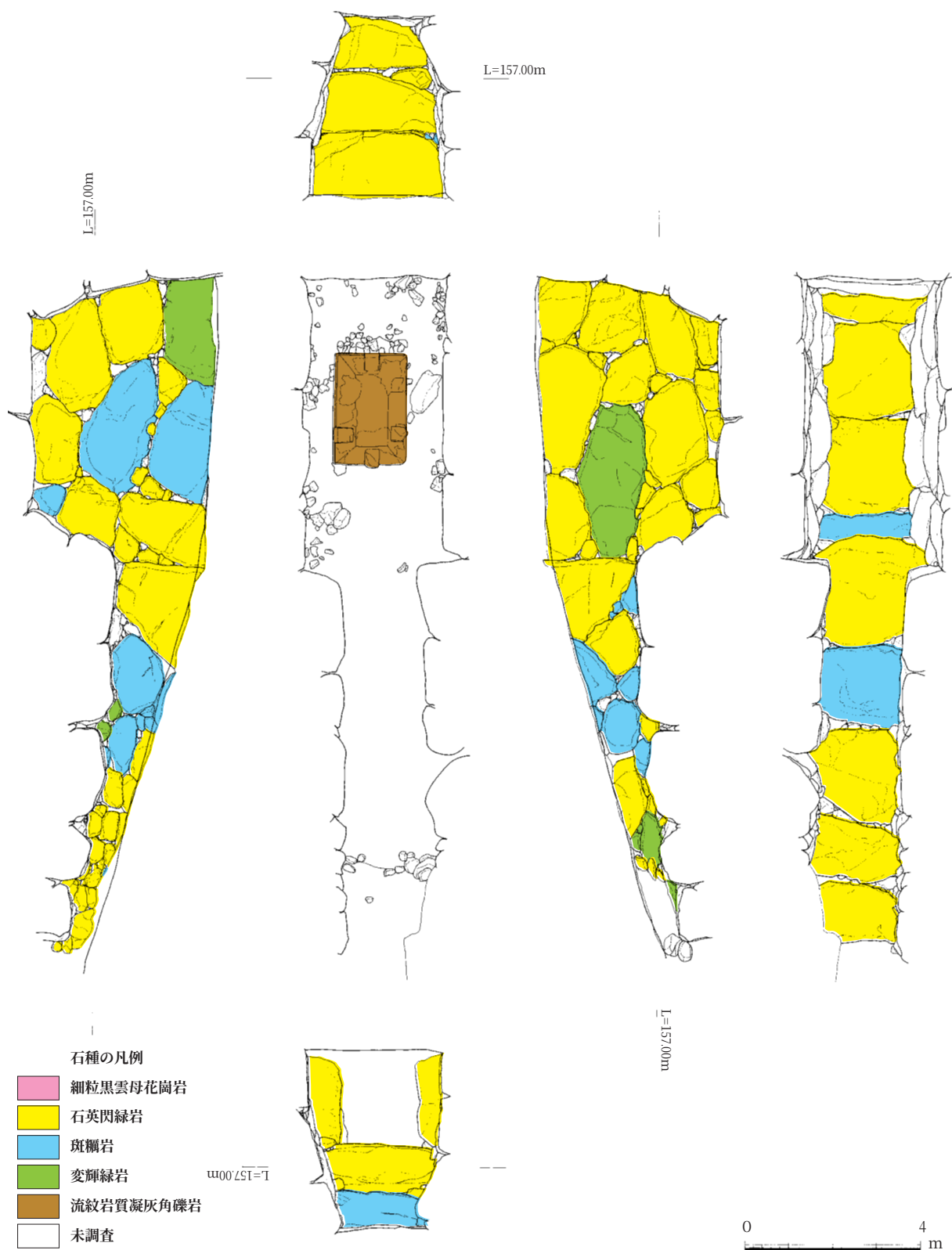


図36 天王山1号墳の石室に使用されている石材



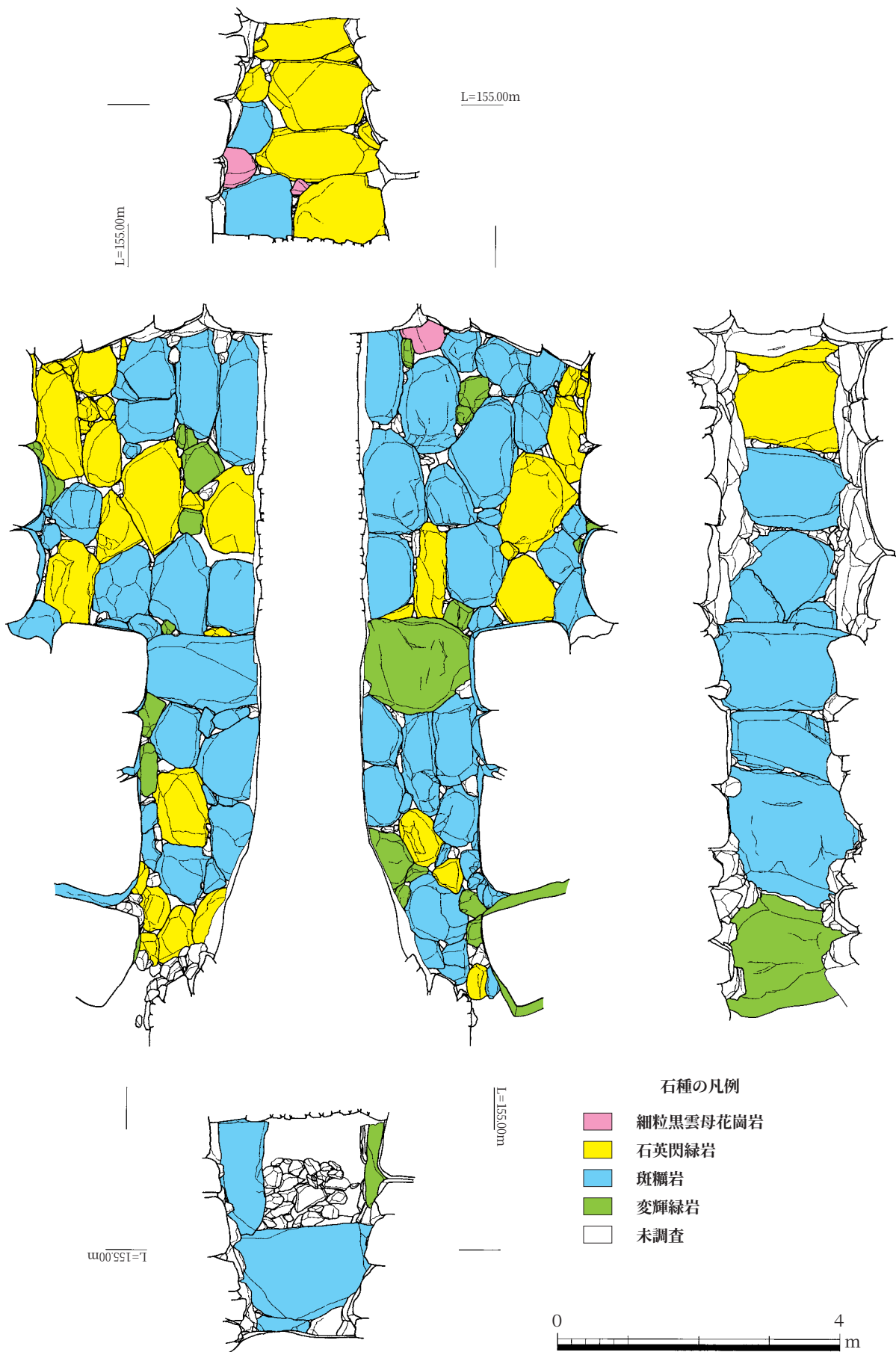


図37 天王山3号墳の石室に使用されている石材

## 第2節 天王山1号墳の家形石棺付着の赤色顔料の分析

奈良県立橿原考古学研究所 奥山誠義

### 1. はじめに

出土文化財に使用されている赤色顔料は鉄（Fe）を主成分とするベンガラ、水銀（Hg）を主成分とする水銀朱、鉛（Pb）を主成分とする鉛丹の3種が知られている。これらは主成分を分析することでおおよそ同定することができる。朱やベンガラは縄文時代以降使用されてきた顔料であるが、鉛丹は奈良時代以降使用される顔料である。

ベンガラは鉄（Fe）の酸化物で文化財の分野では、主に $\alpha$ - $\text{Fe}_2\text{O}_3$ を指す。ベンガラは形状で大きく2分されている。一つは粒状ベンガラとでも呼べる粒状あるいは塊状を呈するベンガラで、もう一方は管状を呈するパイプ状ベンガラと呼ばれるものである。粒状ベンガラは酸化鉄に由来する鉱石、例えば赤鉄鉱や鉄石英等を加工して得られる顔料と考えられ、パイプ状ベンガラは鉄バクテリアの炭酸同化の産物として得られる沼沢地に沈積する含水酸化鉄を材料としている。

水銀朱は、水銀（Hg）と硫黄（S）の化合物である硫化水銀（ $\text{HgS}$ ）が主成分であり、辰砂と呼ばれる鉱物から得られる。一般的には辰砂を粉碎し、流水を使って比重選別（水簸）し精製する。

鉛丹は鉛（Pb）の酸化物で $\text{Pb}_3\text{O}_4$ の組成を持つ。鉛鉱石から造り出される人造顔料である。

### 2. 資料

今回分析に使用したサンプルは調査担当者より提供されたもので、すべて石棺より遊離した細片を用いて分析を行った。調査にあたって担当者が採集したサンプルの採集地点は図38に示したとおりで、サンプルA・Bは赤色顔料の付着の認められた石棺蓋材細片の採集地点を示し、サンプルC・Dはやや光沢を持った黒色の付着物が認められた石棺蓋材の細片の採集地点を示すが、今回は赤色顔料が付着したサンプルA（写真4）を用いて分析を実施した。

### 3. 調査方法

本実験では、走査型電子顕微鏡観察（以下SEM）及びエネルギー分散型X線分析（以下SEM-EDS）を用いて、試料粒子の観察と元素分析を行った。

試料は少量を針で採取し、カーボンテープを貼付した真鍮台に載せイオン液体（1-ethyl-3-methylimidazolium）を滴下し、

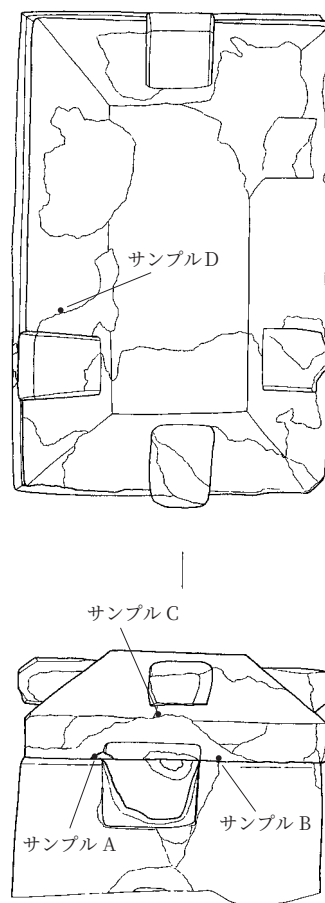


図38 石棺サンプル採集位置図（1/4）

乾燥後に分析を行った。

使用装置：奈良県立橿原考古学研究所のJEOL JSM-5400LV

測定条件：加速電圧はSEM観察は5kVもしくは10kV、SEM-EDSによる元素分析は20kVで行った。  
元素分析の測定時間は300秒に設定した。

#### 4. 結果

赤坂天王山1号墳の赤色顔料のSEM観察では、塊状の不定形な粒子や、両端が丸みを帯びた細長い粒子が確認できた（写真5～8）。パイプ状粒子は認められなかった。SEM-EDSの結果は主に鉄（Fe）を検出した。その他にはアルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、カリウム（K）などを検出した（図39）。

#### 5. まとめ

天王山1号墳の試料は、Feを主に検出した点から、酸化鉄（ $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）からなる所謂ベンガラ的一种であると考えられる。また、SEM観察から非パイプ状ベンガラであることが確認できた。

#### 【参考文献】

成瀬正和「顔料」『文化財のための保存科学入門』京都造形芸術大学編 責任編集岡田文夫 角川書店p.138-152 2002



写真4 1号墳の赤色顔料（サンプルA）

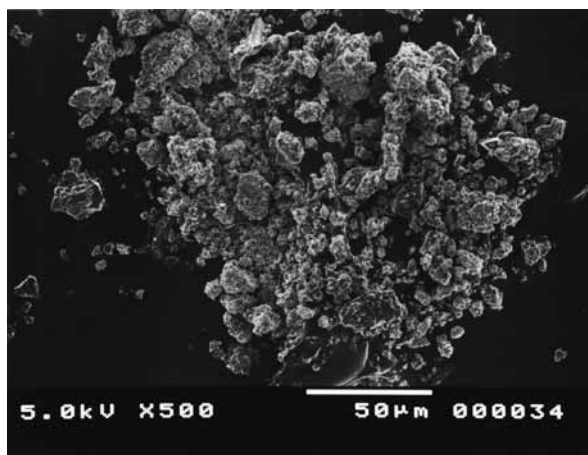


写真5 1号墳の赤色顔料のSEM画像  
（サンプルA 500倍）

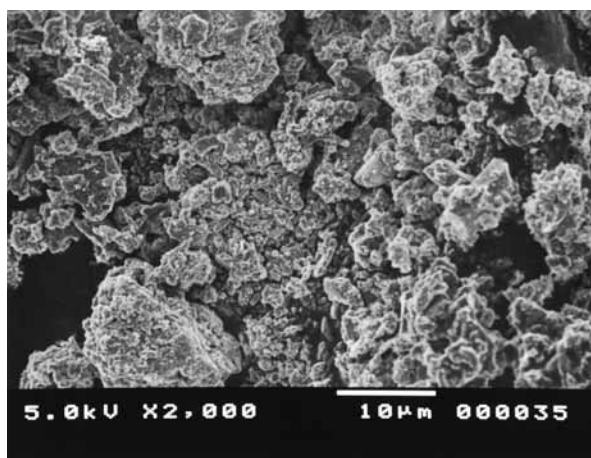


写真6 1号墳の赤色顔料のSEM画像  
（サンプルA 2,000倍）

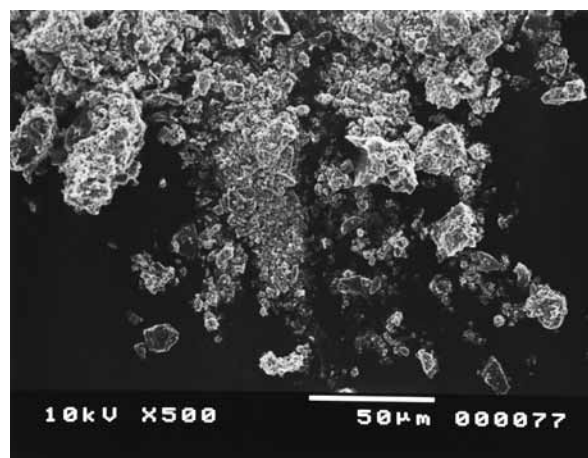


写真7 1号墳の赤色顔料のSEM画像  
（サンプルB 500倍）

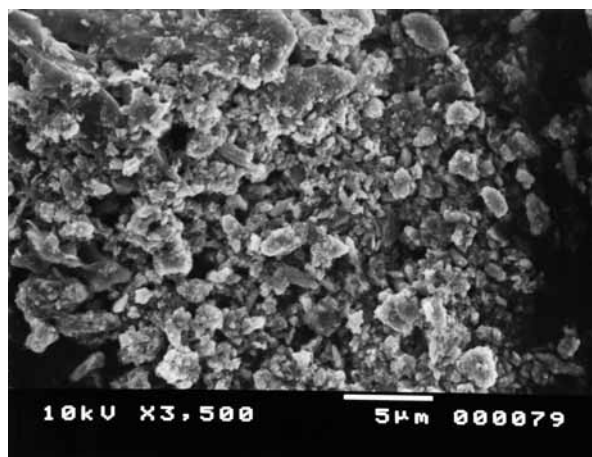


写真8 1号墳の赤色顔料のSEM画像  
(サンプルB 3,500倍)

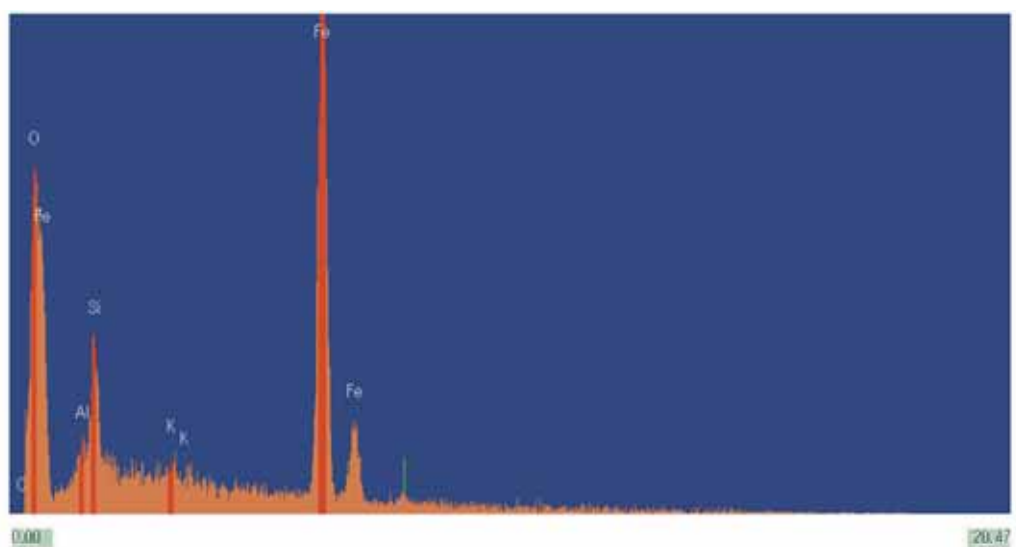


図39 1号墳の赤色顔料の蛍光X線スペクトル



## 第6章 まとめ

### 第1節 天王山古墳群の概要

天王山古墳群は東南に位置する音羽山から派生した標高140m～155mの尾根上に展開する古墳群である。

古墳群の立地する尾根は1号墳の北で二つに分岐しており、今回の調査では便宜的に西尾根・東尾根と呼称している。この尾根上には存在の不確実なものも含めて西尾根に10基、東尾根上に3基の古墳を推定しており、1・2号墳と合わせて都合15基の古墳を図示した（図15）。

これらは古墳群の東側に敷設された道路によって分断されているものの、南東に続く尾根上に展開するカタハラ古墳群とは同一の尾根上に位置する事や、カタハラ4～6号墳などは1号墳とは距離にして約40～80mの範囲に近接して位置していることから、実質的に同じ群として捉えるべきものと考ええる（図1）。

次に、墳丘規模や墳形に目を向けてみよう。両群中の墳丘の多くは径約10～30mの円墳を主として構成されているが、その分布の中心は径約10～15mの小さなものにあり、径約20～30mと比較的規模の大きい2・3・5号墳などは在地の首長墓として盟主的な位置付けが考えられる存在だが、一辺43～50mもの規模を有する大型方墳である1号墳は、その墳形や規模をみても極めて突出したものであり、周囲の古墳とはかなり異質な存在といえよう。

これらの築造時期は近隣に展開し、調査によって築造時期がほぼ判明しているカタハラ1・3号墳<sup>1)</sup>や未調査の4～6墳に加え、天王山2・3・5号墳などの比較的規模の大きな円墳は、第4章第2節におけるそれぞれの項目でみたように、墳丘や石室の様子、1号墳との位置関係などから、6世紀中

表3 天王山古墳群墳丘規模等一覧

| 古墳名  | 墳 形  | 所 在 地  | 規 模 (m)     | 埋 葬 施 設 | 備 考            |
|------|------|--------|-------------|---------|----------------|
| 1号墳  | 方 墳  | 尾根中央   | 約50.5×約43.2 | 横穴式石室   | 両袖式の石室・家形石棺    |
| 2号墳  | 円 墳  | 尾根中央   | 約25×約20     | 横穴式石室   | 右肩袖式の石室        |
| 3号墳  | 円 墳  | 西尾根中央  | 約30×約28     | 横穴式石室   | 両袖式の石室         |
| 4号墳  | 円 墳  | 西尾根中央  | 約10         | 横穴式石室？  | 石材の抜取りにより大きく破壊 |
| 5号墳  | 円 墳  | 西尾根中央  | 約30         | 不明      |                |
| 6号墳  | 円 墳  | 西尾根西斜面 | 約9          | 不明      | 石材の散布あり        |
| 7号墳  | 円 墳  | 西尾根西斜面 | 約10×約8      | 横穴式石室   | 両袖式の石室         |
| 8号墳  | 円 墳  | 西尾根西斜面 | 約11         | 不明      | 石材の散布あり        |
| 9号墳  | 円 墳  | 西尾根西斜面 | 約10         | 不明      | 石材の散布あり        |
| 10号墳 | 円 墳  | 西尾根中央  | 約11         | 不明      | 石材の散布あり        |
| 11号墳 | 円 墳  | 西尾根中央  | 約8          | 不明      | 周辺より須恵器坏蓋の採集あり |
| 12号墳 | 円 墳  | 西尾根中央  | 約6          | 不明      |                |
| 13号墳 | 円 墳？ | 東尾根中央  | 約14         | 不明      | 古墳ではない可能性も高い   |
| 14号墳 | 円 墳  | 東尾根中央  | 約22×約20     | 不明      |                |
| 15号墳 | 円 墳  | 東尾根中央  | 約11         | 不明      |                |

頃～後半ころの築造と考えられることから、一群の築造のピークはこの頃にあると考える。

これらの円墳群に続くのが天王山1号墳で、6世紀末～7世紀初頭の築造と推定されているが、同時期に築造されたと考えられる古墳は他には無く、群をなさないことは注意すべき点である。1号墳の後、7世紀前半になるとカタハラ古墳群では2号墳をはじめとして周辺の尾根上に、ごく小規模な墳丘を伴うとみられる1～15号墓の小石室や、木棺直葬墓などが数多く確認されている<sup>1)</sup>。同様の埋葬施設は、天王山古墳群中では8～12号墳などにその存在が推定されることから、2・3・5号墳のような円墳群の築造と（Ⅰ期）、1号墳の築造（Ⅱ期）、そして小規模埋葬施設群の形成（Ⅲ期）と、墓域としての利用は少なくとも3時期を設定することができよう。

なお、今回測量を行った各古墳の規模や埋葬施設の状況については前頁の表3のとおりである。

（橋本）

## 第2節 天王山1号墳の概要

### 1. 墳丘の立地と周囲の古墳

1号墳の立地については、第4章第2節の1～3号墳それぞれの「墳丘の構造」の項目で触れてきたように不自然な点が多い。具体的には2号墳墳丘の東半と1号墳墳丘が重複する関係にあることや、3号墳と1号墳の間に3号墳墳丘の南側を埋めるように平坦面が広がっていることである。

この平坦面のレベルは1号墳の石室や墳丘の基底にほぼ見合うものであることから、先行して2・3号墳が築造されていた場所に1号墳が後から築造されたことを示唆するものと考えている。

1号墳の位置する地点は、上方のカタハラ古墳群から延びてきた痩せ尾根が東西に分岐する地点の上位にあたり、尾根上では最も大きく平坦面のとれる地点（図1）である。2・3号墳の石室や墳丘基底とのレベルの関係や、2号墳墳丘東半の削平、3号墳の南側を埋めた1～3号墳間の平坦面の存在は、1号墳の築造に先立つ平坦面の造成によって生じたものと判断するのが自然と考える。

なお、Ⅰ期の段階で古墳の築造に最も適した1号墳の所在地が利用されず、Ⅱ期に到るまでスペースが空いていたとは考えがたいことから、先行する古墳が存在した場合は造成に伴って削平されたり、1号墳に取り込まれたりした可能性も考えられる。また、全体の印象として1号墳の周辺に2～15号の中・小規模な古墳が近接・密集して築かれていることは、50mクラスの大型方墳で被葬者に崇峻の名前が挙がるような陵墓クラスの古墳としては墓域がきわめて狭いと言えることも、この古墳の特徴的な点といえよう。

### 2. 墳丘の復元とその規模

さて、1号墳の墳丘構造を整理しておくこととしたい。図40・41は1号墳築造時の姿の復元を試みたものである。発掘調査が全く行われていないこともあり、正確な様子を示すことは困難だが、石室の軸線や見かけの墳丘裾、各所に残る段築の名残とみられる平坦面の様子など、墳丘から読み取れる様々な情報をもとに案として作成した。

墳丘各部の観察は第4章第2節で詳細に行ったので再述しないが、今回の測量の結果、墳丘は東西

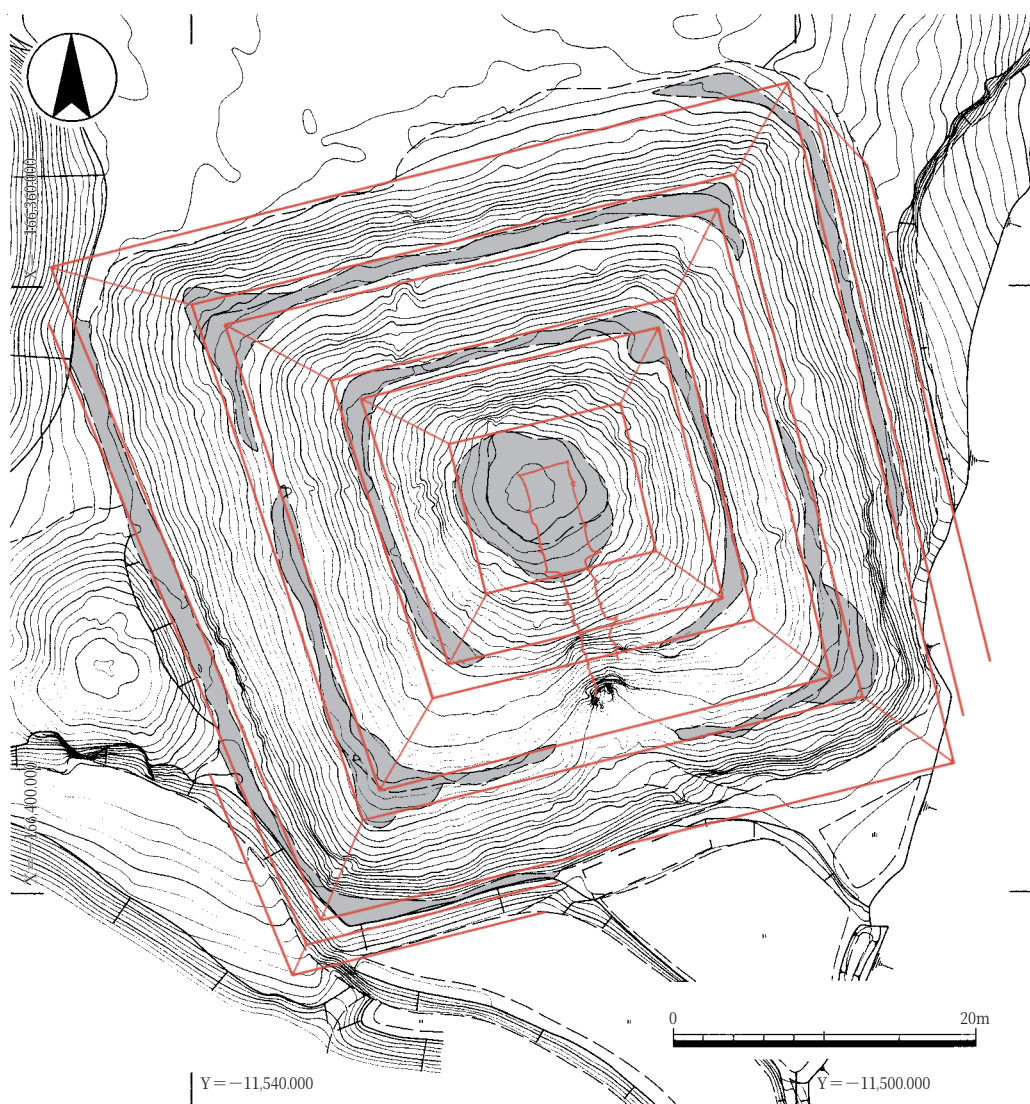


図40 天王山1号墳の墳丘復元案1 (1/500)  
※アミ掛けは現在確認できる平坦部である

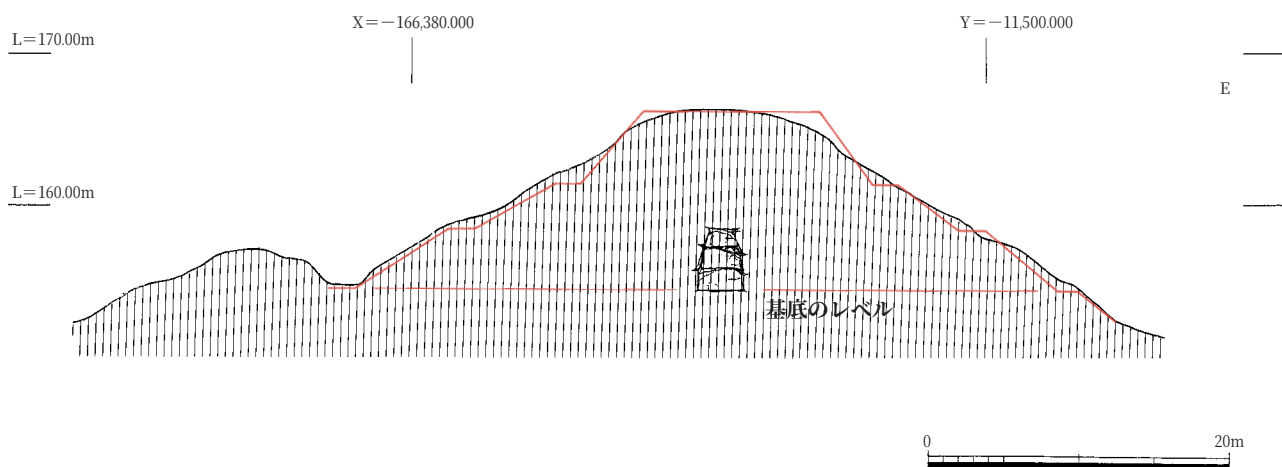


図41 天王山1号墳の墳丘復元案2 (1/500)  
※玄室中央を通過する東西横断図である

辺と南北辺で大きさに違いがあり、これまで示されてきたような比較的整った方形（図11）ではなく、やや歪な形状を呈していることが判明した。それは墳丘の北辺と東・南辺が石室の軸線とほぼ平行、もしくは直交するのに対し、西辺は北に向かうに従って墳丘西辺が外へ開いていくというもので、地形や2号墳の墳丘などに影響を受けた可能性も考えられるが、その原因は明らかではない。

墳丘基底部において、それぞれの辺ごとの復元規模をみると、東辺は約46.5m、西辺は約47mと東西両辺における南北長がほぼ同じ規模であるのに対し、東西長では北辺は約50.5m、南辺は約43.2mと北辺が7mも長いものとなっている（図40）。

一方、墳丘の上部は比較的整った形状をみることができる。墳頂部からみていくと、墳頂部平坦面は北・南辺ともに東西長11.6m、南北長は東辺が10m、西辺が10.3mと東西にやや大きめだが、整った方形を呈しているし、墳丘3段目の基底は東・西・南辺が約18.5mであるのに対し、北辺が約20.3mとやや長くなっているが、これは西辺の基底が西へと開くことに影響を受けたものであろう。この状況は墳丘2段目でも同様で、東辺が32m、南辺が31m、西辺が32.5m、北辺が33.5mと北辺が若干長くなっている。

このように、今回作成した復元図に基づいて墳丘の規模を求めると、1号墳の墳丘は3段築成で東西約43m～約50m、南北約47mとやや歪な方形を呈し、墳丘基底からの高さは11.75mにということになるが、石室を中心として規模を計測しなおすと、玄室の南北中軸線上における墳丘の規模と東西中軸線上における墳丘の規模の双方が正しく約46.5mとなる点は注目すべきで、恐らくは墳丘築造時の企画線と意図した墳丘の大きさをここに読み取ることができるのではないかと考えている。

なお、今回新たに墳丘の西～南辺の一部と東辺の墳丘基底よりも下部に基壇に相当する段の存在を推定している（図版4, 10, 12, 19, 20）。中でも東辺のものが顕著で、墳丘基底の外側に現在通路となっている幅約1.5mの平坦面が存在し、その下部に高さ2.5m程の基壇斜面が竹藪に向かって落ちていく様子が認められる。これらは墳丘が見える方向や、大きく見せることを意識したと考えるよりは、平坦面が取りにくい尾根上に、できるだけ大きな墳丘を築くための造作ではないかと考えている。

段築に伴う平坦面は、図17, 40や図版10～15, 17～20で示したように、現地においても比較的良い状態で観察することができる。図40に示したアミ掛けは測量時に確認できた平坦面を反映させたもので、一見すると上部に位置する墳丘2～3段目間の平坦面がやや狭いようにも見えるが、3段目の墳丘の流出が比較的激しいため、これによって平坦面の埋没が進行している可能性もあることから、ここでは1・2段目ともに約1.5mと一定の幅で復元を行なっている。

なお、葺石の存在については墳丘上や崩落部の断面などで顕著な石材の存在が確認できないため、積極的にその存在を認めることは困難と考えている。将来の調査を待つこととしたい。

### 3. 石室・石棺の様子

石室は主軸をGN-16°-Wに開口する両袖式の横穴式石室である。羨道側からの土砂の流入が激しく、全容は不明だが、現状で確認できる石室長は15.3m以上、玄室長6.5m、高さは4.2m以上、幅は奥壁部で3.2m、中央部で3.0m、前壁部で3.2mの規模を持つ。羨道部は長さが8.8m以上、幅は1.8m、高さは



1.9m以上となる。床面への土砂の堆積により、正確な石室基底の高さは明らかでは無いが、現状は標高154.28mで、築造当初に設定された石室の床面や墳丘裾の高さは、概ね標高154m前後に設定された可能性を考えている。

さて、1号墳の石室材は大型で角張った石英閃緑岩を中心として構築され（図36）、一部に斑礫岩と変輝緑岩の使用が報告されている。これは3号墳の石室が比較的丸みを持った斑礫岩を多用して築かれていること（図37）とは異なった傾向を見せるもので、奥田氏によると1号墳では古墳群より南の音羽山麓付近から採られた石材が主に用いられ、栗原川一帯の石材は少なめと推定されるのに対し、3号墳は栗原川一帯からの採石が主であろうとのことである。

石棺は玄室のやや北西寄りに設置された刳拔式の家形石棺で、棺材は大阪府太子町春日の牡丹洞東方で採石された流紋岩室凝灰角礫岩であった。鑑定をお願いした奥田氏によると、この石材を用いた石棺の類例は御所市や明日香村、斑鳩町、大和郡山市などにみられるものの、盆地東南部では1号墳が唯一の事例とのことである。

なお、石棺表面の一部には製作時の工具痕などが確認できるものの、総じて摩滅と剥離が進んでおり、良好な状態が保たれているとは言いがたい。棺身・蓋の南小口には蓋石の存在を想定させる方形の刳り込みがあり、棺蓋には6基の縄掛け突起が残されている。棺の基底は埋没しているものの、現状で棺蓋上面までの高さは1.51m以上、棺身の長さは約2.5m、幅約1.6mと大きなものである。

今回の調査で初めて確認された赤色顔料は、奥山氏の分析により赤鉄鉱や鉄石英などの鉱石を加工して作られた非パイプ状のベンガラを用いられていたことが判明した。もともとは棺の全面に塗布されていたと考えるが、現在では棺蓋と棺身の合わせ目にしかその存在を確認することができない。

#### 4. 築造年代について

本墳の築造年代については、早くから石室が開口していたものの、発掘調査が行われていないことに加え、古記録などにも遺物の出土が全く伝わっておらず、石室や石棺などの型式などから推定するしかないのが実情である。従来、本墳に対して与えられてきた築造年代は概ね6世紀末から7世紀初頭で、残念ながら、今回の調査では新たに築造年代を議論できるような手掛かりは得られていないが、墳丘や石室、石棺などの精緻な測量図が作成されたことを契機として、今後さらに研究が進展することを期待したい。

なお、今回の調査により、次項でみるように早くから「天王山式<sup>2)</sup>」の標識とされ、古くから石室規格の親縁性が指摘されている北葛城郡広陵町牧野古墳の石室との詳細な比較が可能となった。牧野古墳は昭和58年に保存を目的とした発掘調査が行われたことにより6世紀末頃築造の大型円墳であることが判明しており、早くから押坂彦人大兄皇子の成相墓の可能性が指摘されている<sup>3)</sup>。後述するように天王山1号墳と石室が極めて近い形態・規模を持つ点は設計図もしくは工人の共通性が想定されるとともに、現時点で1号墳の発掘調査が困難な中、両古墳の比較検討は1号墳の築造時期を推定する上でも重要な手掛かりとなろう。

それでは今回作成した実測図とあわせて、改めて両古墳の様子をみておくこととしよう。

## 5. 牧野古墳の石室との比較

さて、図42には牧野古墳の石室との合成図を示すとともに、表4には墳丘や石室各部の数値の比較表を後考のため示しておくこととする。合成図の作成にあたっては大阪市立大学日本史研究室によって作成された3次元計測図<sup>4)</sup>を参考に、報告書『史跡牧野古墳』を資料としてトレースさせていただいた。

両古墳は方墳と円墳でそもそも墳形が全く異なるものの、墳丘の規模は概ね50m前後と比較的近い墳丘規模を有するとともに、玄室

長や玄室幅、羨道幅などの規模が確認できる部分の数値は同じ、もしくは10～20cm程度の差の中におさまっており、平面的なプランは各部の数値からも極めて近いものといえる。

一方、玄室や羨道の高さは天王山1号墳の床面に土砂が堆積しているため、正確な比較は不可能だが、玄室・羨道部ともにその差は30cm程度であり、床面の埋没部分を勘案すれば、両者はさらに近い数値になると考えられる。さらに、壁の持ち送りの様子も牧野古墳の前壁の角度がやや急で、玄室天井と羨道天井の比高差がやや大きいことを除けば、他の部分の様子は非常に良く似通っているし、閉塞石の位置も全く同じである。敢えて両石室のプランの違いを挙げるとすれば、牧野古墳の羨道は平面的に開きが無く、玄門から羨門側へと直線的にのびるのに対し、天王山1号墳の羨道は左側壁が東へとやや開きぎみに見えること、牧野古墳の羨道部の天井石はほぼ水平に揃えて据えられているのに対し、天王山1号墳の羨道部の天井は羨門側へと向かうにしたがって、徐々に高く天井石が据えられていることなどを挙げることでよい。

次に、石室に使用されている石材の様子を見てみよう。天王山1号墳の玄室は両側壁・奥壁ともに3段、天井は2石と非常に大きな石材で構築されているのに対し、牧野古墳は奥壁こそ3段で構築されているものの、下2段分が2石で構成される事に加え、両側壁は4段、天井石は3石と天王山よりもやや小ぶりの石材が使われている。羨道部は天王山1号墳の羨道の多くが流入土により埋没しているため、全体での比較が困難である。石材の大きさなどは両古墳の間に目立った相違は認められないが、1号墳では右側壁の羨門側の石材に小さめの石材が多用される傾向が見て取れる。(橋本)

表4 天王山1号墳と牧野古墳の規模

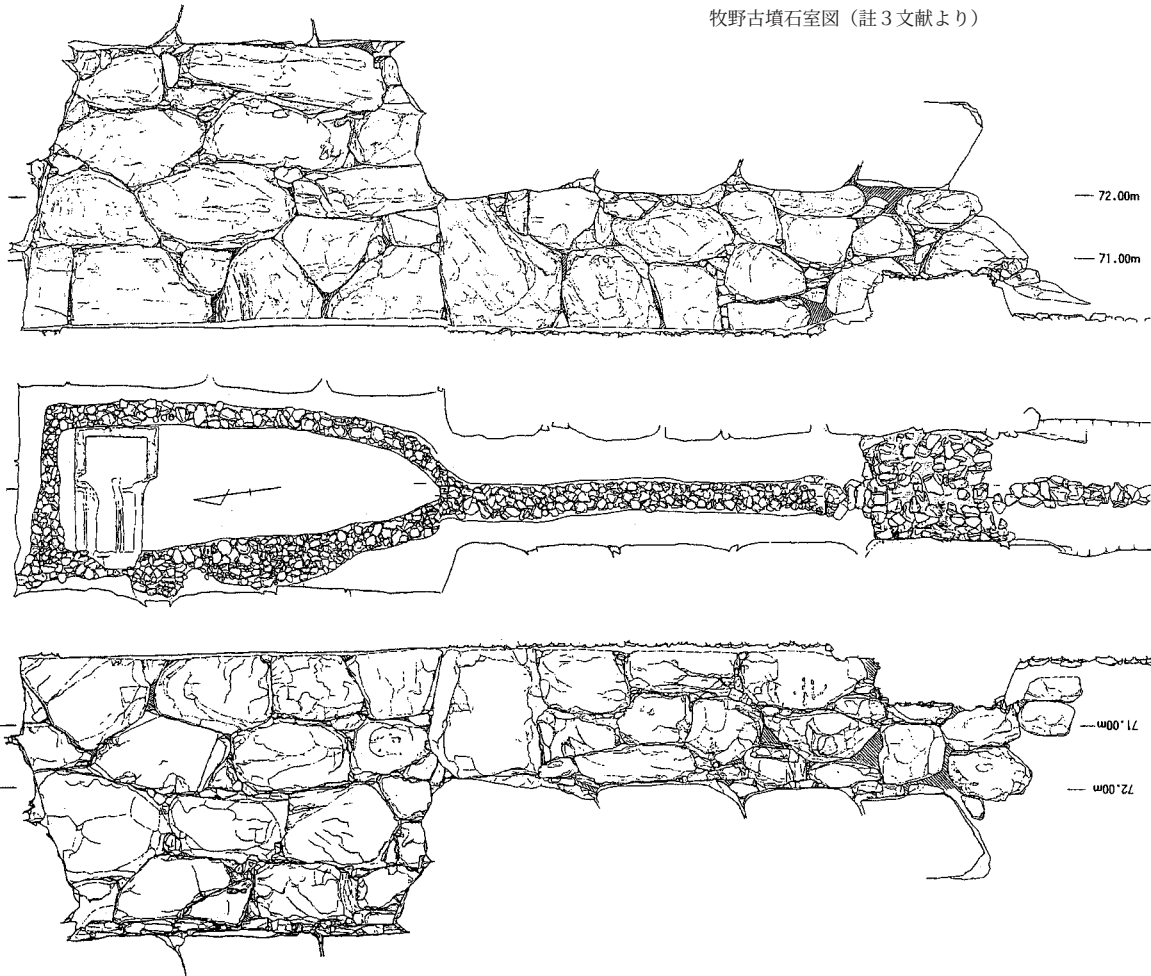
|      | 天王山1号墳      | 牧野古墳       |
|------|-------------|------------|
| 墳形   | 方墳          | 円墳         |
| 墳丘規模 | 約43.2×約50.5 | 約48(約60)   |
| 段築   | 3段          | 3段         |
| 石室全長 | 15.3以上      | 約17.1      |
| 玄室長  | 6.5         | 6.7        |
| 玄室幅  | 3～3.2       | 3.2～3.3    |
| 玄室高  | 4.2以上       | 約4.5       |
| 羨道長  | 8.8以上       | 10.24～10.7 |
| 羨道幅  | 約1.8        | 約1.8       |
| 羨道高  | 1.9以上       | 2～2.2      |

(単位はm)

## 第3節 調査の成果と今後の課題

今回の調査における最大の成果は日本古文化研究所の調査以来、80年間更新されていなかった天王山1・3号墳の石室や墳丘の測量図、周辺の地形測量図が整備されたことであろう。本報告の最後に、調査の成果と、新たな課題を整理し、将来の調査や研究・整備への備えとしておきたい。

牧野古墳石室図（註3文献より）



天王山1号墳石室図  
※赤のラインは牧野古墳の石室である。

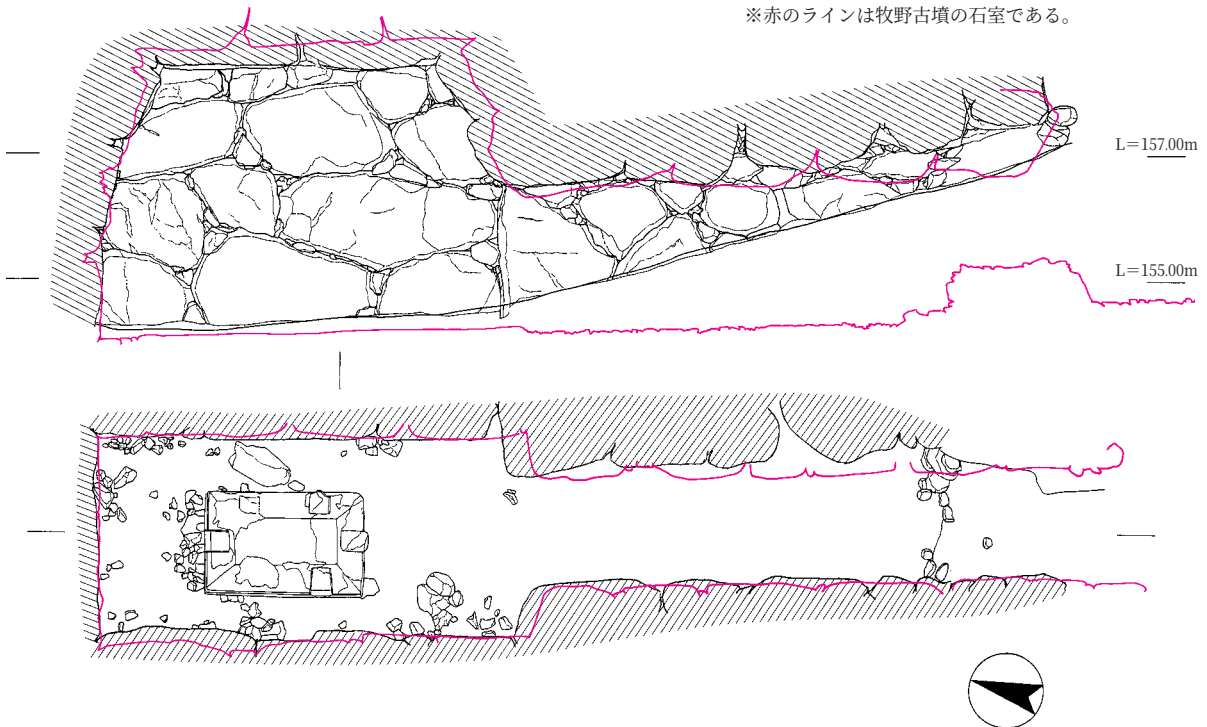


図42 1号墳と牧野古墳の石室比較（1/120）

0 4 m

## 1. 調査の成果について

今回の調査による第1の成果は詳細な地形測量図が作成されたことにより、従前から認識されていた1号から5号墳のほかに、新たに6～15号墳の存在が確認・推定されたことであろう。このことにより、古墳群全体の構成が明らかとなったことに加え、本章第1節で述べたように、墳丘規模や埋葬施設の状況からⅠ期として想定した6世紀中頃～後半の横穴式石室の構築と、Ⅱ期とした6世紀末から7世紀初めの天王山1号墳の築造、Ⅲ期とした7世紀前半の小規模な埋葬施設の構築が推定されるとともに、個々の分布の状況や各期の土地利用の様子などが具体的に検討可能となった。

第2の成果といえるのは従前から終末期の大型方墳として、或いは崇峻天皇陵の真の候補地として著名な1号墳の墳丘や石室の全容が示されたことである。第3章でも述べたように、1号墳の墳丘と石室は約80年前の平面図と左側壁図、前壁図が今日に至るまで基礎資料となっており、「天王山式」とされる一群の横穴式石室の指標でありながら、全体像を知るためには現地で観察するしか方法がない状況であった。

このような中、今回の測量調査にあたっては、某社の協力を受けて精度の高い三次元計測を実施するとともに、三次元計測の及ばない部分は手測りによって補正・補足作業を行い、より精度の高い測量図を提示することができたと自負している。

## 2. 今後に向けて

上記の成果の一方、測量図が整備されたことにより新たな課題も浮かび上がってきた。細かな様相の解明はともかく、ここでは今後解明すべきものとして幾つかの項目を挙げておきたい。その第1は古墳群全体にわたる個々の築造時期の解明と考えるが、中でも重要と考えるのは1号墳と他の古墳の築造時期の関係である。第4章第2節や本章第2節では1号墳と2号墳の墳丘の重複関係と、石室基底高の著しい違い、3号墳墳丘南半の削平状況と1－3号墳間に広がる平坦面の状況などから、先行する群集墳の中に1号墳が後から築かれたのではないかと<sup>5)</sup>の見方を示した。同様の事例は明日香村石舞台古墳においても確認されているものだが、この状況が1号墳にもあったのか否かは将来調査によって確認したい事柄である。

次に、第2の課題と考えるのは、個々の墳丘細部の属性の解明である。特に1号墳の墳丘において想定した東側と西南側の基壇の有無や、段築の状況、墳頂部平坦面の様子と葺石の有無などは発掘調査を経ないと解明の難しいものではあるが、終末期の大型方墳を考える上ではいずれもが重要な属性であり、これもまた、将来の調査が期待されるところである。

第3の課題として考えるのは石室の正確なデータや石室周辺の様相の確認である。先にも述べた様に「天王山式」の指標とされる石室の細かなデータを得ることは重要な課題であるとともに、玄室床面の状況や羨道部天井面の傾斜と床面の関係、羨門部周辺の石室と墳丘の関係および前庭部の状況などの解明も待たれるところで、まずは石室や石棺などの保存を前提とした探査などの非破壊調査の可能性も視野に入れておく必要があると考える。

そして最後に最も重要な課題と考えるのは、土器や副葬品などの考古資料に基づいた1号墳の築造



時期と被葬者（像）の解明である。発掘調査こそ行われていないものの、江戸時代より続く崇峻陵の探索と1号墳をめぐる研究の成果は十分にその可能性を想起させるものであり、後期・終末期古墳の研究に門外漢である筆者などはほぼ確実なものと考えて良いのではないかと考えるが、これを契機に様々な視点からの研究と議論が進むことに期待したい。（橋本）

【註記】

- 1) 橋本輝彦編 2000『カタハラ古墳群発掘調査報告書』桜井市内埋蔵文化財1999年度発掘調査報告書2（財）桜井市文化財協会
- 2) 白石太一郎 1967「岩屋山式の横穴式石室について」『ヒストリア』第49号 大阪歴史学会  
白石太一郎 1974「第2節 牧野古墳と石ヶ谷古墳」『馬見丘陵における古墳の調査』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊 奈良県教育委員会
- 3) 白石太一郎 1974「第2節 牧野古墳と石ヶ谷古墳」『馬見丘陵における古墳の調査』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊 奈良県教育委員会  
河上邦彦編 1987『史跡 牧野古墳』広陵町文化財調査報告第1冊 広陵町教育委員会
- 4) 大阪市立大学日本史研究室 2010『奈良県広陵町牧野古墳の石室』大阪市立大学日本史研究室
- 5) 丹羽恵二編 2010『桜井の横穴式石室を訪ねて』（財）桜井市文化財協会でも同様の見方が示されている。

# 写真図版



天王山古墳群全景1（北西より）



天王山古墳群と栗原谷（西より）



図版2 天王山古墳群（2）



天王山古墳群全景2（上が北）



天王山古墳群全景3（南西より）





天王山古墳群全景4（北より）



天王山古墳群全景5（南東より）



図版4 天王山1号墳(1)



墳丘南面裾部の様子(東南より)



墳丘南西隅基底から基壇部の様子(東南より)





墳丘南面の様子1 (東より)



墳丘南面の様子2 (南より)





墳丘南面の様子3（墳頂より南を撮影）



墳丘南東隅部の様子（墳頂より南東を撮影）





墳丘北東隅部の様子(墳頂より北東を撮影)



墳丘北面の様子(墳頂より北を撮影)



図版8 天王山1号墳(5)



墳丘北西隅部の様子(墳頂より北西を撮影)



墳丘西面の様子(墳頂より西を撮影)





墳丘南西隅部の様子（墳頂より南西を撮影）



墳頂面の様子（墳頂部北辺より南方向を撮影）





墳丘東面全景(北より)



墳丘東面上段平坦面の様子(北より)





墳丘東面下段平坦面の様子(北より)



墳丘東面下段平坦面の様子(南より)





墳丘東面基底から基壇部の様子（北より）



墳丘東面基底から基壇部の様子（南より）





墳丘北東隅基底部の様子（東より）



墳丘北面全景1（東より）





墳丘北面全景2（西より）



墳丘北面の段築の様子（西より）





墳丘北面上段平坦面の様子（東より）



墳丘北面下段平坦面の様子（北より）





墳丘北面基底部の様子（東より）



墳丘北西隅基底部の様子（北より）





墳丘西面全景1（北より）



墳丘西面上段平坦面の様子（北より）





墳丘西面下段平坦面の様子（北より）



墳丘西面基底部の様子1（北より）





墳丘西面基底部の様子2 (南より)



墳丘南西隅の基底から基壇部の様子1 (北より)





墳丘南西隅の基底と基壇部の様子2 (北東より)



墳丘南西隅の基底と基壇部の様子3 (北西より)





墳丘南面石室開口部の様子1 (南より)



墳丘南面石室開口部の様子2 (南より)





石室開口部右側壁の様子（東南より）



石室開口部閉塞石?の様子（西南より）





玄室全景（南より）



玄室天井部の様子（上が北）





前壁の様子1 (北西より)



前壁の様子2 (北東より)





玄室奥部左隅の様子(南西より)



玄室奥部右隅の様子(南東より)





左袖部の様子(北西より)



左袖上部の様子(北西より)



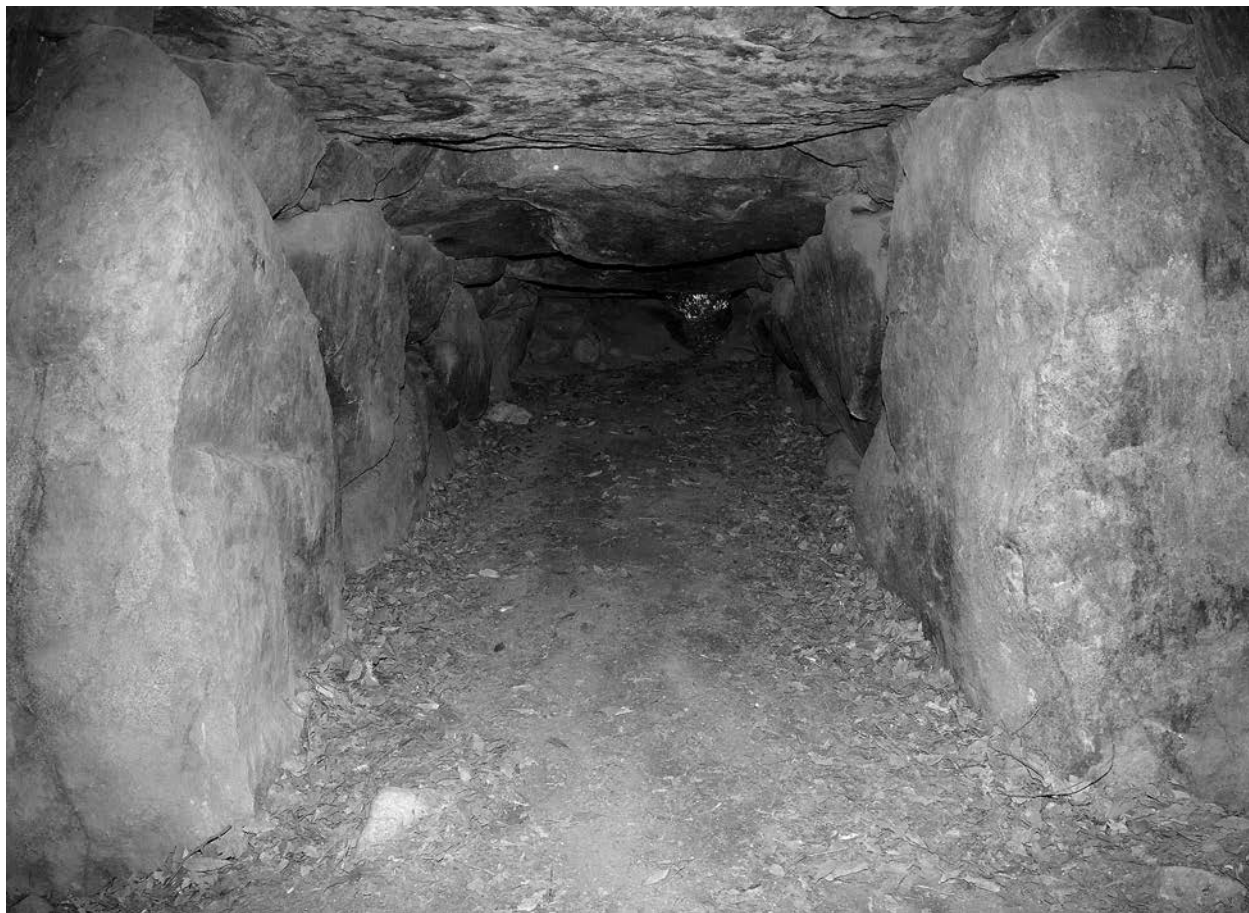


右袖部の様子 (北東より)



右袖上部の様子 (北東より)





羨道の様子（北より）

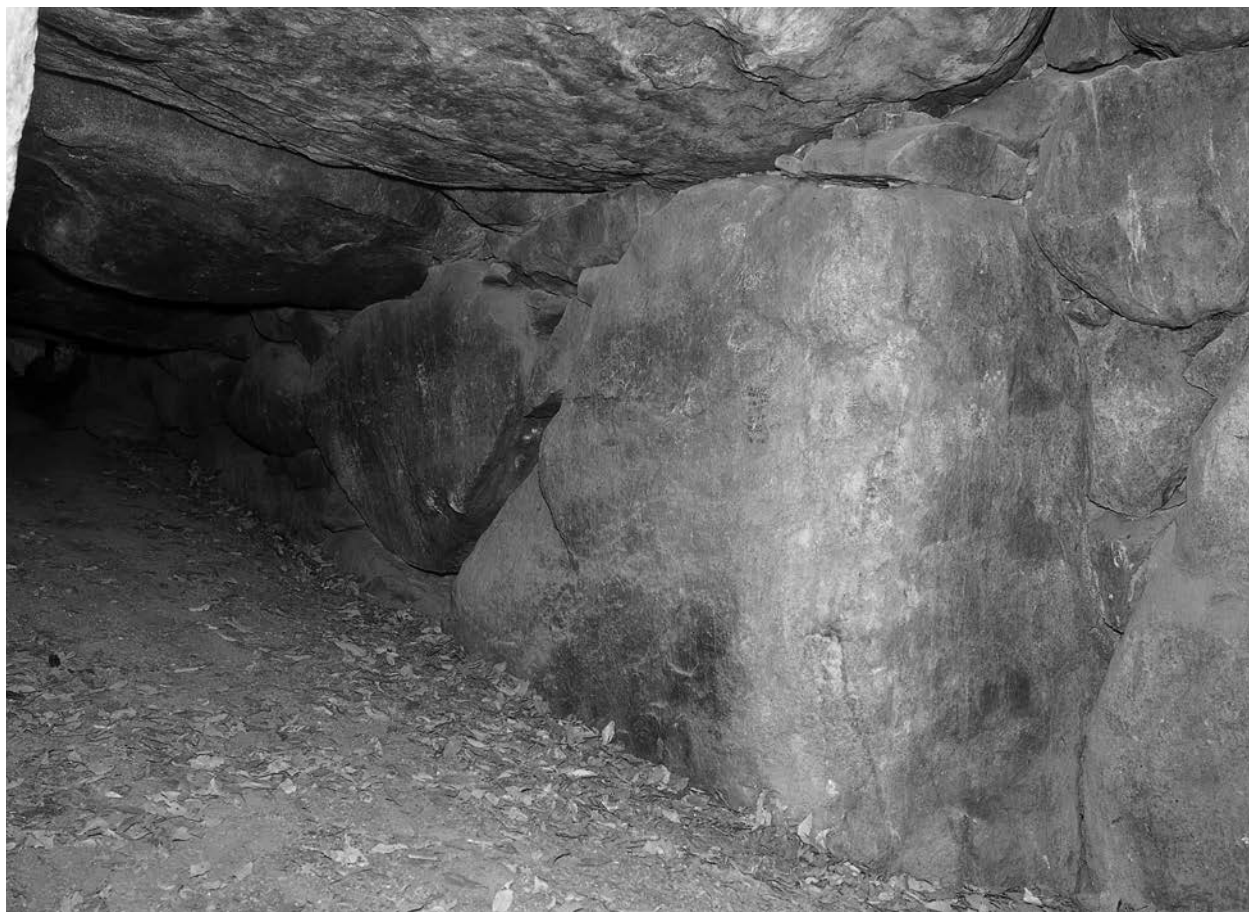


閉塞石露出状況（北より）





左袖部および羨道左側壁の様子（北西より）



右袖部および羨道右側壁の様子（北東より）





玄室と石棺の様子（南より）



石棺南小口の様子（南より）





石棺全景（南東より）

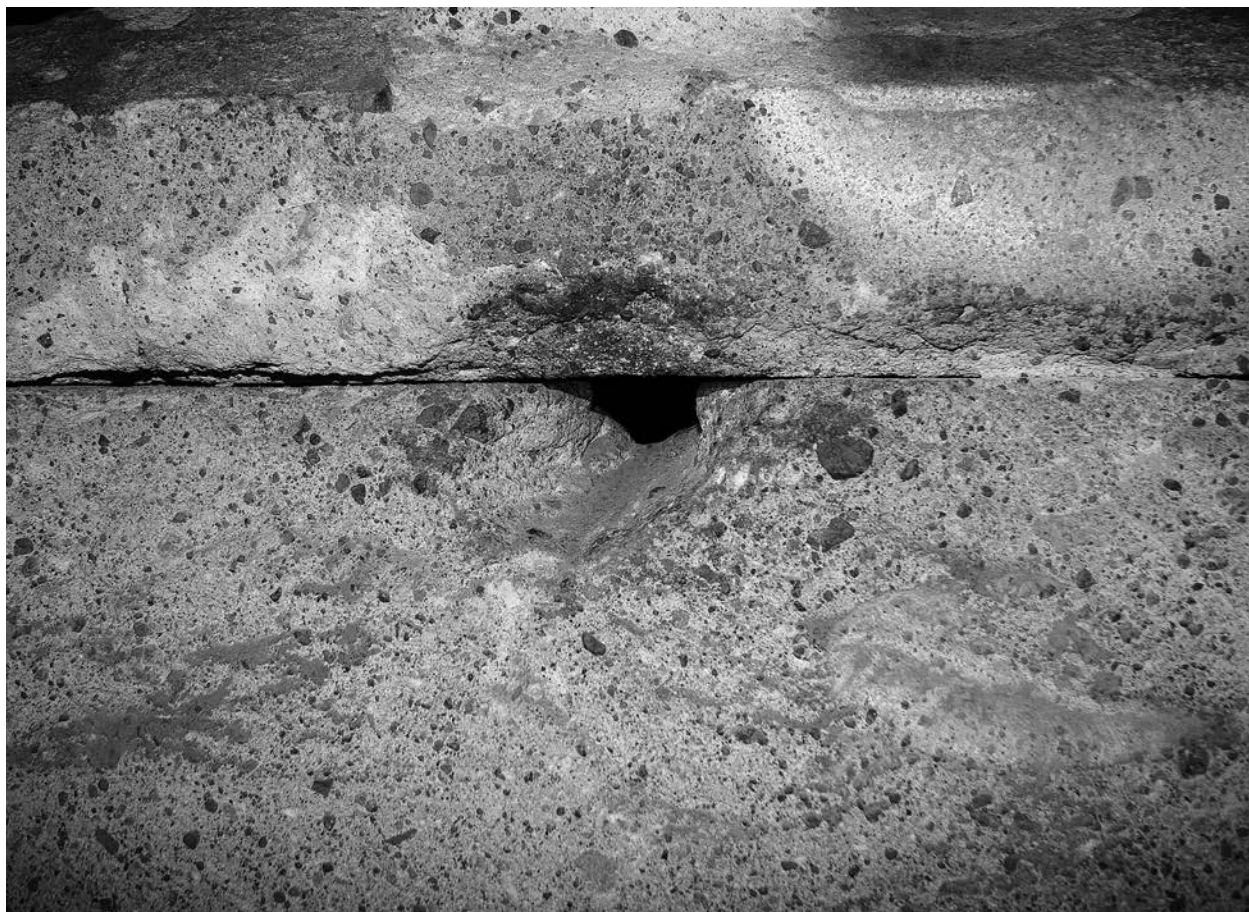


石棺全景（北東より）





石棺南小口加工部（南より）



石棺北小口穿孔部（北より）





棺蓋上面及び縄掛け突起の様子1（上が南）



棺蓋上面及び縄掛け突起の様子2（上が北）





棺蓋南西縄掛突起(西より)

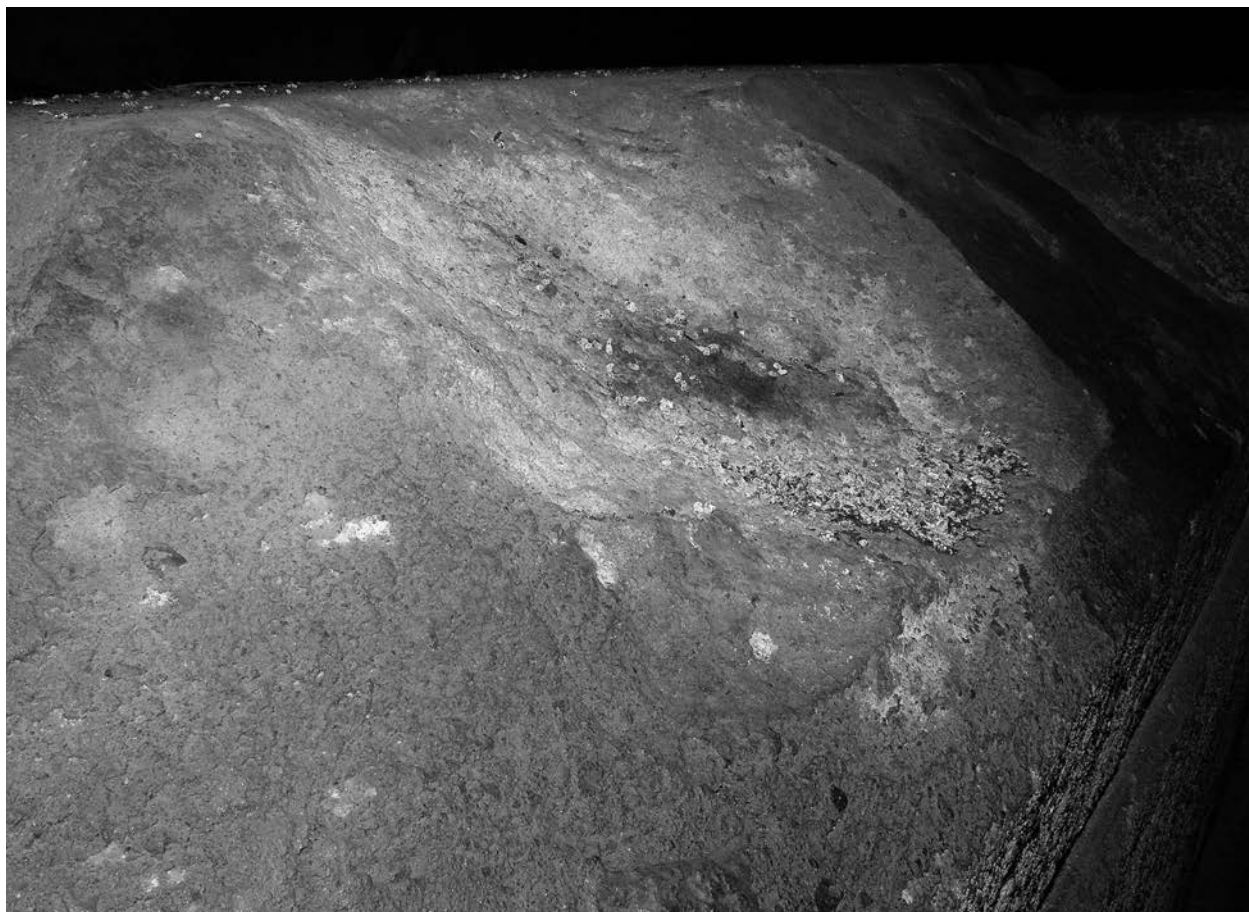


棺蓋南西縄掛突起(北西より)





棺蓋南西縄掛突起(南西より)



棺蓋北西縄掛突起部(北西より)





棺蓋南東縄掛突起(南東より)



棺蓋南東縄掛突起(北東より)





棺蓋北東縄掛突起 (南東より)



棺蓋南縄掛突起 (南より)





棺蓋南縄掛突起(西南より)



棺蓋南縄掛突起(東南より)





棺蓋北縄掛突起(北より)

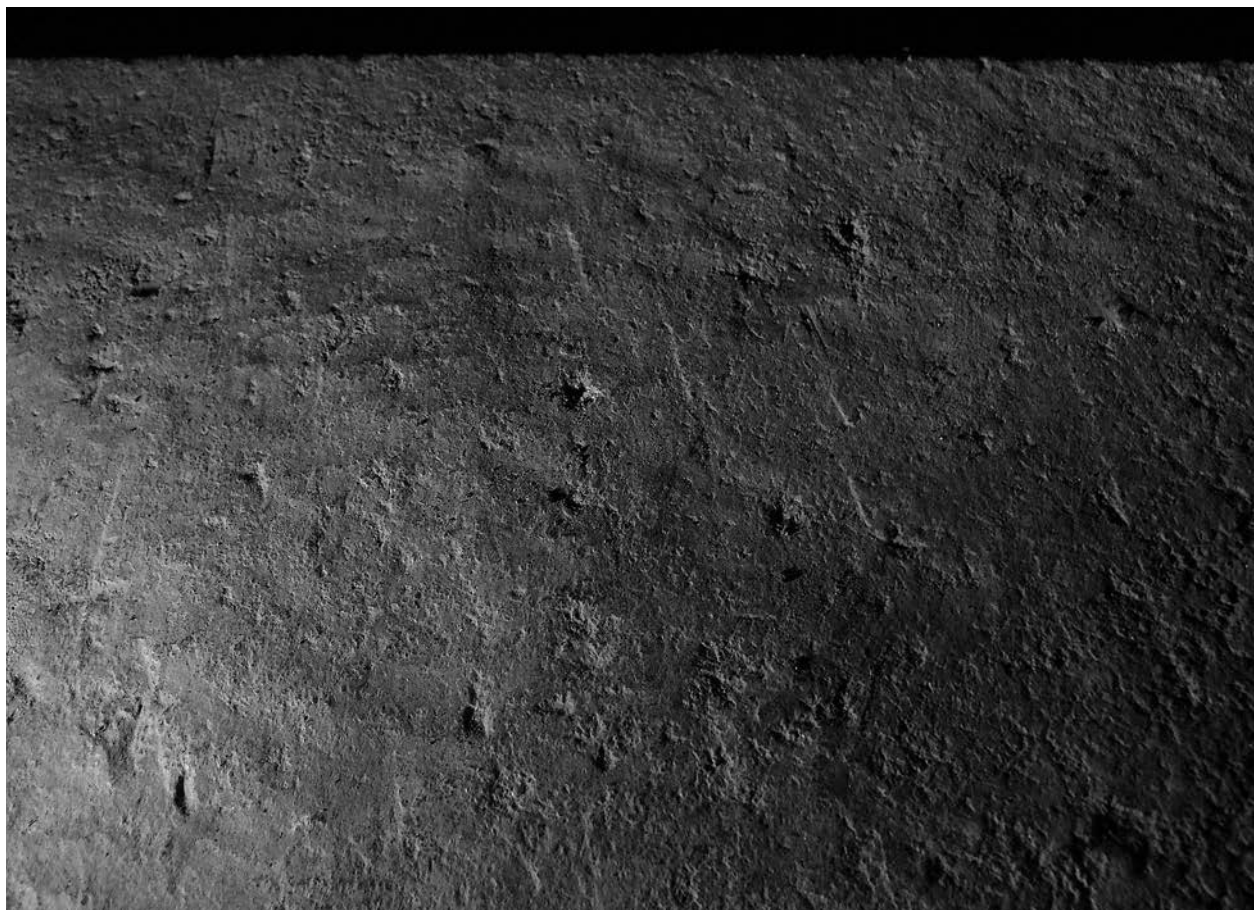


棺蓋北縄掛突起(北東より)





棺蓋北縄掛突起(北西より)

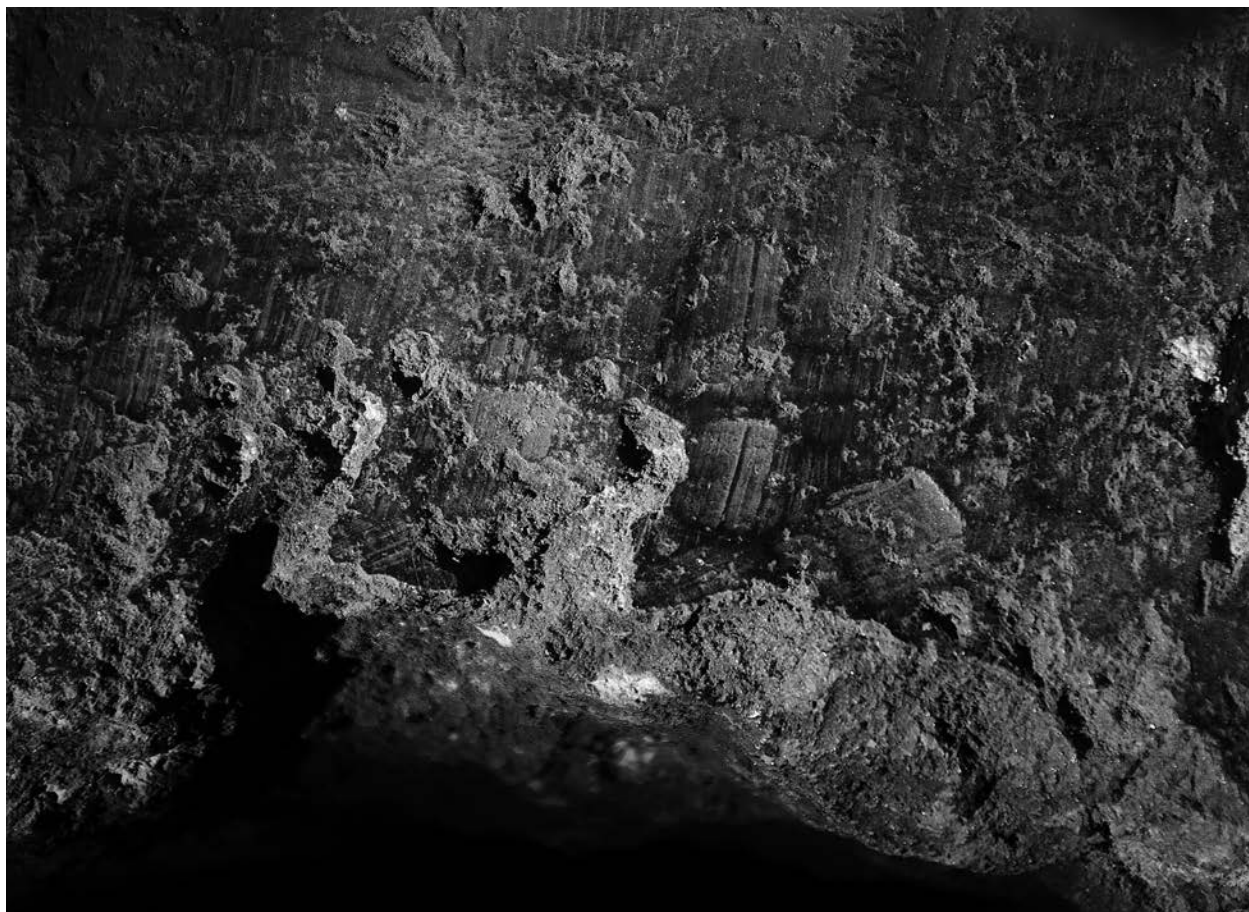


棺蓋東傾斜面に残る工具痕跡(東より)



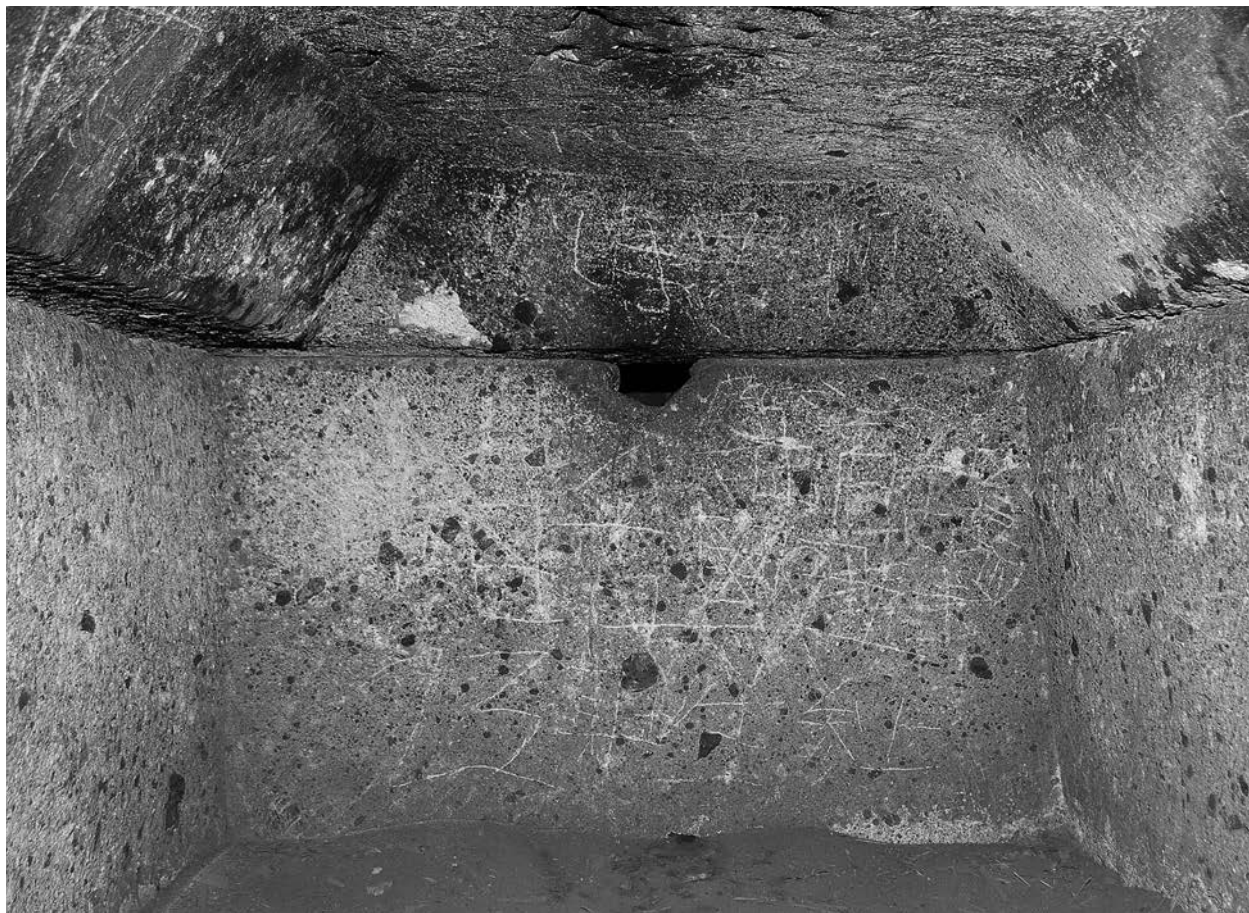


棺蓋西傾斜面に残る工具痕跡（西より）



棺蓋南繩掛突起下に残る工具痕跡（南より）



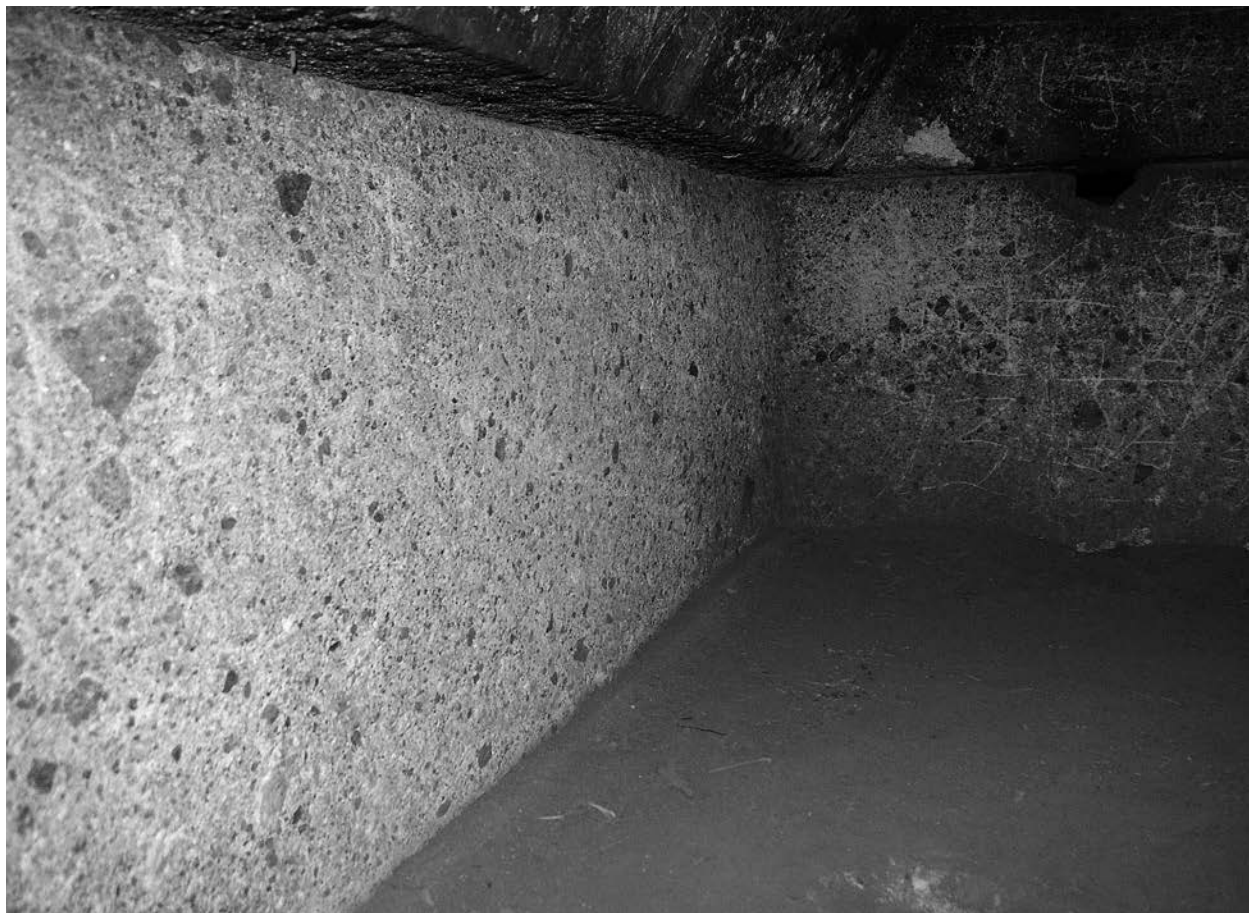


石棺内部北小口の様子（南より）

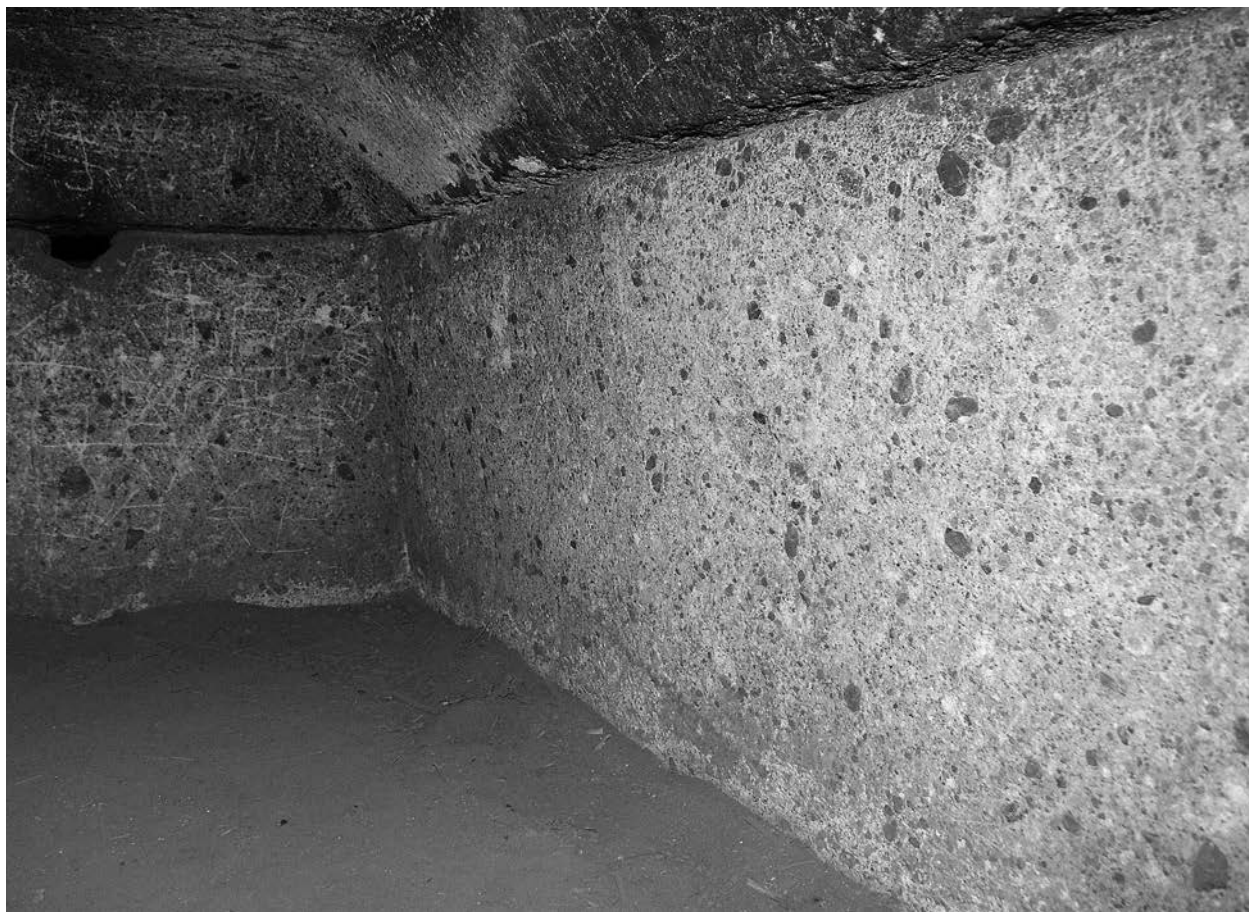


石棺内部南小口の様子（北より）



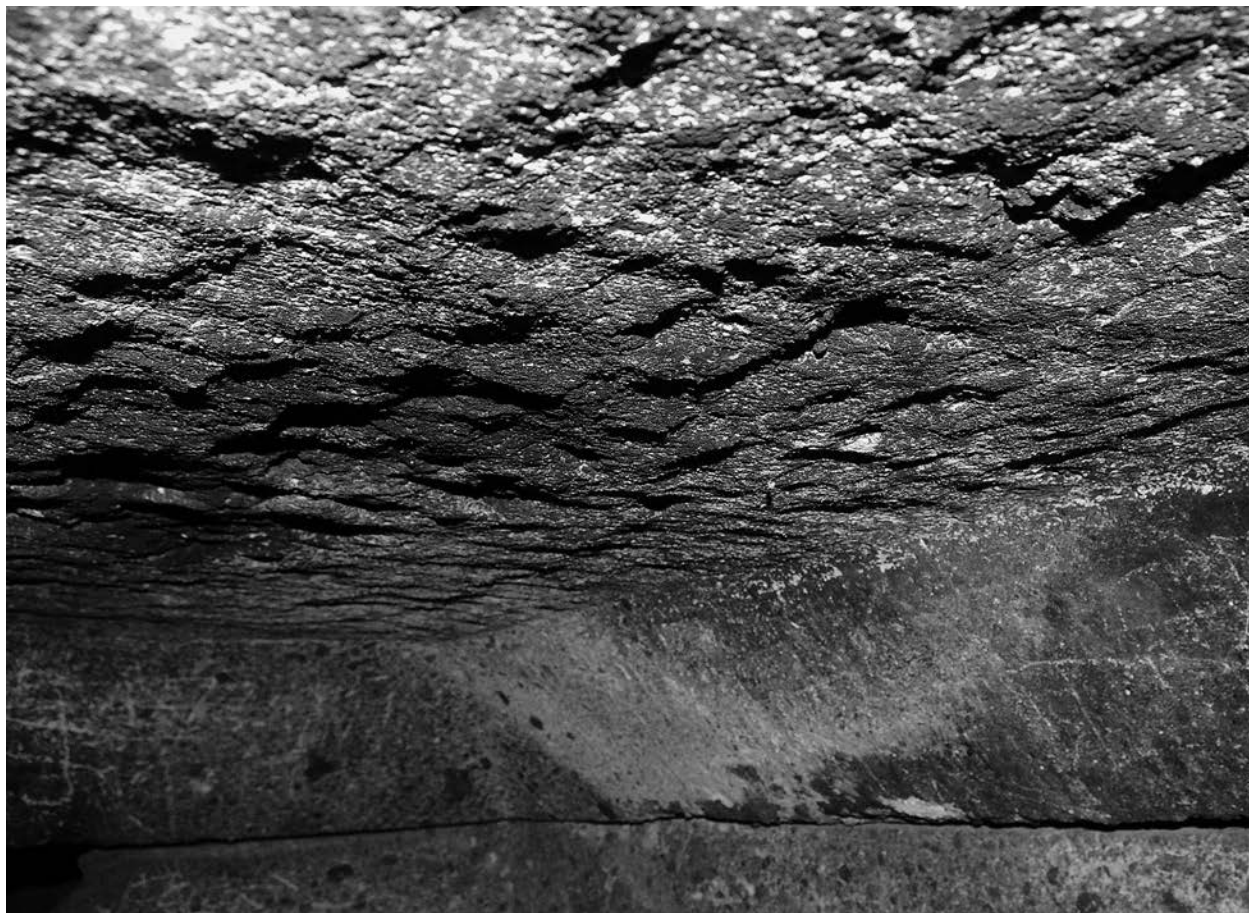


石棺内部西棺側及び北小口の様子（南より）



石棺内部東棺側及び北小口の様子（南より）





石棺内部北側天井部の工具痕（南西より）



石棺内部南側天井部の工具痕（北より）





墳丘全景（北東より）



墳丘全景（南東より）